

しも ぶん とお ざき
下分遠崎遺跡Ⅳ

— 香我美中学校体育館改築工事に伴う発掘調査報告書 —

2010.1

香南市教育委員会

しも ぶん とお ざき 下分遠崎遺跡Ⅳ

— 香我美中学校体育館改築工事に伴う発掘調査報告書 —

2010.1

香南市教育委員会



北区 香我美中学校生徒現地説明会（東から）



北区 SK6遺物出土状況



南区 SK14出土弥生土器



南区 SK31出土腕輪

序

香南市は、平成18年3月に、赤岡町・香我美町・野市町・夜須町・吉川村の5町村が手をつなぎ合併したまちです。青い空・碧い海・深い緑、そして実り豊かな大地と温暖な気候風土の恩恵を受け、早くから先人達が歴史を創ってきた地域です。

遺跡は大地に刻み込まれた歴史そのものであり、私たちの祖先の偽らざる営みを今日に伝えるかけがえのない遺産です。当市は、県内有数の埋蔵文化財の宝庫であり旧町村より発掘調査した遺物も数多くあります。遺跡の発掘調査や整理作業を行うとともに、市内外の方々に香南市の文化財に接していただく拠点として、平成21年4月に香南市文化財センターを開設することとなりました。

下分遠崎遺跡は、昭和58年の発見以来これまで3回発掘調査を実施してきました。今から遠く約2,400年前の弥生時代の集落跡ではありますが、出土した土器の美しさには目を見張るものがあり、弥生時代の人々の技術の高さがうかがわれます。

本書は、香南市文化財センターを開設後最初の報告書となりました。香南市の歴史を広く知っていただくとともに、埋蔵文化財に対する一層のご理解をいただきますことを願って刊行するものです。文化財保護の資料として広く活用されれば幸いです。

最後になりましたが、高知県教育委員会、高知県埋蔵文化財センター出原恵三氏はじめ多数の方々のご協力をいただいたことに心からお礼申し上げます。

平成22年1月

高知県香南市教育委員会
教育長 島 崎 隆 弘

例 言

1. 本書は、平成11年度香我美中学校体育館改築工事に伴う、下分遠崎遺跡の発掘調査報告書である。平成18年3月1日に香我美町は、赤岡町・野市町・夜須町・吉川村の5町村による合併を行い香南市となったため、香南市教育委員会が引き継ぎ本報告書を発行するものである。

2. 下分遠崎遺跡は、高知県香美郡香我美町下分及び山北遠崎にある。

3. 調査対象面積1,000㎡、調査面積790㎡。調査期間は平成11年4月1日から6月9日までである。

4. 発掘調査は、香我美町教育委員会が行った。調査体制は、下記のとおりである。

調査員 岡本 修（香我美町教育委員会）

調査指導 出原恵三（高知県文化財団埋蔵文化財センター）

5. 現在の香南市教育委員会生涯学習課文化振興保護係の体制

課 長 吉田 豊 嘱託職員 宮地 啓介

係 長 山本 八也 臨時職員 小松 経子

主任調査員 松村 信博 〃 宮本 幸子

主 監 竹中 ちか 〃 水田 紀子

主 幹 伊野 広高 〃 福島 賀代子

6. 遺物整理等の作業は、平成11年6月から平成12年3月まで行った。

7. 本書の執筆・編集は、高知県文化財団埋蔵文化財センター班長出原恵三氏の指導で香我美町教育委員会の岡本修が行い、香南市に合併後山本八也が加筆修正を加えてまとめを執筆し、土器の考察は松村信博が行った。

8. 現場作業においては、貞岡重道・佐野宣重・佐々木竜男・吉川誠喜・大黒貞之・島内信輔・村上義昭・檀尾俊喜・西山明宏・石川弘巳・河村美佐子・吉川徳子氏の協力を得た。（順不同、敬称略）

9. 遺物整理、報告書作製に際しては、下記の方々の協力を得た。記して謝意を表します。

松木富子・川久保香・入野三千子・浜田恵子・山本由里・山口知子・山本純代・浜田雅代（順不同、敬称略）

10. 報告書作製に際しては、佐藤洋一郎（平成11年度静岡大学農学部助教授 現在 総合地球環境学研究所）、田中克典（総合地球環境学研究所）、富岡直人（平成11年度 岡山理科大学理学部生物化学科講師 現在 岡山理科大学総合情報学部生物地球システム学科准教授）、（株）東都文化財保護研究所のご協力を得た。記して謝意を表します。（順不同、敬称略）

11. 今回は、下分遠崎遺跡の4回目の発掘調査（4次調査）であることから、報告書名を『下分遠崎遺跡Ⅳ』とした。1次調査（昭和61年10月13日～12月16日 試掘調査）と、2次調査（昭和63年10月3日～11月28日 本発掘調査）の調査主体は香我美町で、3次調査（平成5年9月24日～10月31日本発掘調査）の調査主体は（財）高知県文化財団埋蔵文化財センターである。

12. 当遺跡出土資料は、香南市文化財センターが保管している。遺跡の略号は、99-16KSである。



本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経過	1
第Ⅱ章 歴史・地理的環境	4
第Ⅲ章 調査の方法	7
第Ⅳ章 調査の成果	9
1. 北区	
(1) 北区の概要	9
(2) 基本層序	9
(3) 検出遺構と遺物	9
①土坑	10
②性格不明遺構	12
③旧河道出土遺物	12
④包含層出土遺物	15
2. 南区	
(1) 南区の概要	21
(2) 基本層序	21
①北壁	21
②南壁	21
(3) 検出遺構と遺物	22
ア 上面	
①土坑	22
②溝跡	23
③性格不明遺構	26
④ピット	26
イ 中面	
①土坑	27
②溝跡	31
ウ 下面	
①土坑	32
②性格不明遺構	40
③溝跡	40
④ピットその他	40
⑤包含層	43
3. 遺物観察表	50

第V章	考察 下分遠崎遺跡4次調査出土の弥生土器	63
第VI章	まとめ	77
第VII章	自然科学分析	81
	第1節 下分遠崎遺跡から出土したイネの調査報告	81
	第2節 下分遠崎遺跡出土の動物遺存体の分析実績報告書	91
	第3節 下分遠崎遺跡出土材の樹種	101

図版目次

第1図	調査区位置図	2
第2図	下分遠崎遺跡と周辺の遺跡分布図	6
第3図	調査区割付図	7
第4図	北区東壁セクション図	9
第5図	北区検出遺構配置図	10
第6図	SK1・2平面・エレベーション図及び出土土器実測図	11
第7図	SK3・4・5平面・エレベーション図及び出土土器実測図	12
第8図	SK6平面・エレベーション図及び出土土器実測図	13
第9図	SK6出土土器実測図	14
第10図	SX1出土土器・石器実測図	15
第11図	北区斜面堆積土層図	16
第12図	旧河道出土土器実測図	16
第13図	北区遺物包含層出土土器実測図(1)	17
第14図	北区遺物包含層出土土器実測図(2)	18
第15図	北区遺物包含層出土土器実測図(3)	19
第16図	北区遺物包含層出土土器・石器実測図	20
第17図	南区北壁セクション図	21
第18図	南区南壁セクション図	21
第19図	南区上面検出遺構配置図	22
第20図	SK8・10・18・20平面・エレベーション図	23
第21図	SK19平面・エレベーション図及び出土土器・石器実測図	24
第22図	SK18・SX2・SD2平面・エレベーション図及びSD2出土土器・石器実測図	25
第23図	SX2出土遺物実測図	26
第24図	南区中面検出遺構配置図	27
第25図	SK15平面・エレベーション図及び出土土器実測図	28
第26図	SK15出土土器実測図	29

第27図	SK22・23・25・26・27・SD4平面・エレベーション図及び出土土器実測図	30
第28図	南区下面検出遺構配置図	31
第29図	SK12・13・17平面・エレベーション図及び出土土器実測図	33
第30図	SK14平面・エレベーション図及び出土土器実測図	34
第31図	SK14出土土器実測図	35
第32図	SK14出土土器・石器実測図	36
第33図	SK28・29平面・エレベーション図及び出土土器実測図	37
第34図	SK30・31平面・エレベーション図及び出土土器・石器実測図	38
第35図	SK32～37平面・エレベーション図及び出土土器実測図	39
第36図	SD3平面・エレベーション図及び出土土器・石器実測図	41
第37図	SX3平面・エレベーション図及び出土土器実測図	42
第38図	南区包含層出土土器実測図(1)	43
第39図	南区包含層出土土器実測図(2)	44
第40図	南区包含層出土土器実測図(3)	45
第41図	南区包含層出土土器・石器実測図	46
第42図	SK31・SX3・SD2・南区東斜面出土木製品実測図	47
第43図	SK13・SX3・SD3・南区東斜面出土木製品実測図	48
第44図	SK31・SK34・SX3・P23・35・89・141・南区東斜面出土木製品実測図	49

表目次

表1	弥生土器観察表(1～11)	50
表2	石器観察表	61
表3	木製品観察表	62
表4	遺構の時期と出土遺物の様相	67
表5	下分遠崎遺跡全調査遺物一覧表(木製品、自然遺物)	78

写真図版目次

巻頭図版1 北区香我美中学校生徒現地説明会(東から)、北区SK6遺物出土状況

巻頭図版2 南区SK14出土弥生土器、南区SK31出土腕輪

図版1 北区全景(北西から)、北区遺物包含層検出状況

図版2 北区遺構完掘状況(北東から)、北区東壁セクション

- 図版 3 北区遺構検出状況、北区完掘状況（南東から）
- 図版 4 北区SK1・SK2・SK3完掘状況、SK2遺物出土状況、SK6土器集中状況
- 図版 5 南区全景、南区遺構検出状況（東から）
- 図版 6 南区完掘状況（東から）、南区完掘状況（西から）
- 図版 7 南区南壁セクション、南区北壁セクション
- 図版 8 南区SK14・SK19土器集中状況
- 図版 9 南区SK31ウリ種子・ニホンジカ臼歯出土状況
- 図版10 南区SK12・SK25・SK26・SK28・SK30完掘状況、南区SK15・SK29遺物出土状況
- 図版11 南区SK31・SK33・SD3・SX3・東斜面遺物出土状況、南区SK33完掘状況
- 図版12 北区SK1・SK4・SK6出土弥生土器
- 図版13 北区SK2・SK6・SD1・包含層出土弥生土器
- 図版14 北区包含層出土弥生土器
- 図版15 南区SK15・SK19・SX2出土弥生土器
- 図版16 南区SK12・SK15・SK28・SK31・SD3出土弥生土器
- 図版17 南区SK14出土弥生土器
- 図版18 南区SK14出土弥生土器
- 図版19 南区SX3・P135・包含層出土弥生土器
- 図版20 南区SK14出土被熱した弥生土器、石鏃
- 図版21 北区SX1・包含層、南区SD2・SX2出土ヘラ描沈線を施した弥生土器
南区SK29・SK31・SK35・SD3・SX3出土ヘラ描沈線を施した弥生土器
- 図版22 石器、獣骨(1)
- 図版23 獣骨(2)、獣骨(3)
- 図版24 木製品
- 図版25 高温被熱により変形し、器表が海綿状になった土器片

第I章 調査に至る経過

下分遠崎遺跡は、昭和58年（1983）に道路側溝の工事中に、偶然に発見された遺跡である。これまで県道の南側を中心に、圃場整備や県道の拡張工事に伴って3回の発掘調査を実施してきた。その結果、弥生時代前期末～中期前半（約2,400～2,300年前）に営まれた集落跡であることが明らかになった。

この遺跡は、低湿地に立地していることから、土器や石器の他に、たくさん木製品（鋏・鋤・杵・建築材）、動物の骨（シカ・イノシシ・ツキノワグマ）、植物の種子（イネ・ドングリ・ヤマモモ・ヒョウタン・メロン）、魚類ではカツオの背骨などの自然遺物が出土していることが特徴である。高知県では田村遺跡など弥生時代の遺跡の調査が数多く行われているが、調査時点で下分遠崎遺跡のように自然遺物に恵まれた遺跡は他になく、弥生人の食生活や当時の自然環境を具体的に知ることのできる貴重な資料として注目を集めた。

今回の発掘調査は香我美中学校体育館の改築工事に伴うものである。香我美町は平成14年（2002）高知国体のウェイトリフティング競技の会場となることから、その会場を整備するにあたり、老朽化した香我美中学校体育館改築の必要が生じた。

この体育館の改築工事敷地が下分遠崎遺跡の包蔵地内であるところから、香我美町教育委員会では、事業に先立って平成10年8月に、事業対象地1,000㎡の中で、5グリット60㎡について試掘調査を実施した。その結果全グリットの地表下約150cmの深さに遺構・遺物包含層が存在する事を確認した。出土遺物は、弥生時代が中心である。

最終的に事業対象地全部について、記録保存のための発掘調査を実施する事になった。

調査は、機材搬入など準備を整え、平成11年4月から開始した。



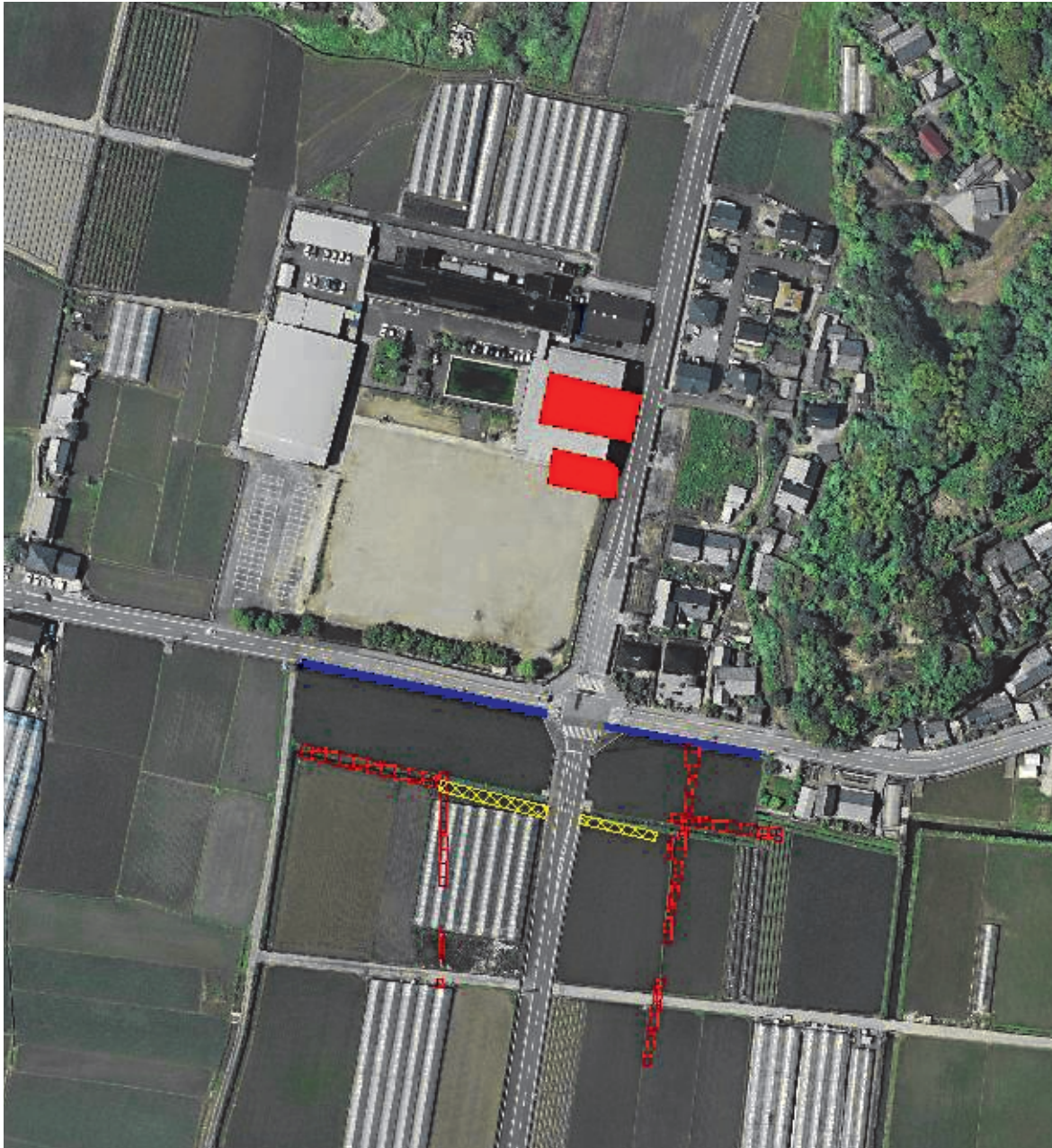
調査前全景（北西から）



第1図 調査区位置図

下分遠崎遺跡の調査経過

	調査期間	調査主体	調査面積
第1次調査	昭和61年10月13日～12月16日	香我美町教育委員会	1,382㎡
第2次調査	昭和63年10月3日～11月28日	〃	410㎡
第3次調査	平成5年9月24日～10月31日	高知県埋蔵文化財センター	350㎡
第4次調査	平成11年4月1日～6月15日	香我美町教育委員会	1,000㎡



調査区 航空写真

凡 例

第1次調査	
第2次調査	
第3次調査	
第4次調査	

第Ⅱ章 歴史・地理的環境

高知県は、北を四国山地に囲まれ南は太平洋に面し、東西に長い海岸線を持っている。

その中央部に展開する高知平野は、南四国最大の穀倉地帯であり、かつては二期作地帯として有名であったが、現在は施設園芸作物のビニールハウス栽培地域へと大きく変貌している。

高知平野とその周辺部には縄文時代から近世に至る多くの遺跡が立地しており、物部川下流域右岸の自然堤防上には、弥生時代と中世とを中心とした拠点集落跡である田村遺跡群⁽¹⁾が立地している。

下分遠崎遺跡のある香我美町は、南北に細長く町の大部分は山林であるが東から山南川・香宗川・山北川が山間を縫うようにして流れ十萬付近で山南川が香宗川に合流し、更に野市町中ノ村で山北川が香宗川に合流している。

十萬付近から香宗川によって形成された沖積平野が広がり高知平野の東端部を占めている。南部は、海岸沿いに砂丘が形成され現市街地となっているが、その北側は低地が広がっている。

弥生時代の遺跡は、沖積平野や三河川流域の谷平野に散在する。前期は下分遠崎遺跡⁽²⁾・十萬遺跡⁽³⁾・拝原遺跡⁽⁴⁾を挙げることができる。共に前期新段階から開始される。

下分遠崎遺跡は、香南市香我美町下分及び山北遠崎にあり高知平野の東端部に開けた沖積地に位置している。田村遺跡群からは、物部川を隔て東方約6km、現海岸線から約3kmの地点にあり、標高は10m前後である。これまで県道の南側を中心に、圃場整備や県道の拡幅工事に伴って3回の発掘調査を実施してきた。その結果、弥生時代前期末～中期前半（約2,200年前）に営まれた集落跡であることが明らかとなった。注目すべき成果は、県下初の木製品とともに多量の獣骨や炭化米各種種子やカツオの脊椎骨が出土したことである⁽⁵⁾。

拝原遺跡は、香我美町上分にあり、平成3年の発掘調査によって、少量ではあるが縄文後期土器が出土、宿毛式土器が県中央部にも分布することが明らかになった⁽⁶⁾。ここでは、弥生後期後半から古墳時代前期の竪穴式住居が9棟確認された⁽⁷⁾。弥生終末に始まり古墳時代初頭に廃絶するという短命な集落跡が一般的傾向であるが、この集落は存続期間が長いという特徴がある。古墳時代中期は空白であるが、6世紀に再び竪穴住居や大溝が出現し以後古代・中世へと続く。

下分遠崎遺跡は、比較的規模の大きな集落跡であると考えられるが、他の二遺跡は極めて小規模な遺跡であり、独立した経営形態であるとは考えられない。おそらく下分遠崎遺跡を核とした共同体を構成するものであろう。また、これらの3遺跡は共に中期中葉で終わり後半には続かない。中期後半になると統率されたように集落が低地から消え、山上に上がる。後期になると再び平地に現れるようになるが、沖積平野ではなく、河川の中流域の谷平野に営まれる例が多くなる。山南川流域では十萬遺跡・拝原遺跡・稗地遺跡⁽⁸⁾を、香宗川流域では、幅山遺跡⁽⁹⁾を、山北川流域では宮の前遺跡・宮の西遺跡などを挙げることができる。当該期の遺跡立地に見られるような動向は、当地域のみならず県下の認められる現状である。

古墳時代に入るとこれらの集落のほとんどは再び消滅し、後期になると鳴子・幅山などに小規模



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	下分遠崎遺跡	弥生	15	大崎山古墳	古墳	29	上岡北遺跡	弥生・近世
2	曾我遺跡	弥生～中世	16	兎田柳本遺跡	弥生～古墳	30	上岡遺跡	弥生・平安
3	中城跡	中世	17	刈谷城跡	中世	31	下ノ坪遺跡	弥生～古代
4	久保田遺跡	中世	18	国吉城跡	中世	32	北地遺跡	弥生～中世
5	十万遺跡	縄文～近世	19	十万城跡	中世	33	西野遺跡群	弥生～古代
6	東十万城跡	中世	20	花宴遺跡	弥生	34	深淵遺跡	弥生～中世
7	拝原遺跡	弥生～中世	21	徳王子大崎遺跡	弥生～中世	35	深淵北遺跡	弥生～中世
8	稗地遺跡	弥生～中世	22	徳王子広本遺跡	弥生～中世	36	母代寺土居屋敷遺跡	古代～中世
9	下幅遺跡	弥生・古墳	23	徳王子前島遺跡	弥生～中世	37	野口遺跡	弥生～中世
10	中幅遺跡	弥生・古墳	24	徳善城跡	近世	38	南中曾遺跡	弥生・古墳
11	前田城跡	中世	25	クノ丸遺跡	中世	39	大東遺跡	古墳～平安
12	岡野芝遺跡	古墳～中世	26	江見遺跡	古墳	40	口横ヶ谷遺跡	弥生・古代～中世
13	四坊遺跡	中世	27	東野土居遺跡	古墳～近世			
14	本村遺跡	弥生	28	香宗遺跡	中世			

第2図 下分遠崎遺跡と周辺の遺跡分布図

な円墳が築かれるが、遺跡数が少なく動向が把握できない。

奈良時代になると、十万遺跡¹⁰⁾には8世紀後半に属する掘立柱建物13棟が出現する。付近一帯は「大忍郷」として律令国家の地方行政組織に組み込まれていくが、この建物群は郡衙などの役所に出仕する豪族層の館として位置づけられる。

鎌倉時代に入ると先に挙げた縁三河川の流域は、小領主化への道を歩みはじめる。

戦国期には、山北川・香宗川の中・上流域には20余りの山城が築かれ、現在も比較的良好な状態で残っている。

参考文献

- 香我美町教育委員会『香我美町史』 上巻 1985年
同 下巻 1993年

引用文献

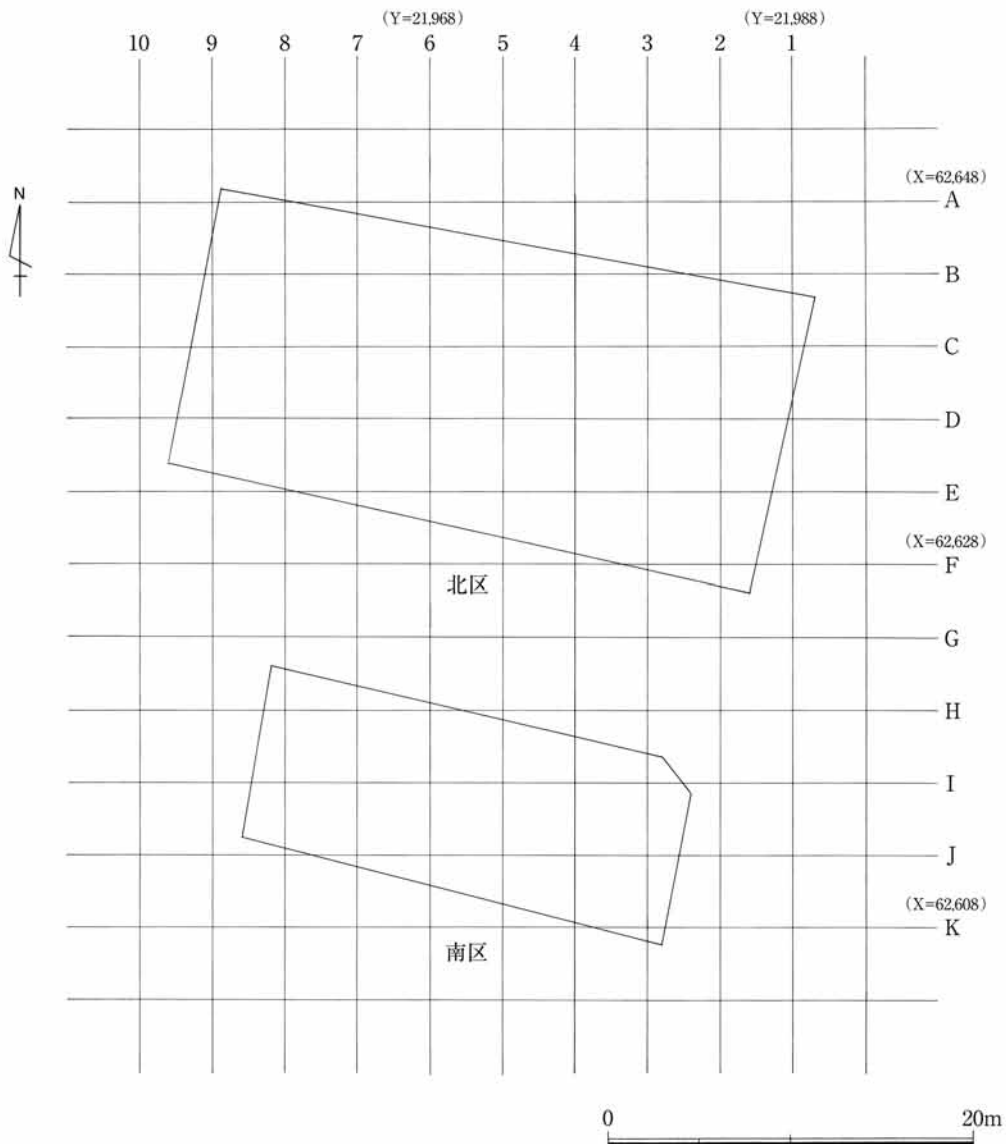
- (1) 『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第1～15分冊
高知県教育委員会 1986年
- (2) 出原恵三・高橋啓明『下分遠崎遺跡試掘調査概報』香我美町教育委員会 1987年
出原恵三・高橋啓明『下分遠崎遺跡（Ⅰ）』香我美町教育委員会 1989年
出原恵三『下分遠崎遺跡（Ⅱ）』香我美町教育委員 1993年
出原恵三・坂本憲明『下分遠崎遺跡』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1994年
- (3) 高橋啓明・出原恵三・吉原達生『十万遺跡発掘調査報告書』香我美町教育委員会 1988年
- (4) 出原恵三『拝原遺跡』香我美町教育委員会 1993年
- (5) 調査当時は弥生時代の木製品や獣骨を出土する遺跡は高知県内では他に例がなく、注目を集めた。カツオの脊椎骨は、1988年度の調査で出土している。
渡辺誠「高知県香我美町下分遠崎遺跡出土の自然遺物」（『下分遠崎遺跡（Ⅰ）』1989年）
- (6) 宿毛式土器の他にも松ノ木式土器・片粕式土器が出土、縄文時代後期前半から中葉にかけての生活の痕跡が確認されている。同(4)
- (7) 特にST5・6出土資料は高知平野の古式土師器Ⅲ期の基準として重要である。同(4)
- (8) 松田知彦『稗地遺跡』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1993年
- (9) 岡本修『幅山遺跡』香我美町教育委員会 1999年
- (10) 出原恵三「第10章 第2節 遺跡 第2項 十万遺跡」『香我美町史』下巻 1993年

第Ⅲ章 調査の方法

本遺跡の過去3回の調査結果及び、平成10年度の試掘調査によって、今次調査区及びその周辺は、ほぼ全面にわたって遺物・遺構の存在が予想される場所であった。

平成10年度の試掘調査が未だ旧体育館が取り壊し前のため、調査区南方のみの確認しかできなかった。平成11年3月に旧体育館の取り壊しが終わった後、調査区北西端を、約150cm重機で掘り下げ再度確認し、弥生の土器などの確認が得られたため、平成11年4月1日から本調査に移った。

工事によって削平される範囲について、約130cmを重機によって一気に掘り下げ、遺物包含層より上面については、遺物などを検出しながら重機と人力の併用で行い、遺物包含層から下層については人力で下げ、遺構検出に努めた。



第3図 調査区割付図

包含層の遺物取り上げ、遺構実測については任意に磁北を定めて、北から南に向かってアルファベットA・B・C・・・、東から西に向かって1・2・3・・・の数字を4mごとに付してグリッドを設定した。遺構の平面実測は基本的に20分の1の縮尺で図面化し、遺物の出土状況などについては必要に応じて縮尺を変えた。

基本層序については、調査区を北区と南区の2箇所と設定したため、北区東壁に一本、南区北壁・南壁各一本の計3本設定し、20分の1で原図を作成した。



北区遺構検出作業



南区遺構検出作業

第IV章 調査の成果

1. 北区

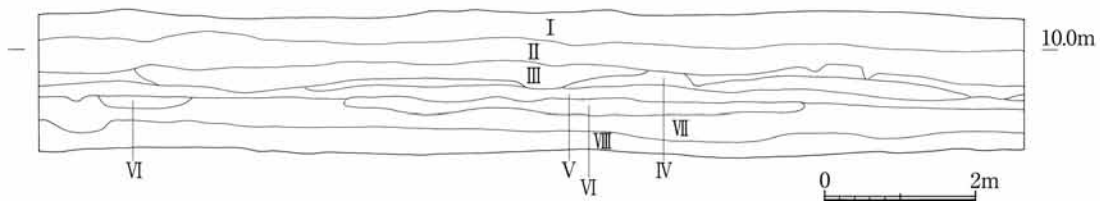
(1) 北区の概要

北区の調査面積は510㎡である。調査区は北西側半分とでは堆積状況がまったく異なっている。北西側は砂礫層が厚く堆積しており、南東側では弥生時代前期末葉～中期中葉の遺構が載っている粘土の基盤層が形成されている。当該期の旧地形は、北西方向に向かって旧河道と考えられている深い傾斜があり、南西から東北方向に走る微高地に生活面が形成されていたものと考えられる。

検出遺構は、弥生時代前期末～中期前半の土坑6基、炭化物の広がり（SX1）、ピット18基である。遺構検出面の直上には前期末～中期前半の包含層（Ⅷ層）が形成されており、旧河道を埋めた砂礫層からも微高地近くで遺物が出土している。

(2) 基本層序

北区の層序について、調査区東壁について述べる。

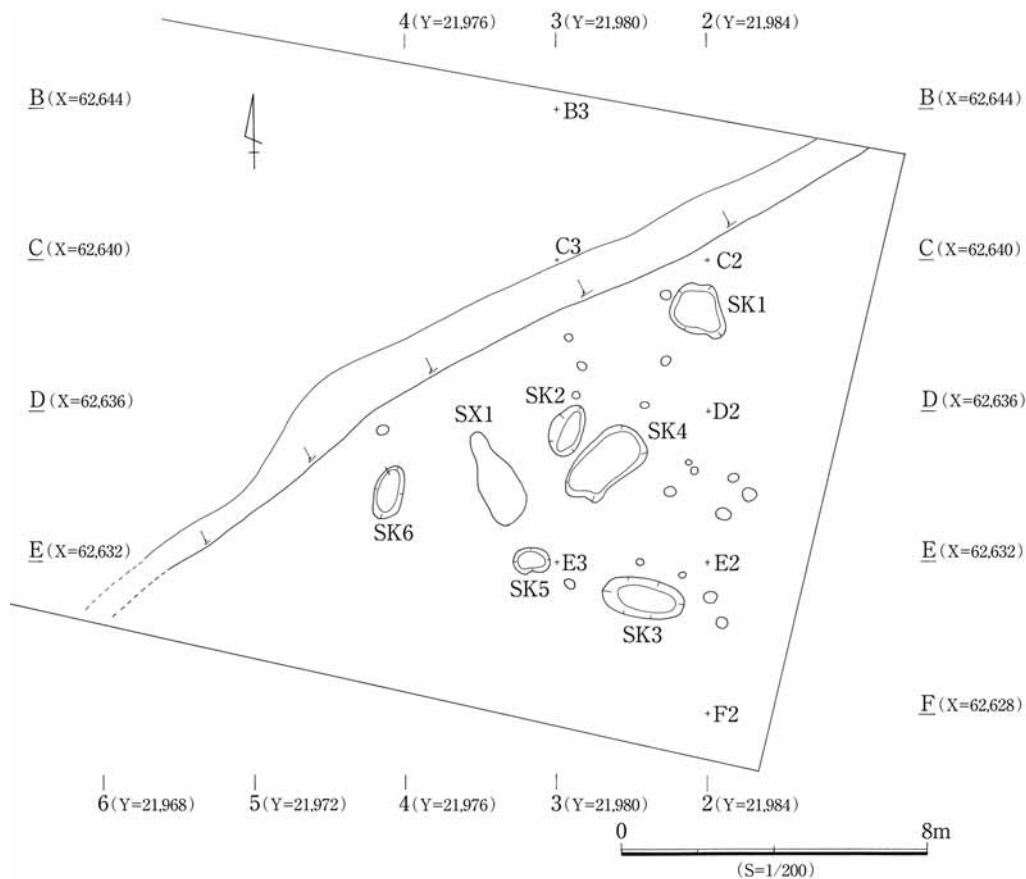


第4図 北区東壁セクション図

- I層：表土、客土
- II層：灰褐色粘土
- III層：砂礫層（風化砂岩多い）
- IV層：暗灰褐色粘土
- V層：暗褐色粘土
- VI層：礫層（0.5～6cmの風化岩を含む）
- VII層：灰褐色土（砂～シルト）
- VIII層：暗灰色粘土（包含層）

(3) 検出遺構と遺物

遺構は、Ⅷ層上面とⅧ層を除去した段階で検出したものがある。弥生時代前期末葉の遺構は両者が認められる。



第5図 北区検出遺構配置図

①土坑

SK1 (第6図)

調査区北部に位置する。東西1.60m、南北1.20m、深さ24cm、埋土は暗灰色粘土層である。遺物は、壺1点 (1)、鉢1点 (6) が出土している。前期末葉に属する。

SK2 (第6図)

調査区中央部に位置する。東西0.96m、南北1.40m、深さ16cm、埋土は暗灰粘土層である。遺物は、壺4点 (2・3・5・8)、甕2点 (4・9)、蓋1点 (7) が出土している。

SK3 (第7図)

調査区南部に位置する。東西2.20m、南北1.10m、深さ24cm、埋土は黒色粘土層である。遺物は、壺、甕の細片が出土している。

SK4 (第7図)

調査区中央部に位置する。東西2.40m、南北1.20m、深さ10cm、灰黒色粘土層である。遺物は、壺1点 (10)、甕片が出土している。中期前葉に属する。

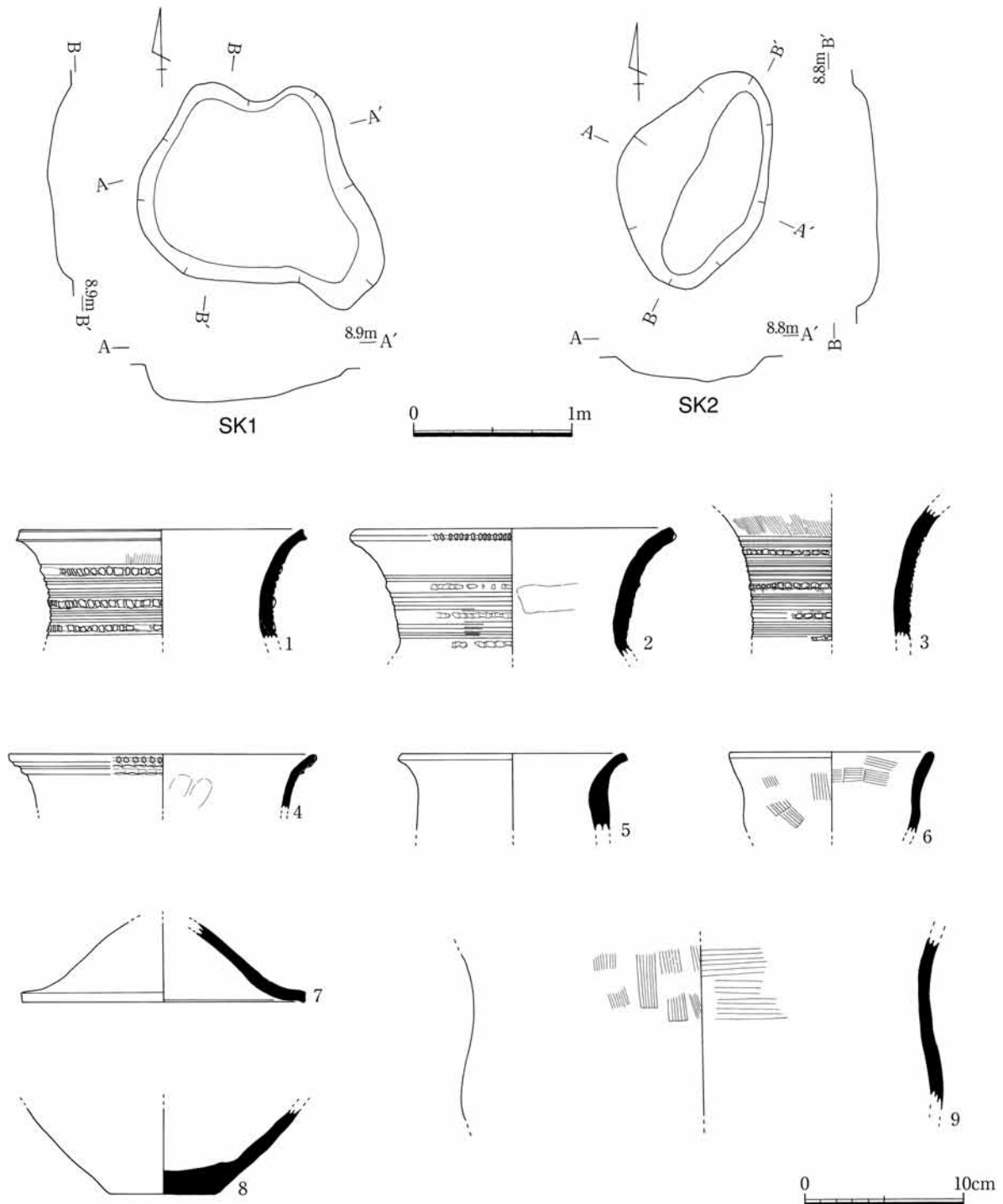
SK5 (第7図)

調査区南部に位置する。東西1.00m、南北0.60m、深さ20cm、埋土は炭化物が詰まっている。遺物は、壺片が2点出土している。中期前葉に属する。

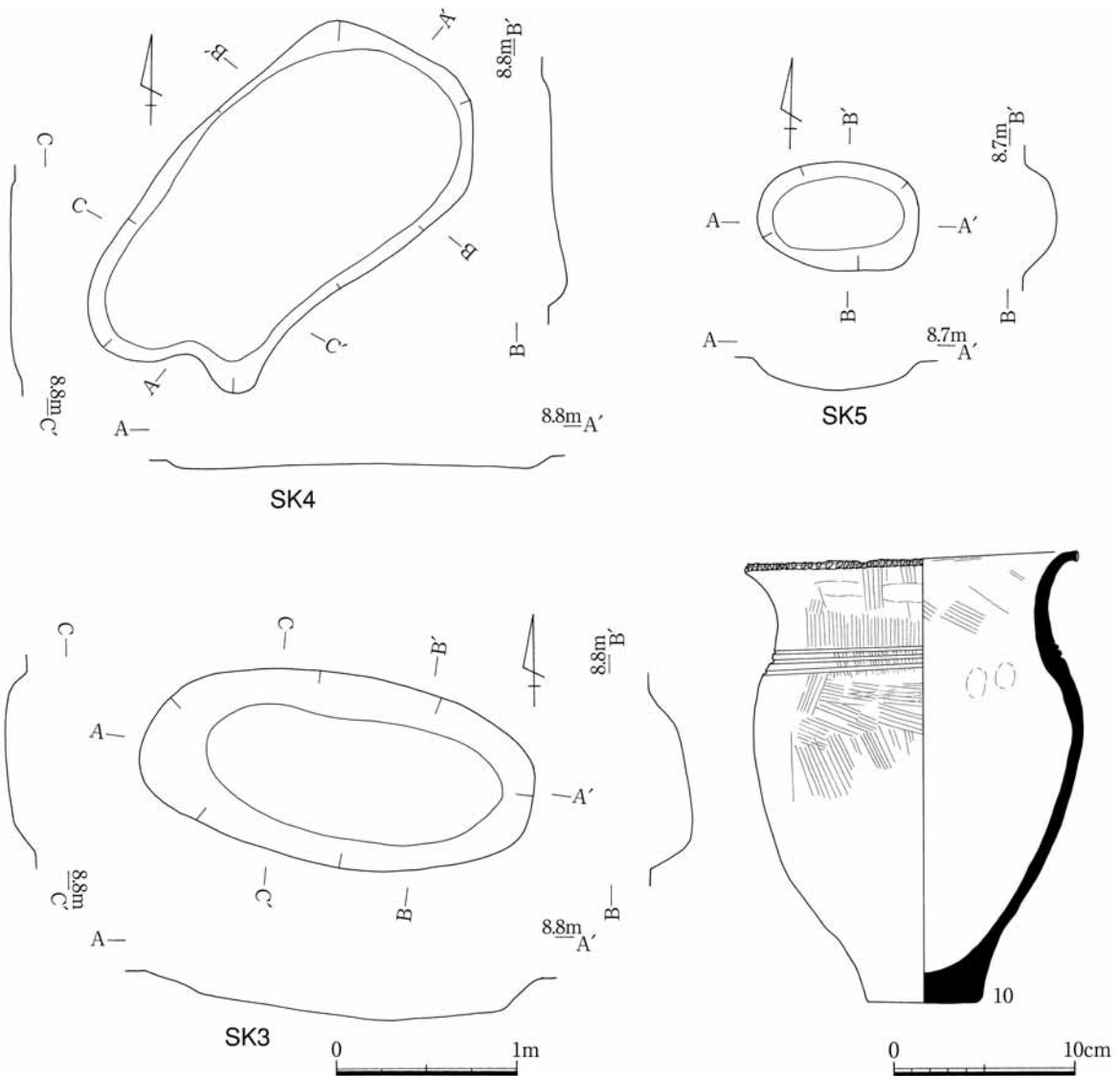
SK6 (第8・9図)

調査区中央部南に位置する。東西2.30m、南北2.30m、深さ22cm、埋土は淡褐色粘土層である。

検出面には意図的に割られたと考えられる10cm前後の土器片が敷き詰められた状態で出土した。多量の土器片と共に炭化物や高熱によって白色化した骨片、被熱破損した川原石も数多く出土している。土器の中で大型壺の破片には、いびつに歪み海綿状、または器面に気泡が見られ軽石状になった物も見られる。土坑床面が全く火を受けてないことから、これらの被熱遺物は別の場所で焼かれた後構内に入れられたものである。なお後述するように骨片は、イノシシ、ニホンカモシカ、イヌ、ノウサギ、ニホンザルなどである。



第6図 SK1・2平面・エレベーション図及び出土土器実測図



第7図 SK3・4・5平面・エレベーション図及び出土土器実測図

SK6の出土の土器組成を口縁部片で見ると、壺32点、甕3点、鉢1点である。この内図示できた物は、壺14点（11・12・13・15・16・17・18・19・20・21・22・24・26・27）、甕3点（14・23・25）である。壺が非常に多い組成を示しているが、SKの性格とも関連があるものと考えられる。

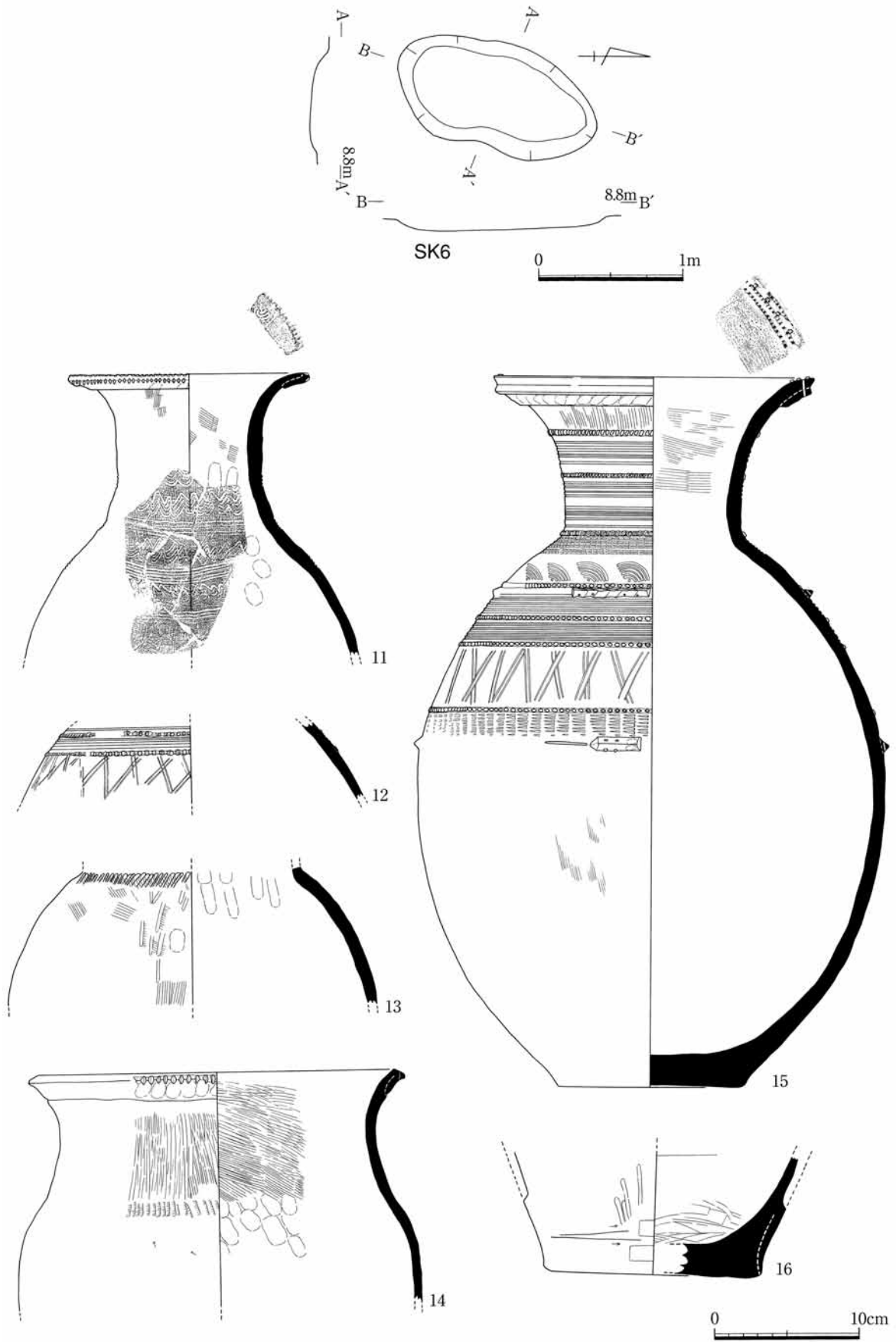
②性格不明遺構

SX1（第10図）

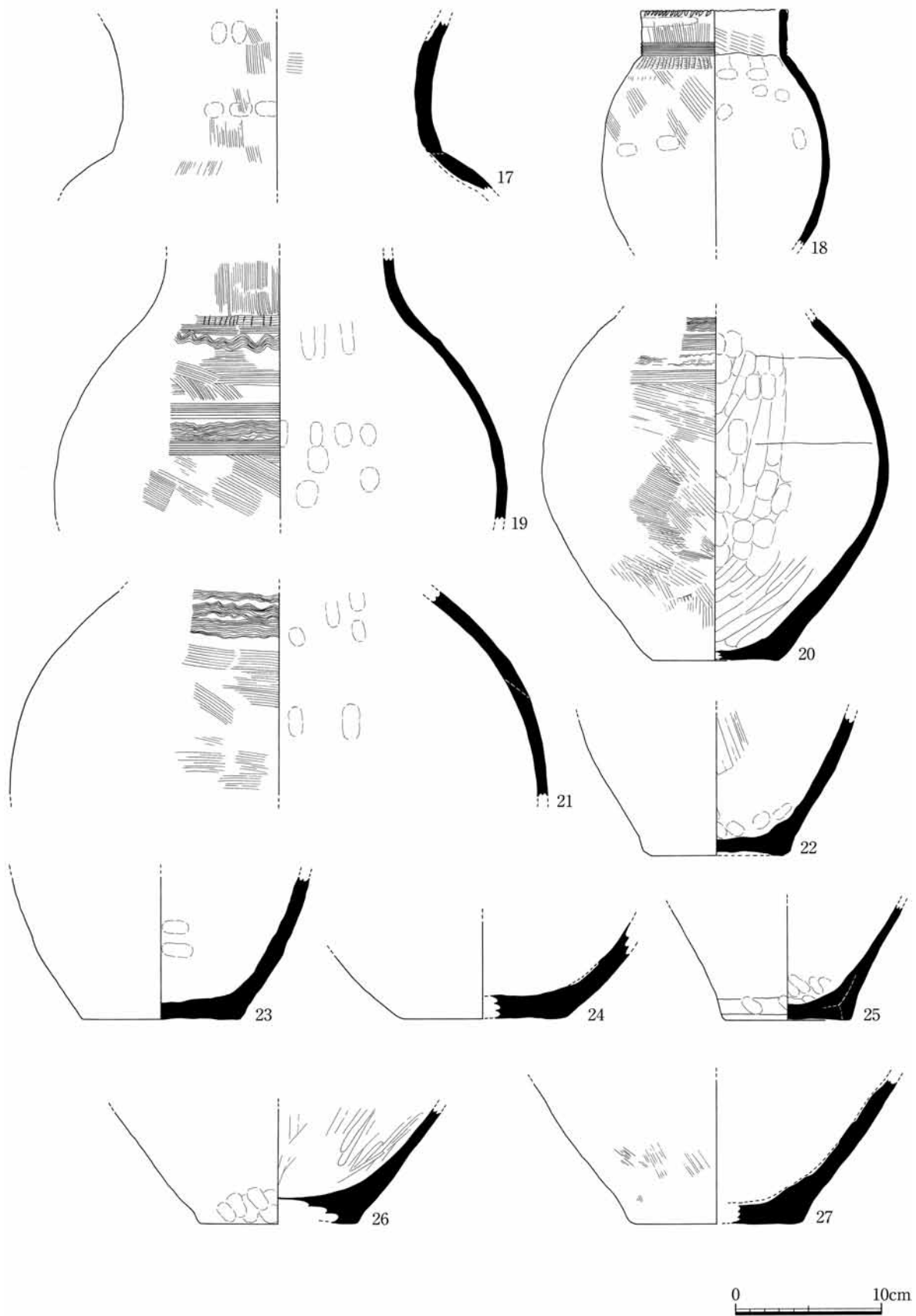
性格不明の炭化物の広がりをもSX1とした。長軸2.60m、短軸1.00mの楕円形に炭化物が広がっており浅い窪みが認められるが、床面や周囲が焼けた痕跡はない。遺物は、壺3点（28・31・32）、甕4点（29・30・33・34）、太形蛤刃石斧刃部1点（37）、叩石2点（35・36）が出土している。

③旧河道出土遺物（第11・12図）

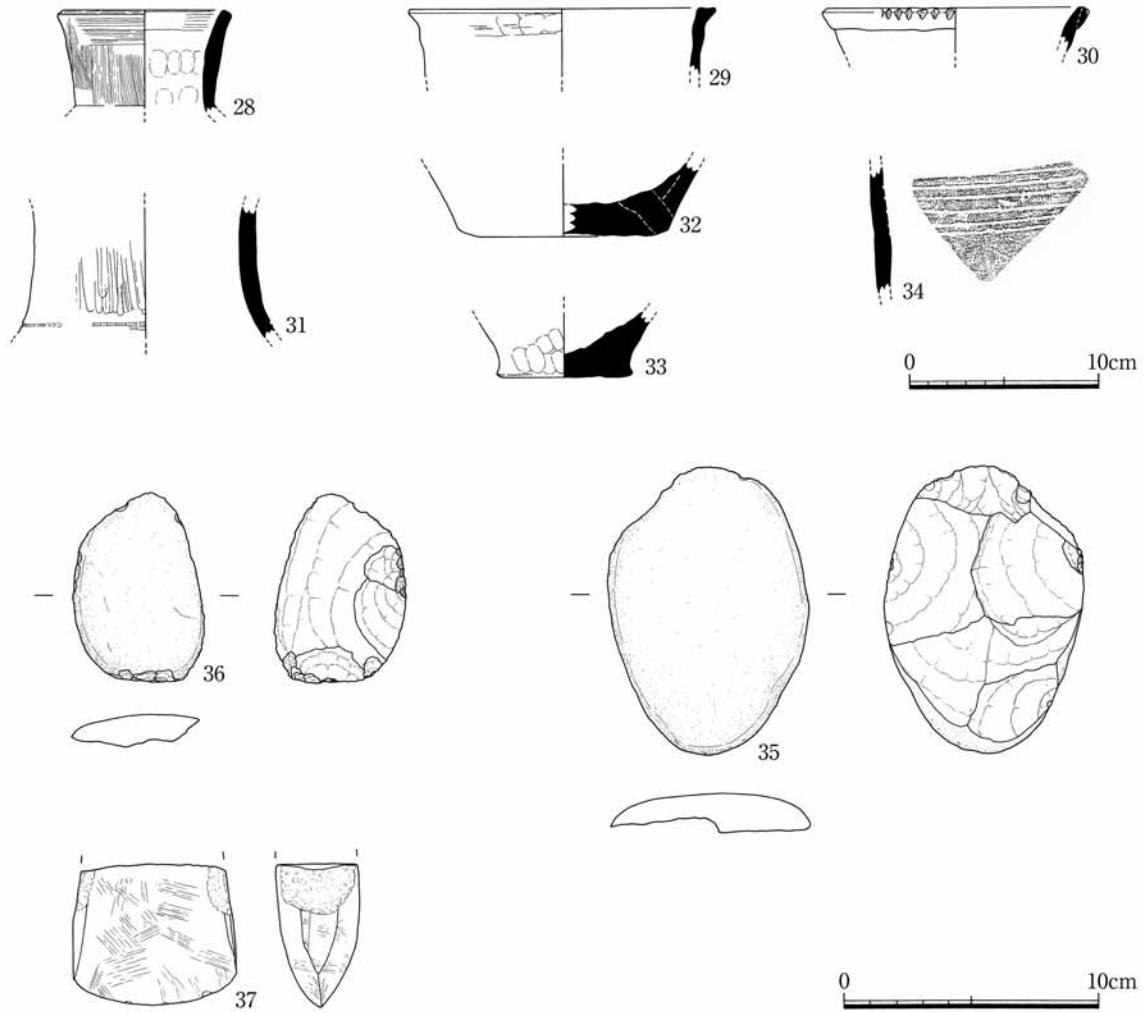
微高地の斜面を覆う旧河道の埋土は、図示したように砂礫が厚く堆積している。砂礫の流入時期を正確に把握することはできないが、微高地の遺構検出面直上に堆積するⅧ層直後と推測される。



第8図 SK6平面・エレベーション図及び出土土器実測図



第9图 SK6出土土器实测图



第10図 SX1出土土器・石器実測図

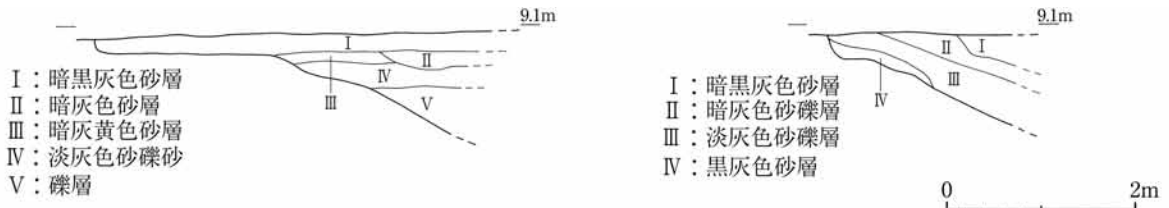
旧河道の遺物は微高地の傾斜面に沿うように出土しており、中には斜面にへばりついているものもあった。これらの遺物は磨耗が見られず、比較的大きな破片が含まれることから、Ⅷ層からの落ち込みによるものと考えられる。遺物の時期は、Ⅷ層と同じ前期末葉～中期中葉に属するものである。図示し得たものは、壺10点（38・40・41・42・43・46・50・51・52・53）、甕7点（39・44・45・47・48・49・54）である。

④包含層出土遺物（第13～16図）

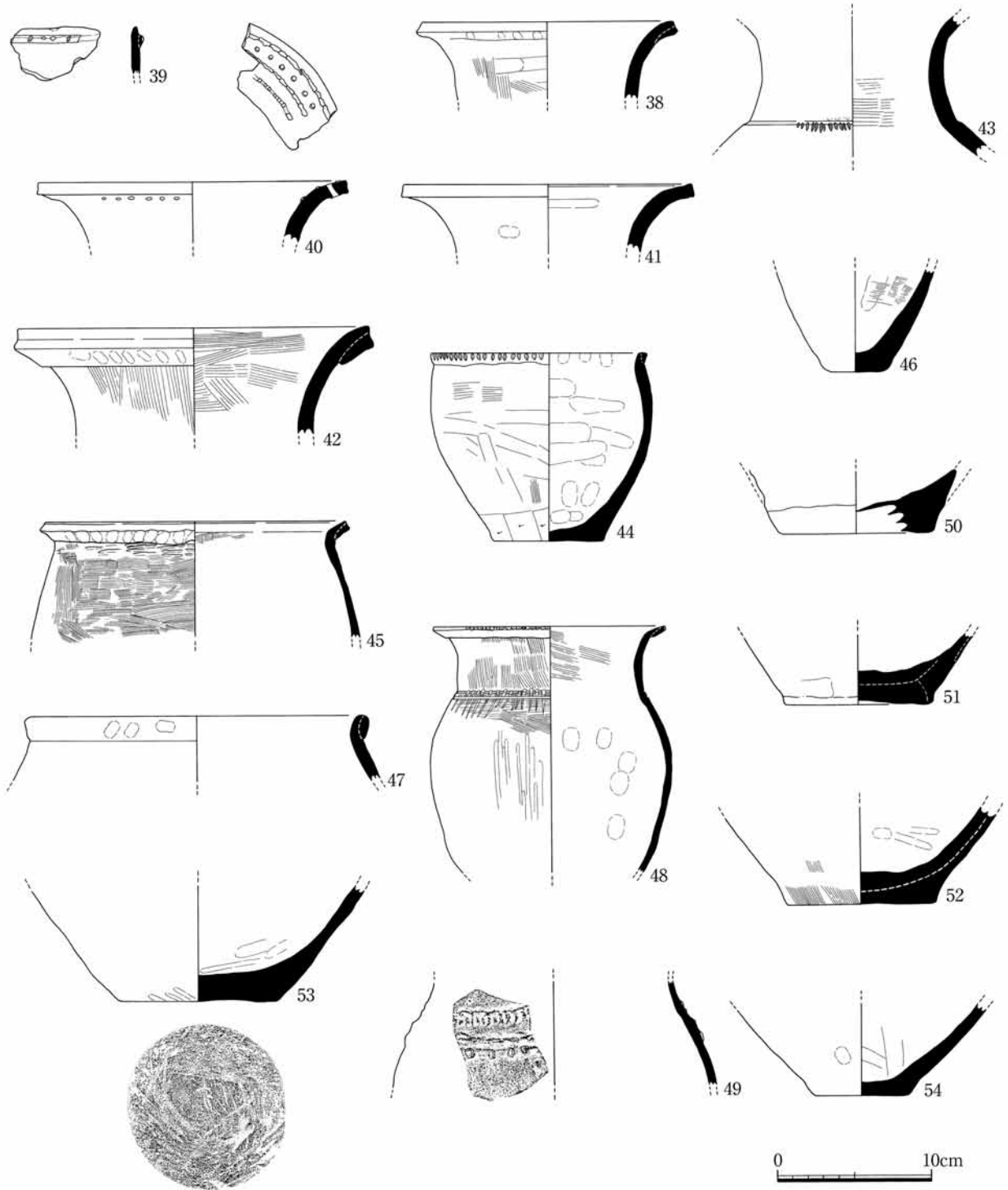
Ⅷ層出土のものが大半である。土器は壺・甕を中心に出土している。特徴として壺・甕を問わず二次的に熱を受けているものが多く見られる。底部の79・81などは破損面が強く焼けていることから何らかの理由により欠損後に被熱している。

遺物は、壺31点（55・56・57・58・59・60・61・62・63・64・66・68・76・85・86・87・88・89・90・92・93・94・95・97・106・108・109・110・112・113・114）、甕24点（67・69・70・71・72・73・74・75・77・78・79・80・81・82・83・84・91・96・98・99・100・101・102・107）、鉢3点（65・104・111）である。

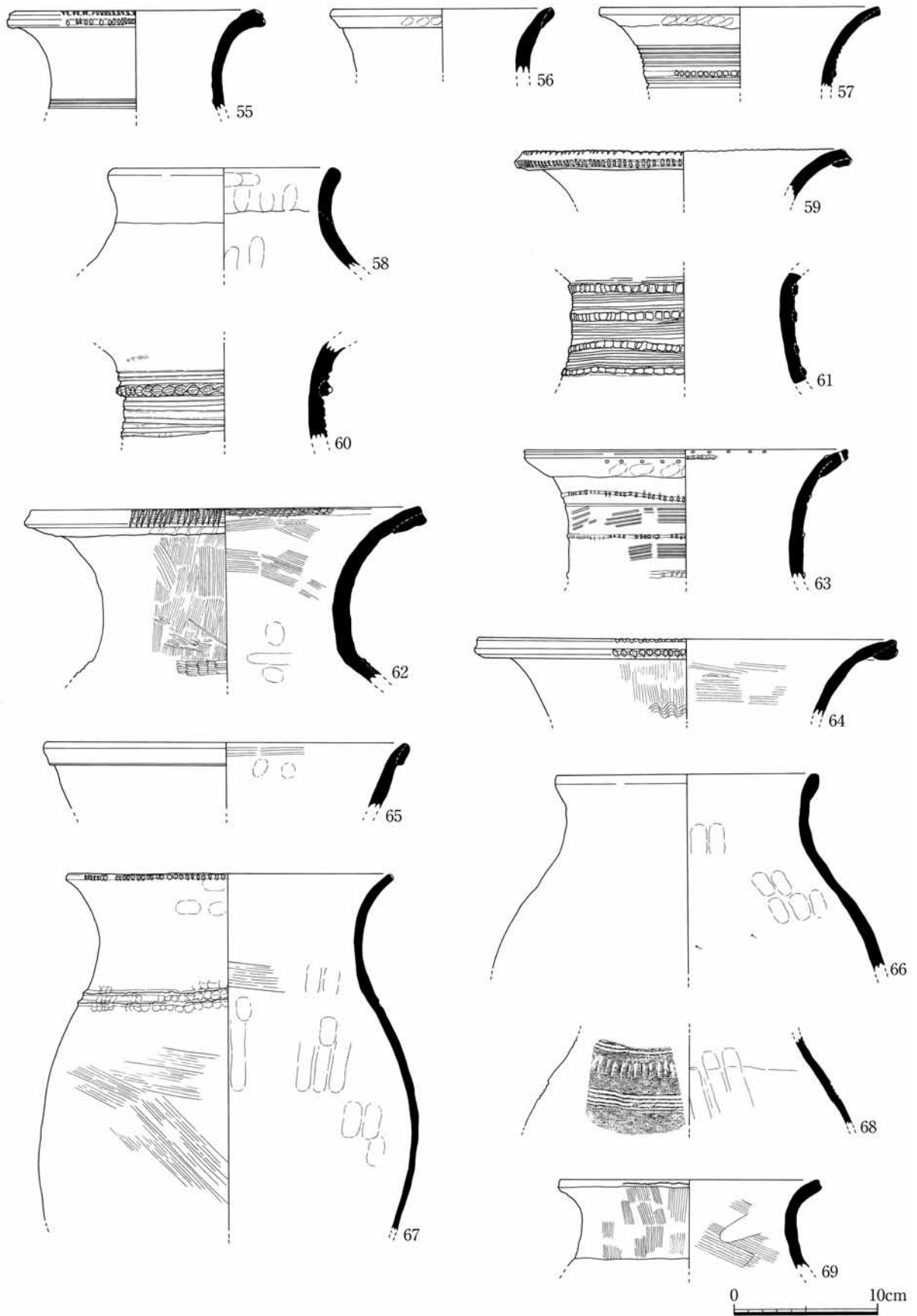
石器は磨製包丁2点（115・116）、扁平片刃石斧1点（117）は磨耗が激しいが、白色泥岩質のもので当遺跡での出土ははじめてである。叩石1点（118）は砂岩製中央部に使用痕跡が見られる。



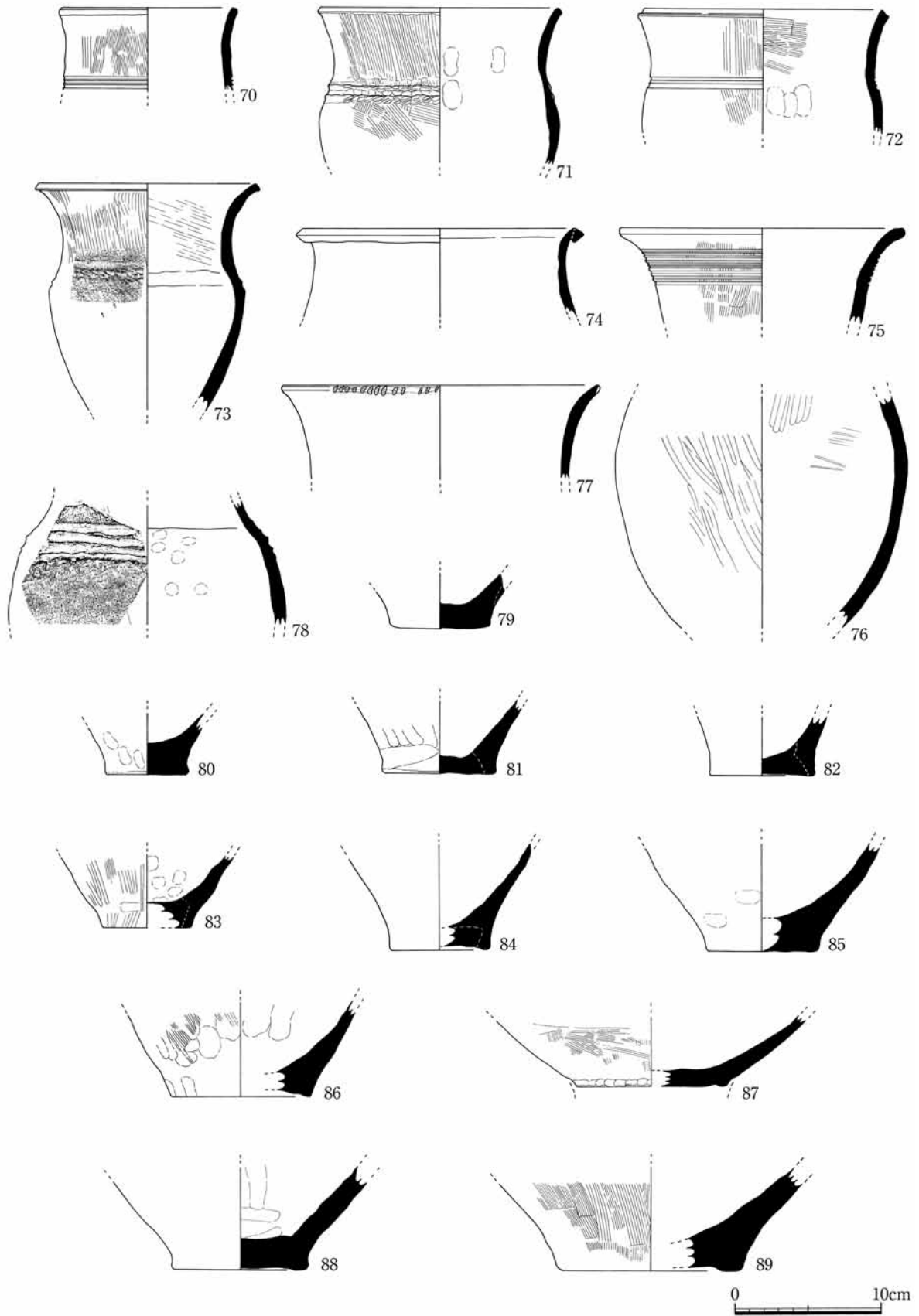
第11图 北区斜面堆積土層図



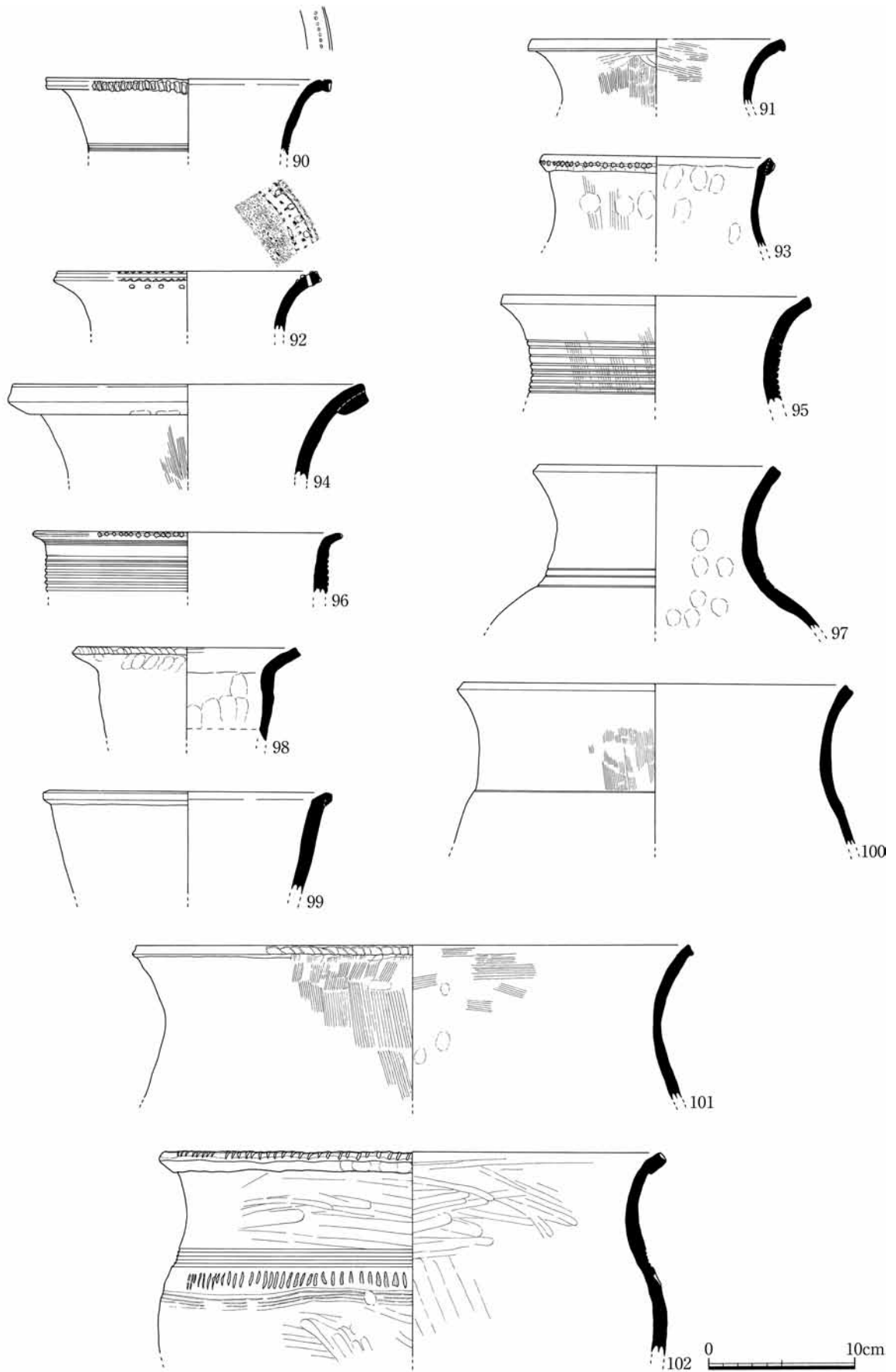
第12图 旧河道出土土器実測図



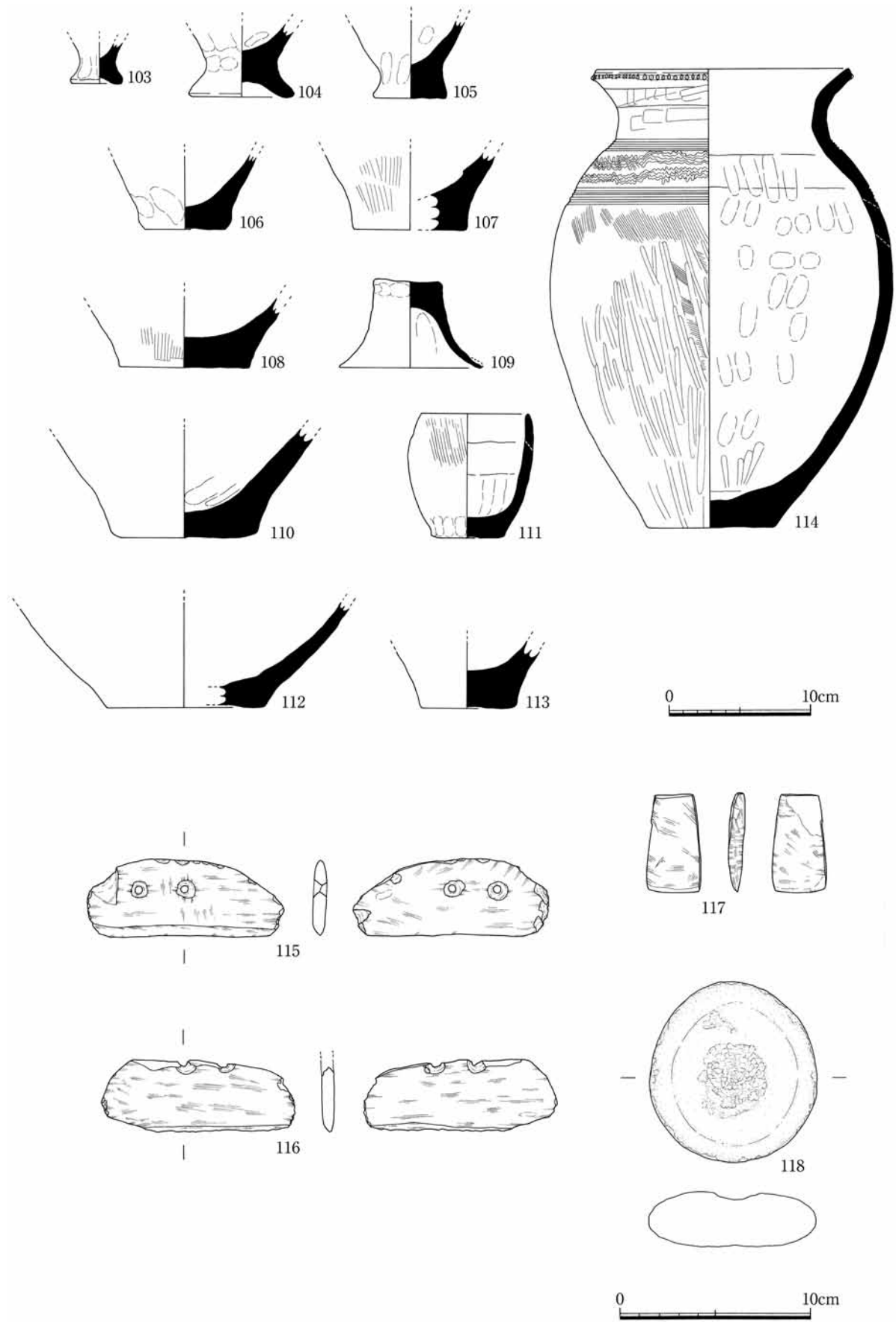
第13図 北区遺物包含層出土土器実測図(1)



第14图 北区遺物包含層出土土器実測図(2)



第15図 北区遺物包含層出土土器実測図 (3)



第16图 北区遺物包含層出土土器・石器実測図

2. 南区

(1) 南区の概要

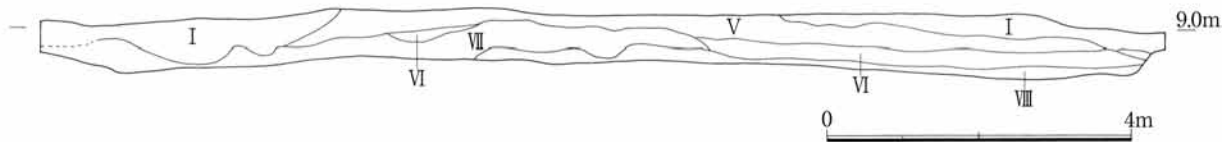
南区の調査面積は280㎡である。当該期の旧地形については北区で述べた旧河川が当該南区の西を走っていると思われるが、今回の調査では確認できなかった。

検出遺構及び遺物は、弥生前期末～弥生中期前半の土坑24基、ピット109基、土器約2万点が出土した。

(2) 基本層序

南区の層序について、調査区北壁及び南壁について述べる。

①北壁



第17図 南区北壁セクション図

I層：表土、客土

V層：暗灰褐色粘土

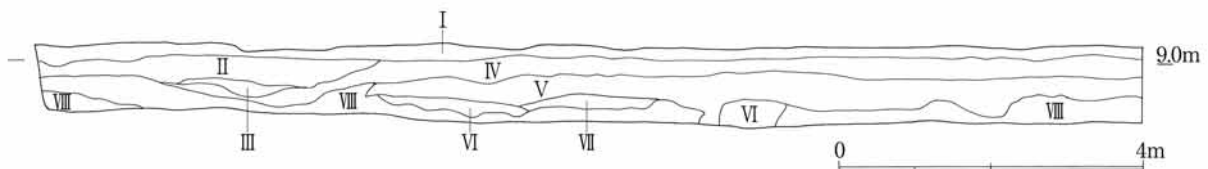
VI層：砂礫層

VII層：淡暗黒褐色粘土

VIII層：淡灰色粘土（遺物包含層）

※II～IV層は攪乱されており確認できなかった。

②南壁



第18図 南区南壁セクション図

I層：表土、客土

II層：灰褐色土

III層：砂層

IV層：暗褐色粘土

V層：暗褐色粘土

VI層：黒褐色粘土

VII層：黒褐色粘土（砂礫含む）

VIII層：淡灰色粘土（遺物包含層）

(3) 検出遺構と遺物

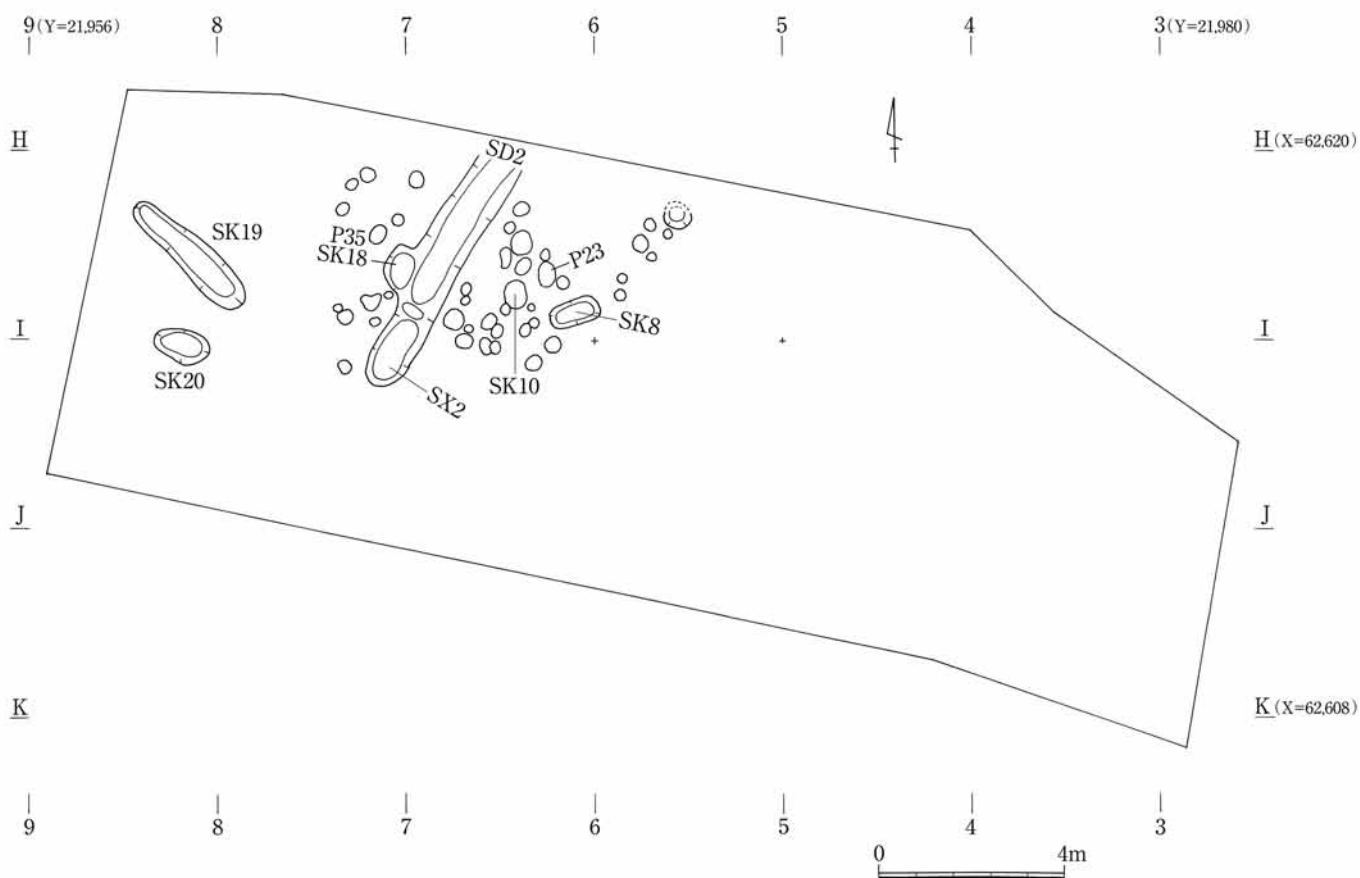
遺構は、Ⅷ層で検出した各上面、中面、下面からの検出となった。弥生時代前期末～中期前半と認められる。

検出面は若干南に傾斜しており、中面及び下面は大きな遺構が南側に検出された。

ア 上面

上面で検出した遺構は、土坑、溝跡、ピットがある。調査区の中央部西に集中しており、柱などの木製品も出土している。

遺構出土遺物は、弥生時代中期前半に属する。遺構の配置図は第19図のとおりである。



第19図 南区上面検出遺構配置図

①土坑

SK8 (第20図)

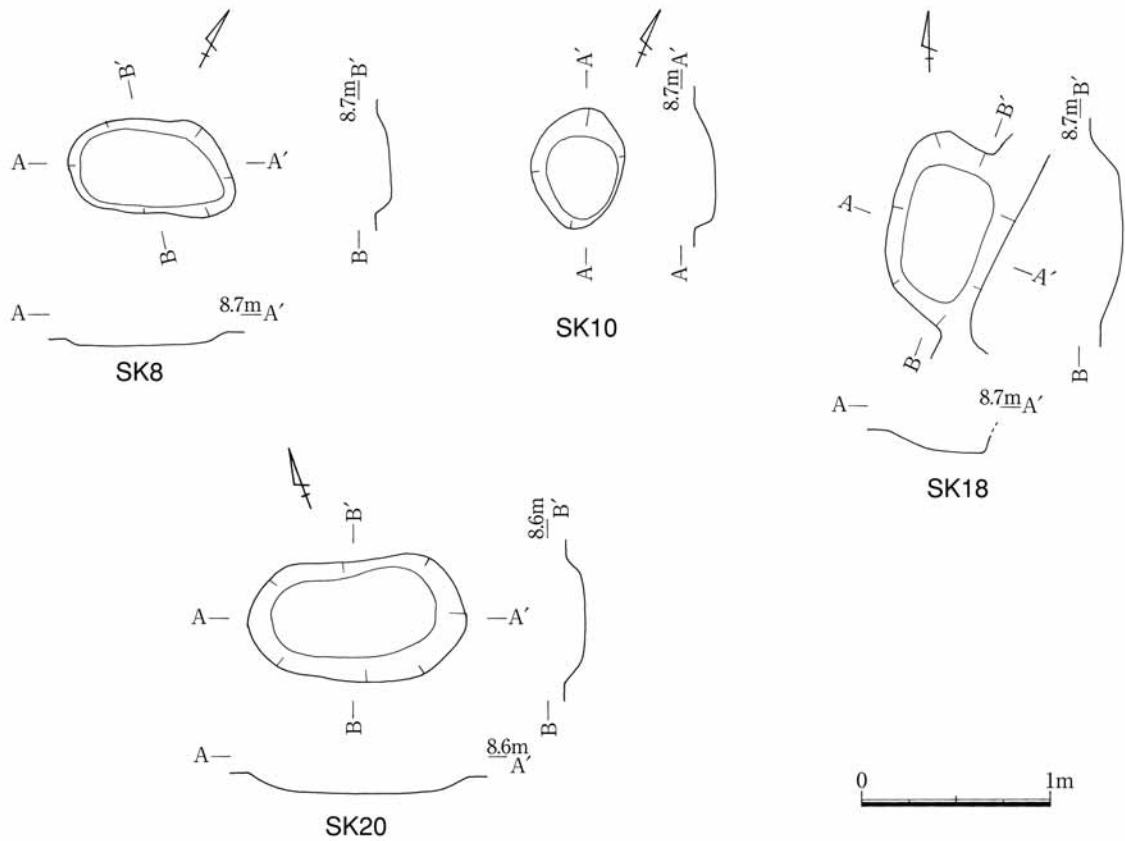
調査区中央部に位置する。東西0.82m、南北0.52m、深さ10cm、埋土は暗灰色粘土層である。

SK10 (第20図)

調査区中央部に位置する。東西0.52m、南北0.66m、深さ11cm、埋土は暗灰粘土層である。

SK18 (第20図)

調査区中央部西に位置する。東西0.56m、南北1.00m、深さ10cm、埋土は暗灰色粘土層である。SD2と切り合っている。



第20図 SK8・10・18・20平面・エレベーション図

SK19 (第21図)

調査区西部に位置する。東西3.06m、南北0.82m、深さ10cm、埋土は暗灰色粘土層である。

遺物は、壺5点 (119・122・125・127・128)、甕6点 (120・121・123・124・126・129)、石包丁1点 (130) が出土している。

SK20 (第20図)

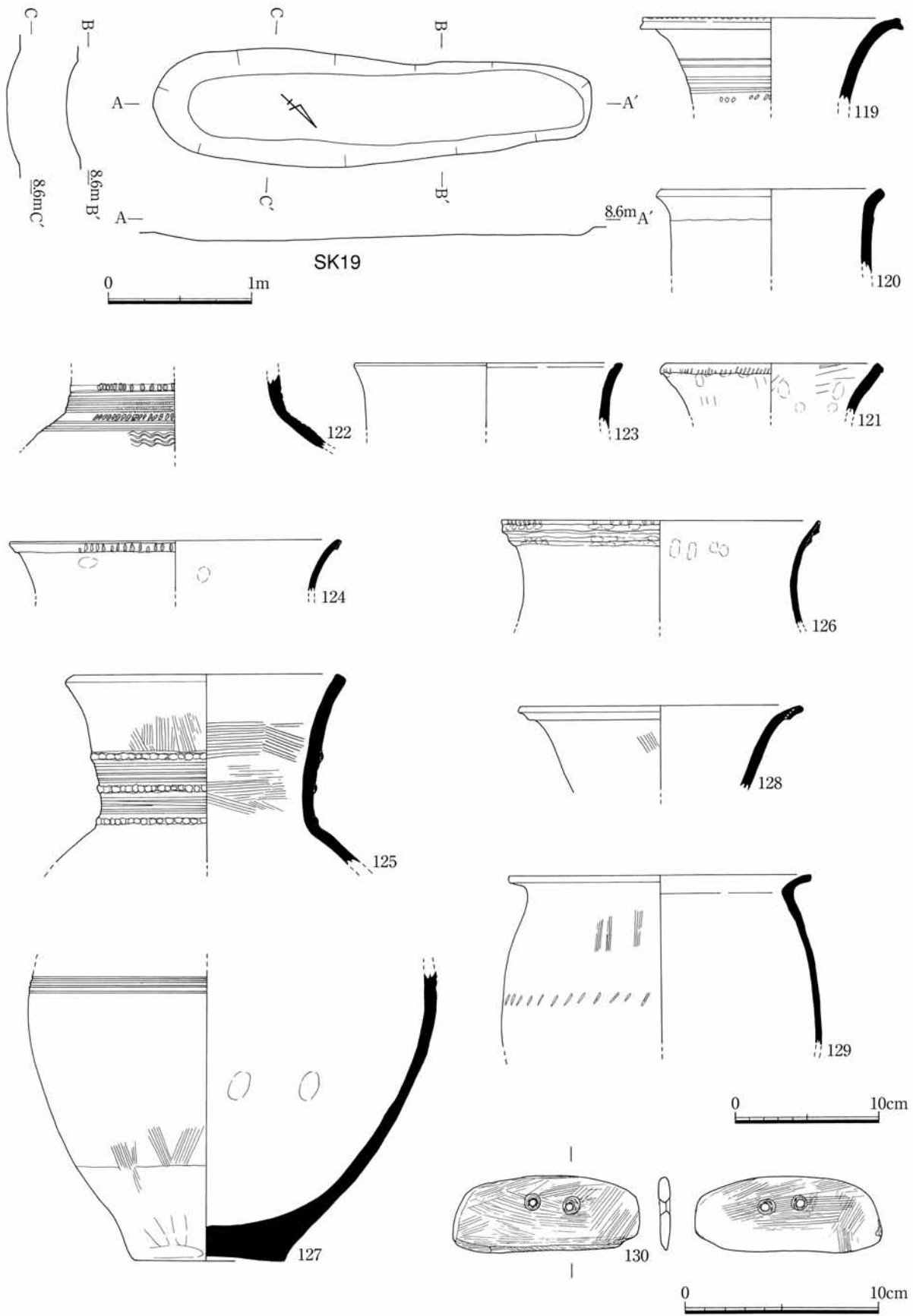
調査区西部に位置する。東西1.16m、南北0.64m、深さ10cm、埋土は暗灰色粘土層である。

②溝跡

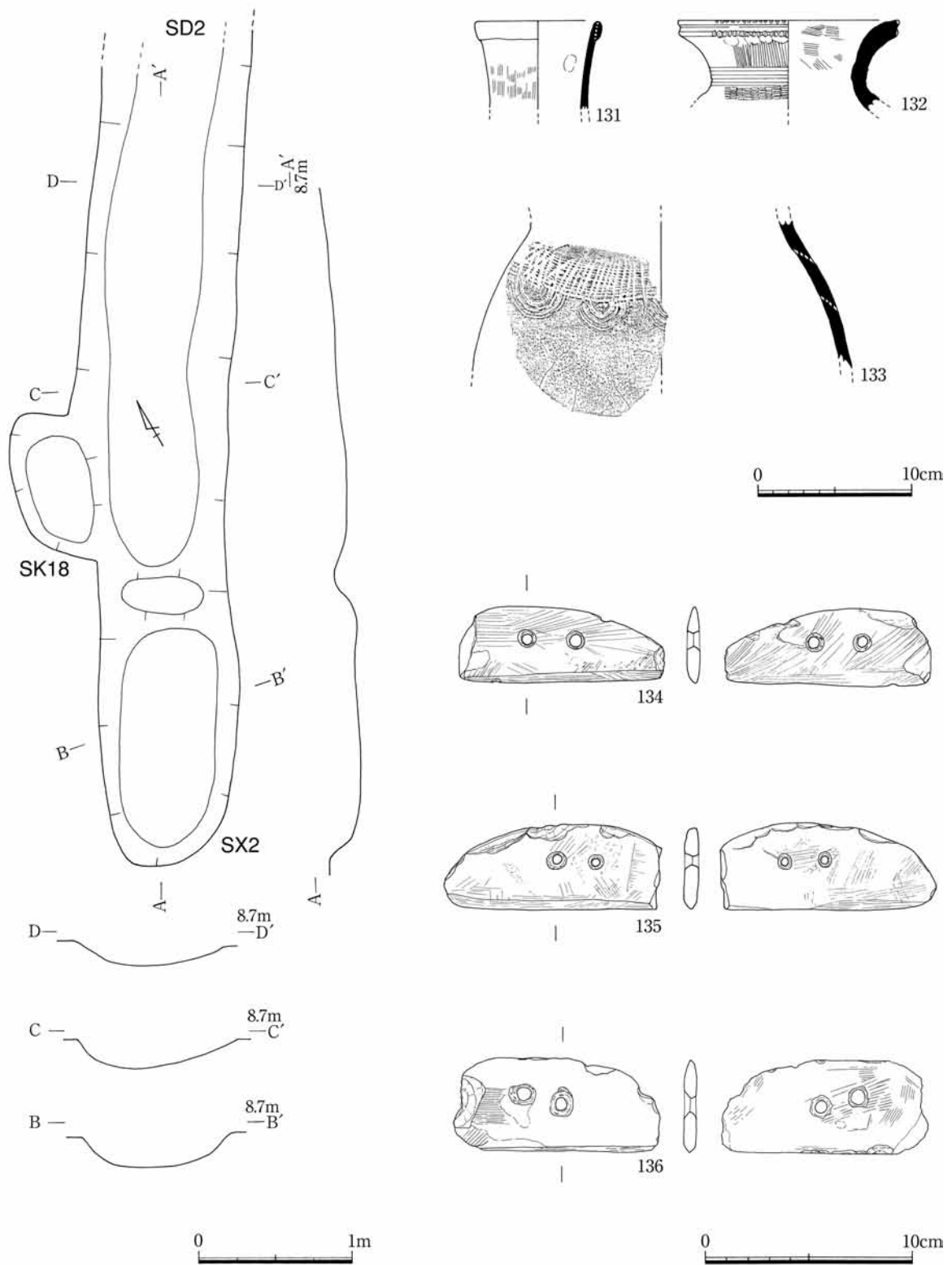
SD2 (第22・42図)

調査区の中央部に位置する。東西0.52m、南北2.40m、深さ10cm、埋土は暗灰色粘土層である。

遺物は、壺3点 (131・132・133)、石包丁3点 (134・135・136)、木製品1点 (298) が出土している。



第21図 SK19平面・エレベーション図及び出土土器・石器実測図



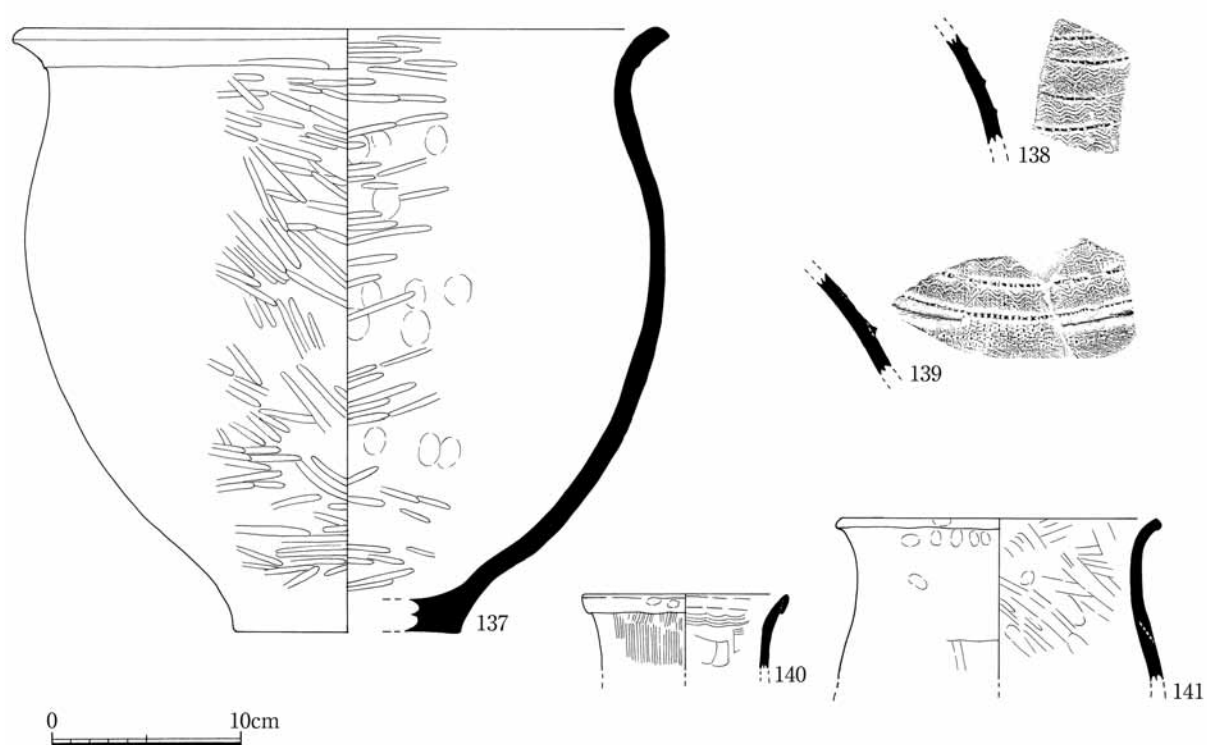
第22図 SK18・SX2・SD2平面・エレベーション図及びSD2出土土器・石器実測図

③性格不明遺構

SX2 (第22・23図)

調査区中央部南に位置する。東西0.90m、南北1.60m、深さ26cm、埋土は淡褐色粘土層である。

遺物は、鉢1点(137)、壺2点(138・139)、甕2点(140・141)が出土している。特長について見ると、甕は口径30cm程度の大型の物が出土している。



第23図 SX2出土遺物実測図

④ピット

P23 (第44図)

調査区の中央部に位置する。東西0.4m、南北0.51m、深さ15cmである。

遺物は、木製品1点(318)が出土している。

P35 (第44図)

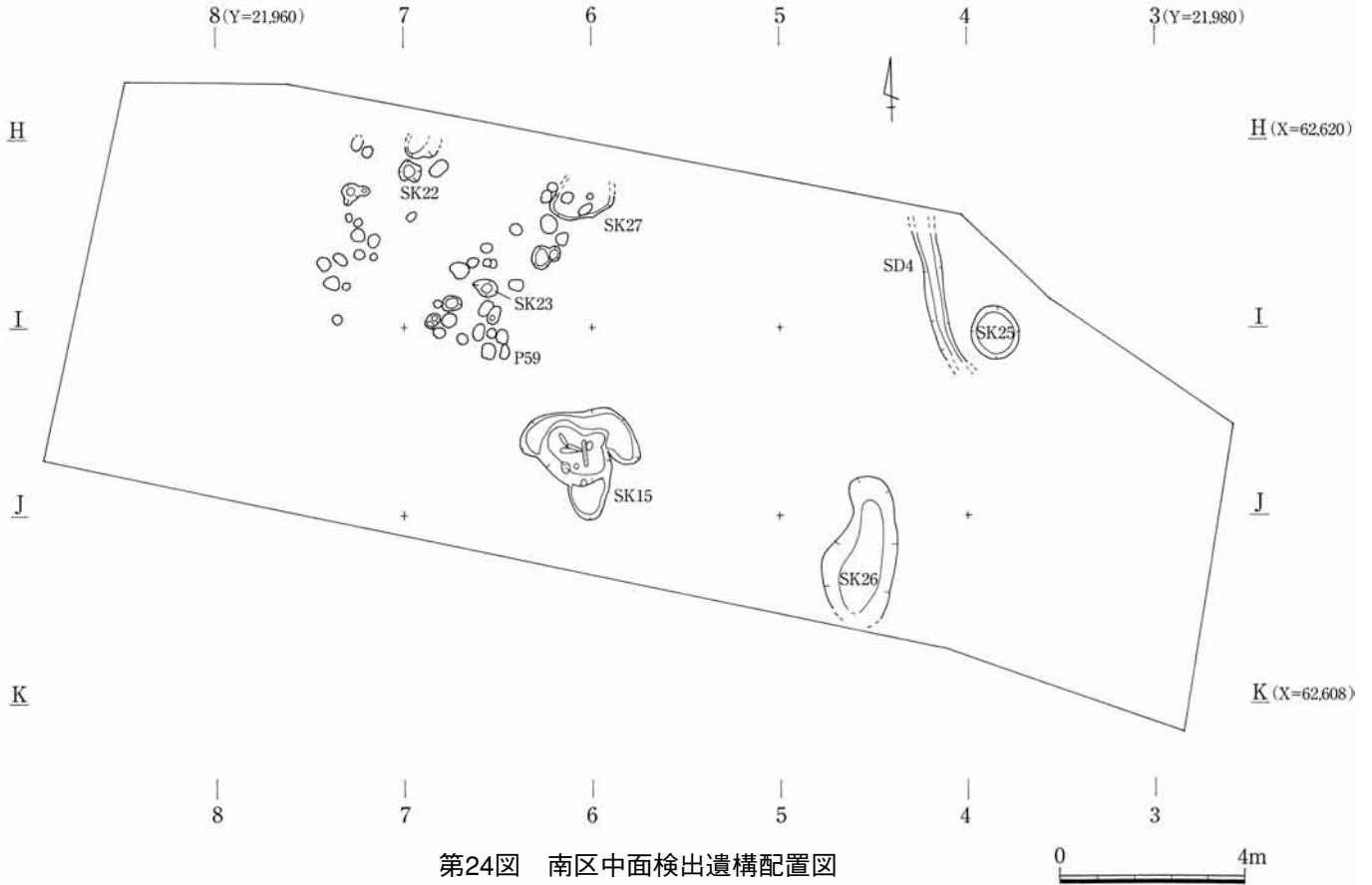
調査区の西部北に位置する。東西0.46m、南北0.43m、深さ24cmである。

遺物は、木製品1点(319)が出土している。

イ 中面

中面で検出した遺構は、土坑、溝跡、ピットがある。調査区中央西にピットが集中しており、調査区中央から東部にも土坑及び溝跡を検出した。

遺構出土遺物は、弥生時代中期前半に属する。遺構の配置図は第24図のとおりである。



第24図 南区中面検出遺構配置図

①土坑

SK15 (第25・26図)

調査区中央部南に位置する。東西2.30m、南北2.30m、深さ22cm、埋土は淡褐色粘土層である。

遺物は、壺6点 (142・143・144・147・150・154)、甕11点 (145・146・148・149・151・153・156・157・158・159・160)、鉢1点 (155)、蓋1点 (152) が出土している。

SK22 (第27図)

調査区西部北に位置する。東西0.44m、南北0.48m、深さ20cm、埋土は淡褐色粘土層である。

SK23 (第27図)

調査区中央部に位置する。東西0.50m、南北0.40m、深さ22cm、埋土は淡褐色粘土層である。

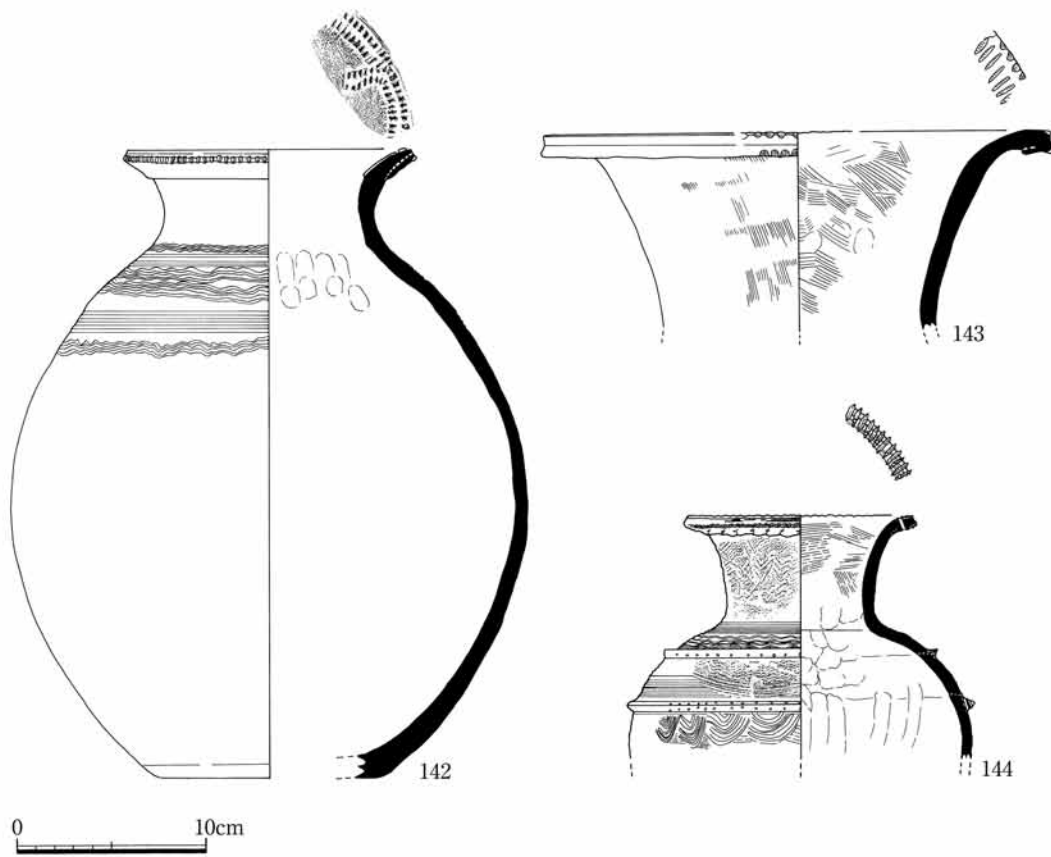
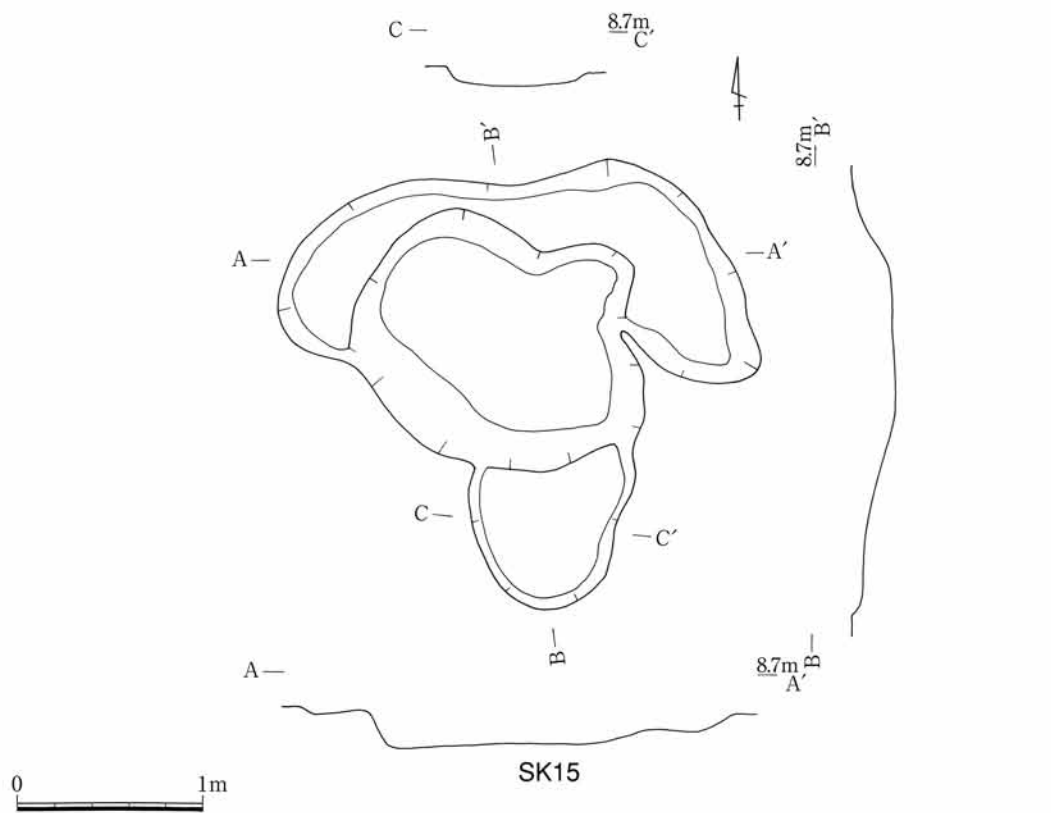
SK25 (第27図)

調査区東部に位置する。東西1.00m、南北1.10m、深さ16cm、埋土は淡褐色粘土層である。

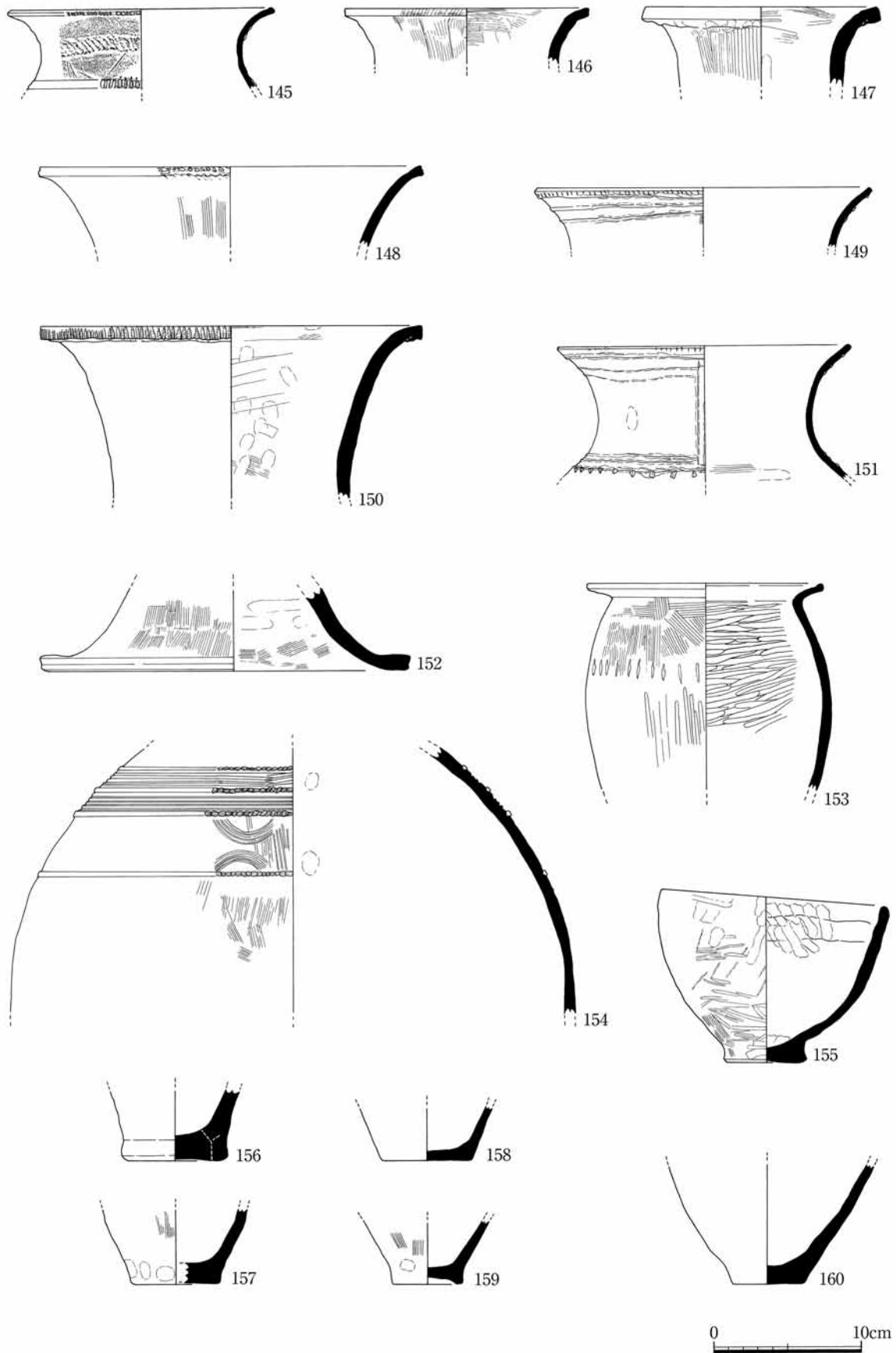
遺物は、壺3点 (161・162・164)、甕1点 (163) が出土している。

SK26 (第27図)

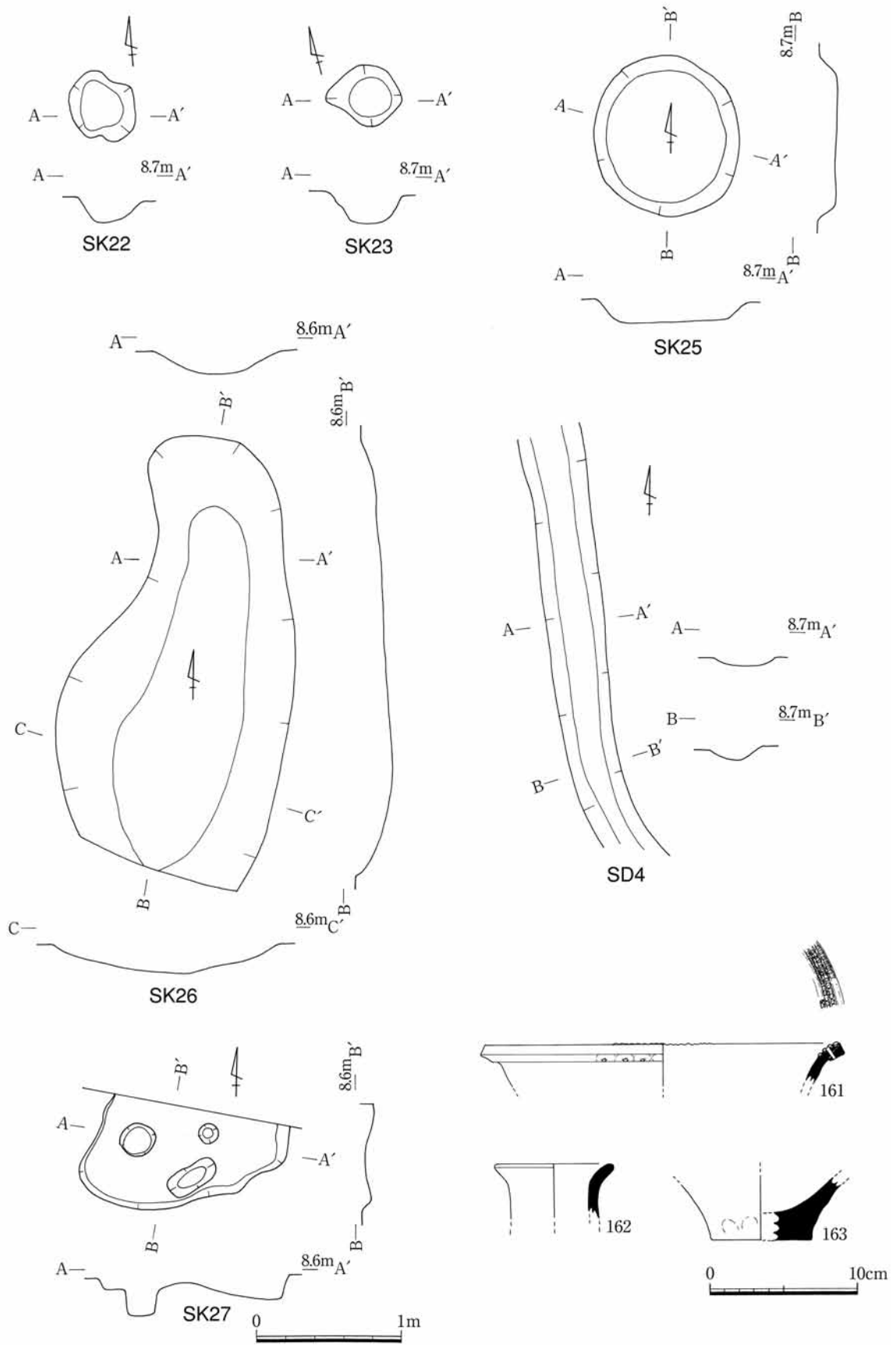
調査区東部南に位置する。東西1.54m、南北3.06m、深さ24cm、埋土は淡褐色粘土層である。



第25図 SK15平面・エレベーション図及び出土土器実測図



第26図 SK15出土土器実測図



第27図 SK22・23・25・26・27・SD4平面・エレベーション図及び出土土器実測図

SK27 (第27図)

調査区の中央部北に位置する。東西1.28m、深さ32cm、北側は調査区外に伸びている。埋土は淡褐色粘土層である。

②溝跡

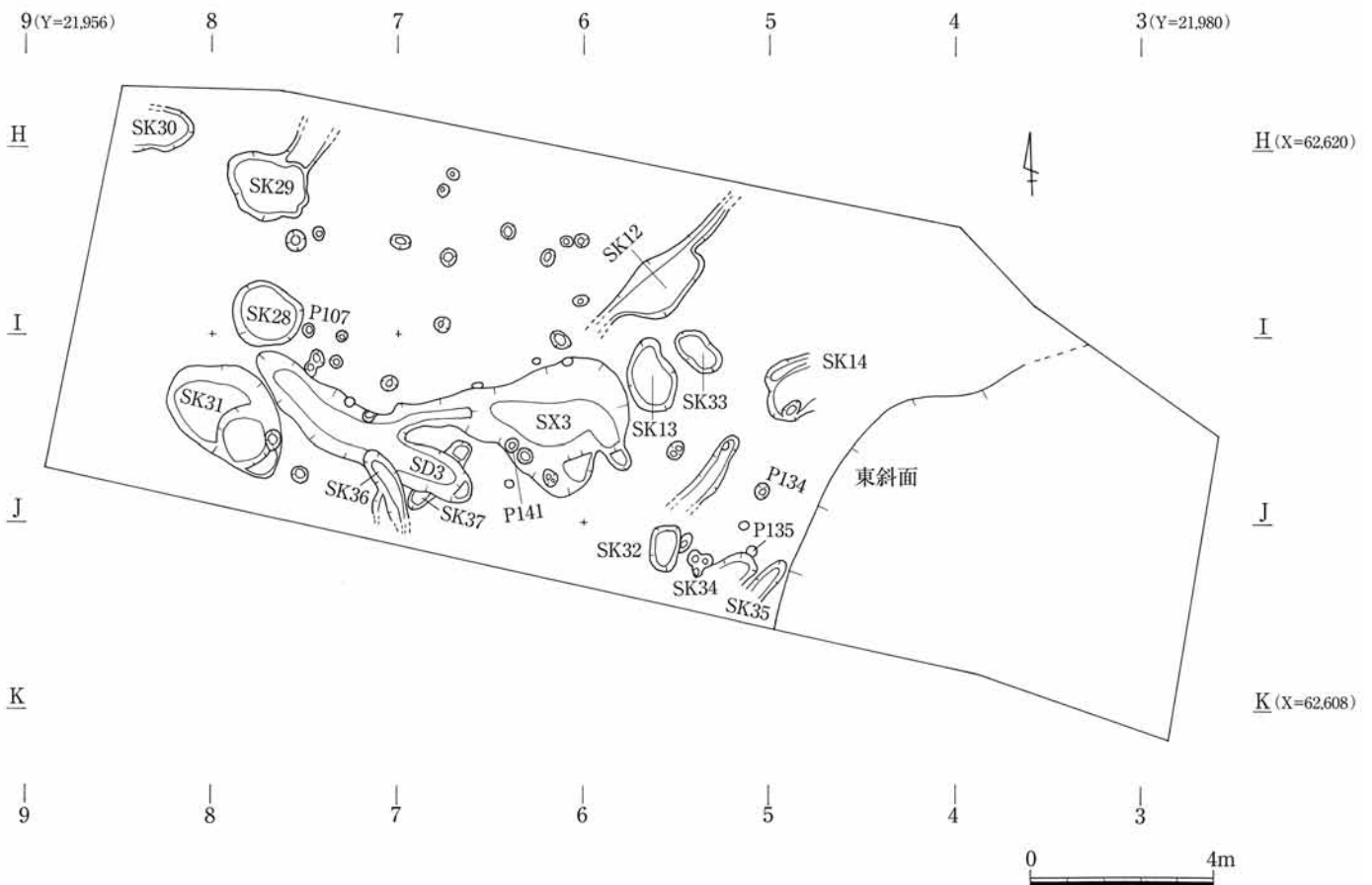
SD4 (第27図)

調査区の北東に位置する。東西0.38m、南北3.00m、深さ10cm、埋土は暗灰色粘土層である。

ウ 下面

下面で検出した遺構は、土坑、溝跡、ピットがあり、調査区全体に広がっている。調査区中央部南に大きな遺構、東部には東に傾斜した斜面を確認し、双方とも柱や板材などの多くの木製品を検出した。また、漆塗りの腕輪を検出している。そのほか、意図的に骨片と土器を敷き詰めた遺構を確認し、その中の一部には強く被熱した土器を検出した。

遺構出土遺物は、弥生時代前期末から中期前半に属する。南区では前期末遺構を検出したのは下面のみである。遺構の配置図は第28図のとおりである。



第28図 南区下面検出遺構配置図

①土坑

SK12 (第29図)

調査区中央部北に位置する。東西1.10m、南北3.60m、深さ18cm、埋土は淡褐色粘土層である。

遺物は、壺3点 (167・169・170) が出土している。

SK13 (第29・43図)

調査区の中央部に位置する。東西1.06m、南北1.50m、深さ16cm、埋土は淡褐色粘土層である。

遺物は、木製品1点 (307) が出土している。

SK14 (第30・31・32図)

調査区東部に位置する。東西1.00m、南北1.34m、深さ40cm、埋土は淡褐色粘土層である。

遺物は、壺17点 (217・218・219・220・221・222・223・224・225・226・227・232・233・234・235・236・240)、甕5点 (228・229・230・231・239)、鉢2点 (237・238)、石包丁1点 (241) が出土している。

遺構からは、10cm前後の土器片が敷き詰められた状態で出土した。多量の土器片と共に炭化物や焼かれた骨片が出土している。意図的に骨片と土器片を敷き詰められた一種の埋葬遺構であると思われる。

SK17 (第29図)

調査区中央部に位置する。東西0.46m、南北1.80m、深さ10cm、埋土は淡褐色粘土層である。

遺物は、壺3点 (164・165・168)、甕1点 (166) が出土している。

SK28 (第33図)

調査区東部に位置する。東西1.10m、南北1.40m、深さ40cm、埋土は淡褐色粘土層である。

遺物は、壺1点 (171)、甕3点 (173・179・180)、蓋1点 (183) が出土している。

SK29 (第33図)

調査区西部北に位置する。東西1.80m、南北1.40m、深さ16cm、埋土は淡褐色粘土層である。

遺物は、壺4点 (172・174・175・178)、甕4点 (176・177・181・182) が出土している。

SK30 (第34図)

調査区西部北に位置する。東西0.96m、南北1.26m、深さ12cm、埋土は淡褐色粘土層である。

遺物は、甕1点 (184) が出土している。

SK31 (第34・42・44図)

調査区西部南に位置する。東西2.36m、南北2.24m、深さ30cm、埋土は淡褐色粘土層である。

遺物は、壺5点 (186・187・188・192・193)、甕4点 (185・189・190・191)、石鏃2点 (194・195)、木製品2点 (297・317)、瓜の種子、ニホンジカの臼歯が出土している。

SK32 (第35図)

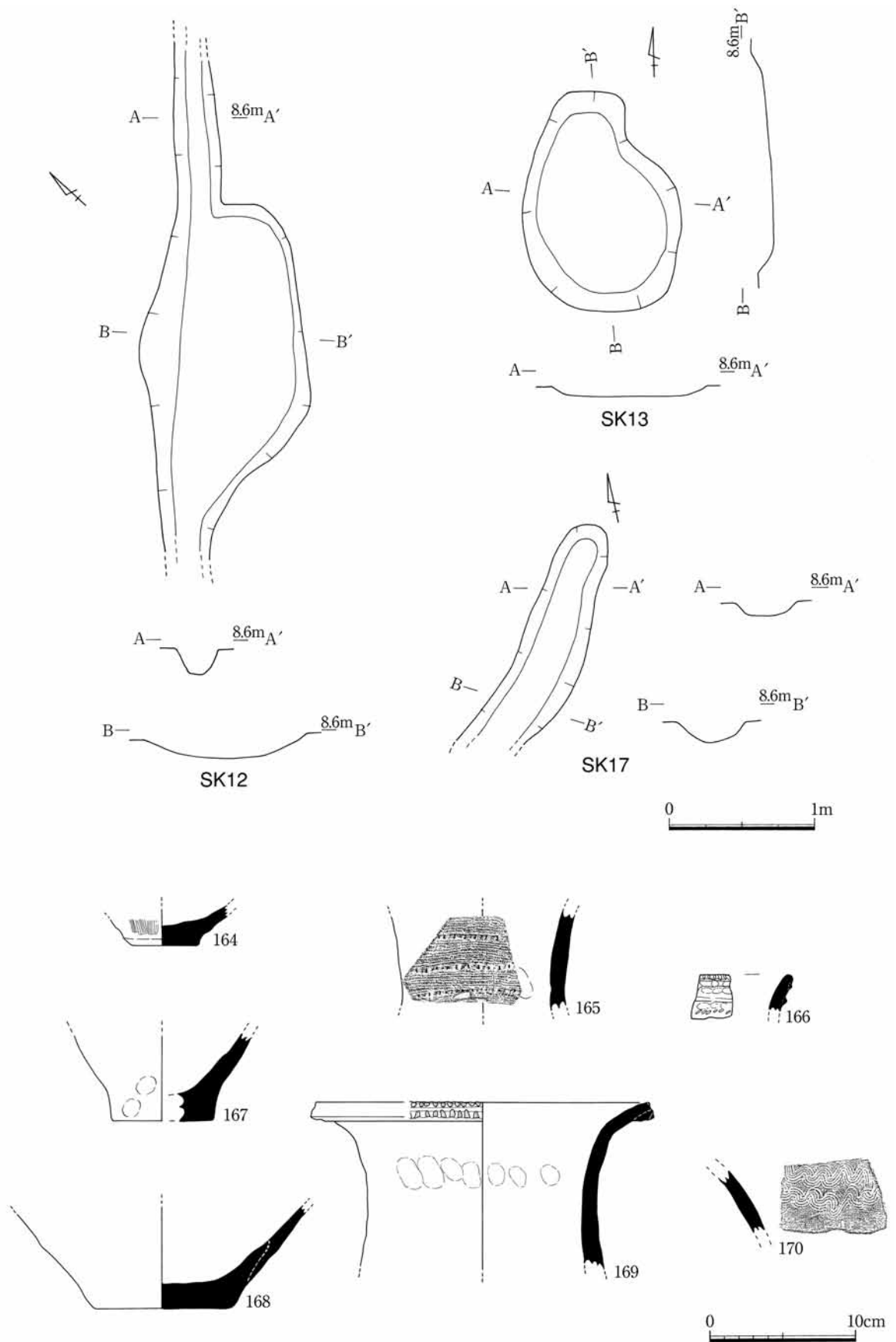
調査区中央部南に位置する。東西0.60m、南北0.90m、深さ7cm、埋土は淡褐色粘土層である。

遺物は、甕1点 (200) が出土している。

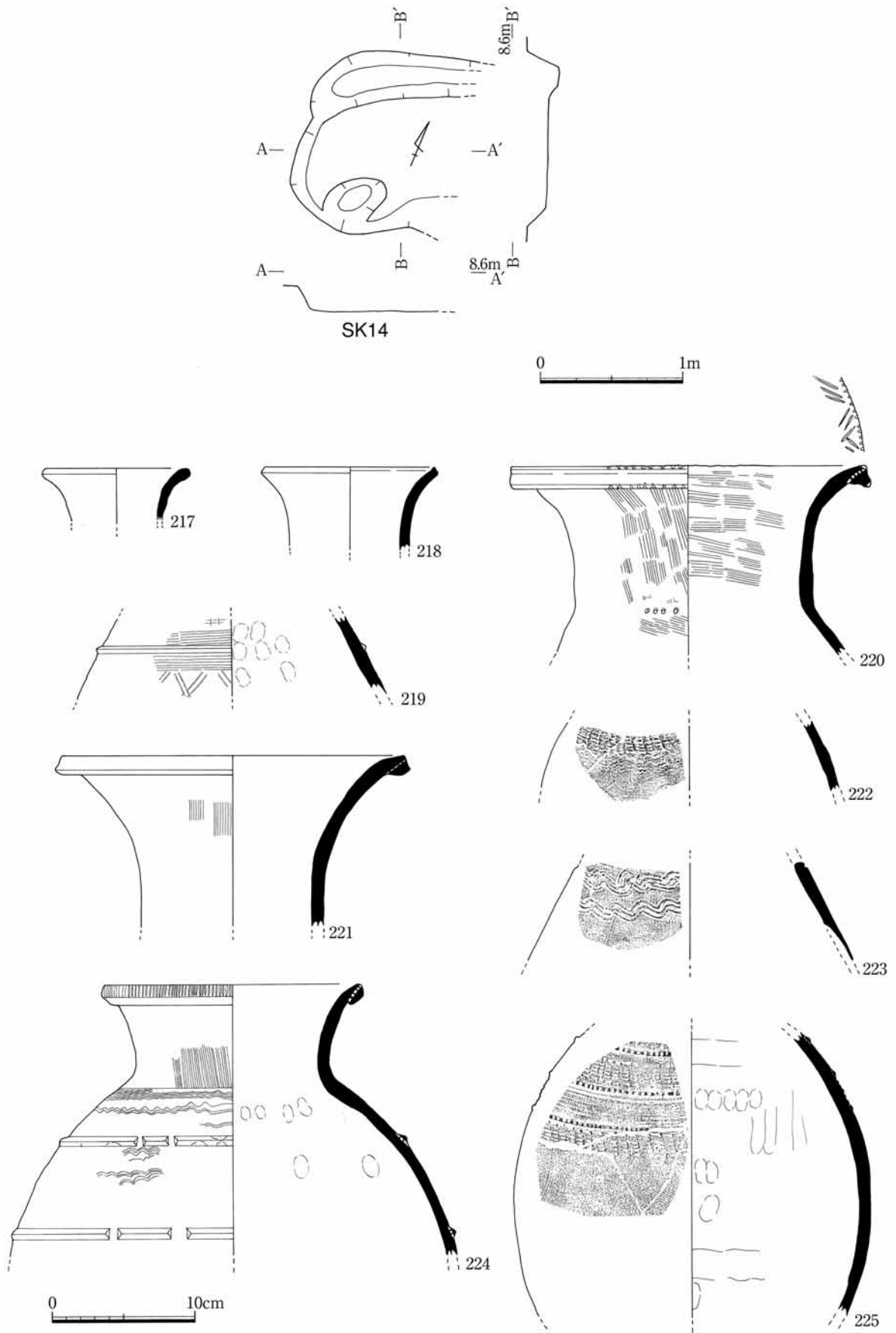
SK33 (第35図)

調査区中央部に位置する。東西0.70m、南北0.96m、深さ11cm、埋土は淡褐色粘土層である。

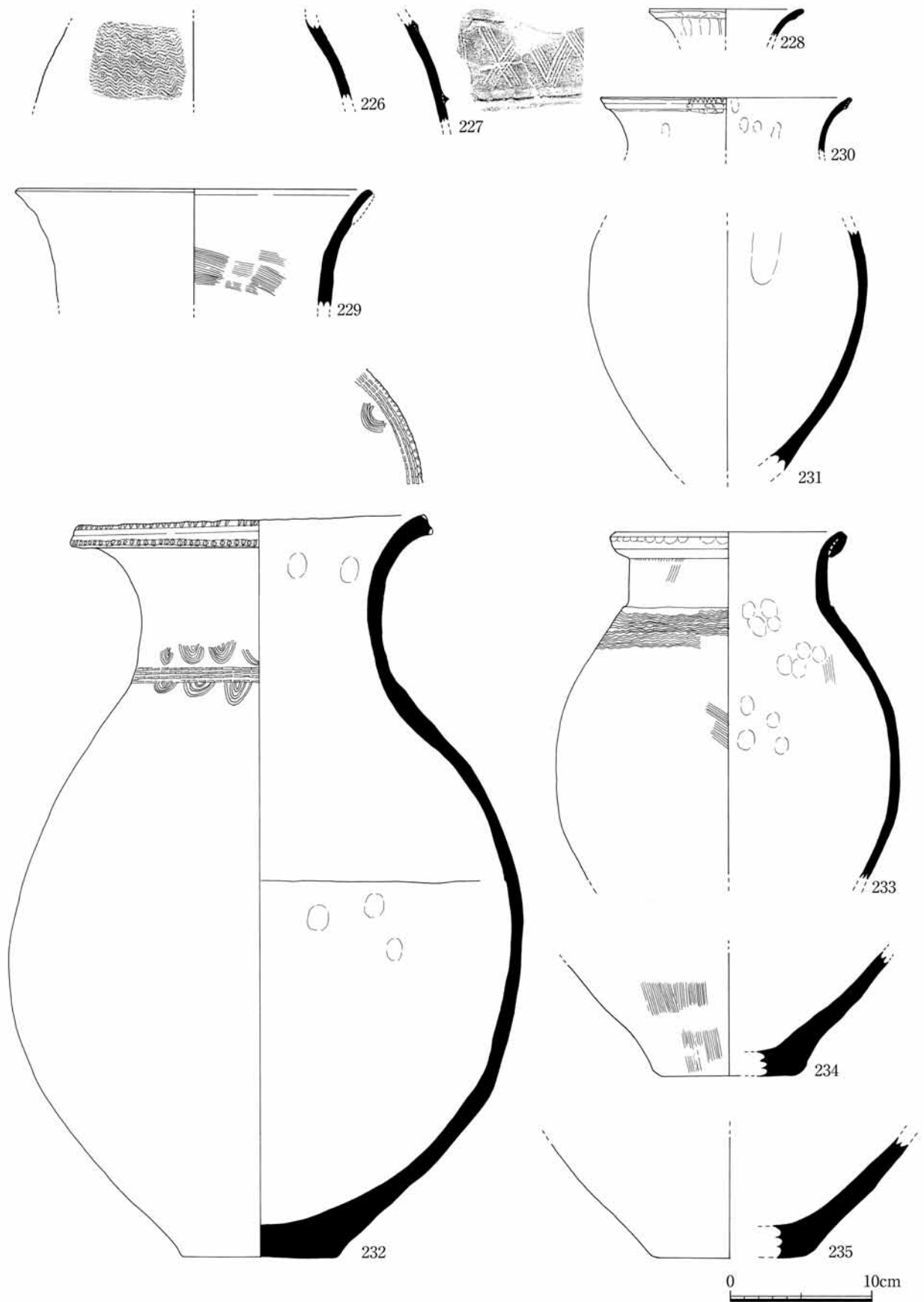
遺物は、壺1点 (202)、甕2点 (196・198) が出土している。



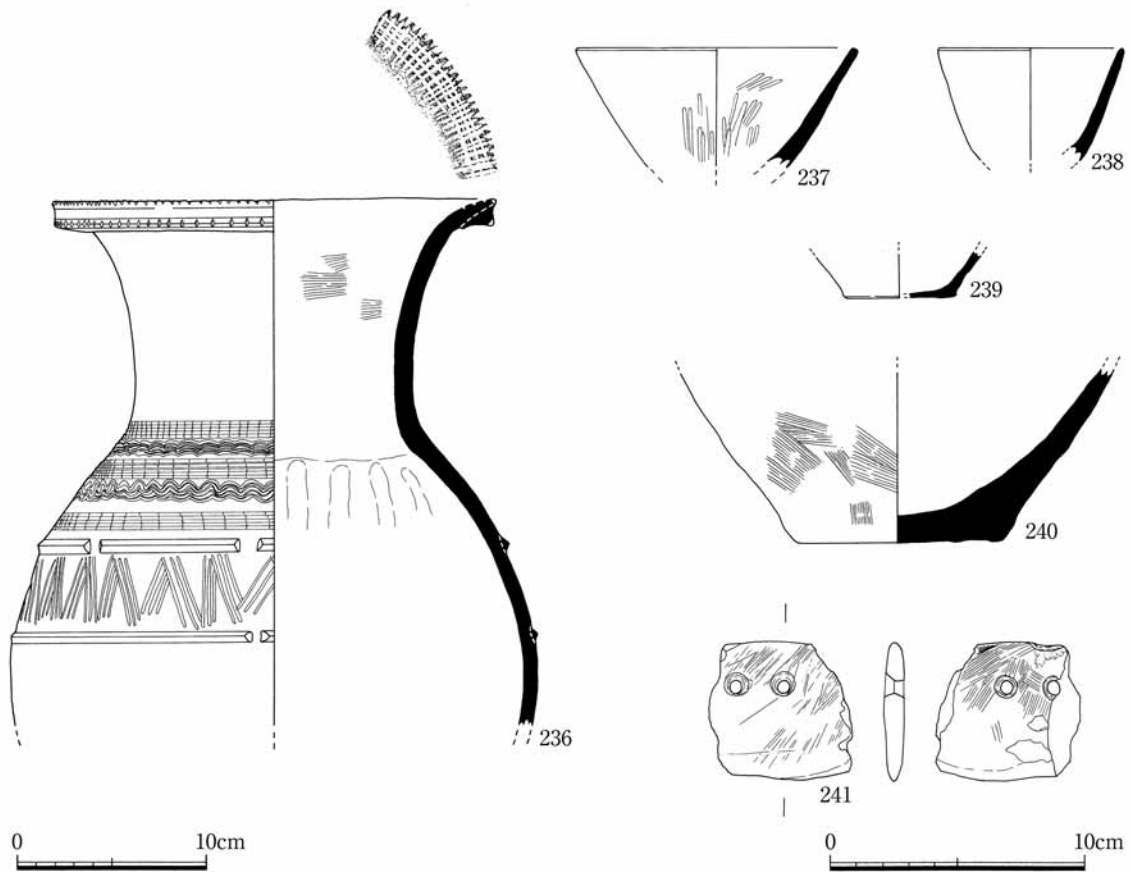
第29図 SK12・13・17平面・エレベーション図及び出土土器実測図



第30図 SK14平面・エレベーション図及び出土土器実測図



第31図 SK14出土土器実測図



第32図 SK14出土土器・石器実測図

SK34 (第35・44図)

調査区中央部南に位置する。東西1.14m、南北0.60m、深さ14cm、埋土は淡褐色粘土層である。
遺物は、壺1点 (201)、木製品1点 (310) が出土している。

SK35 (第35図)

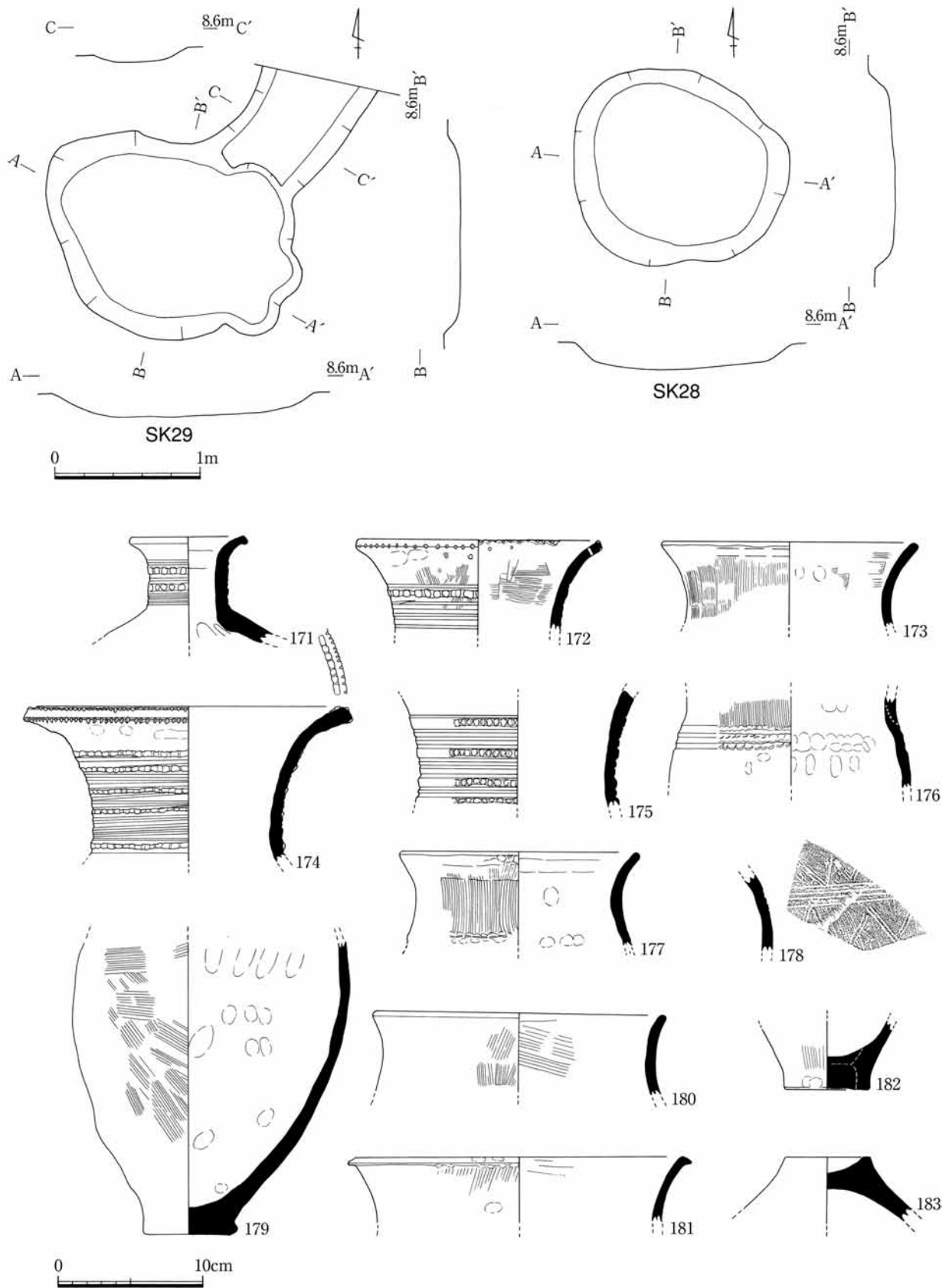
調査区中央部南に位置する。東西0.50m、南北1.00m、深さ14cm、埋土は淡褐色粘土層である。
遺物は、壺1点 (197)、甕1点 (199) が出土している。

SK36 (第35図)

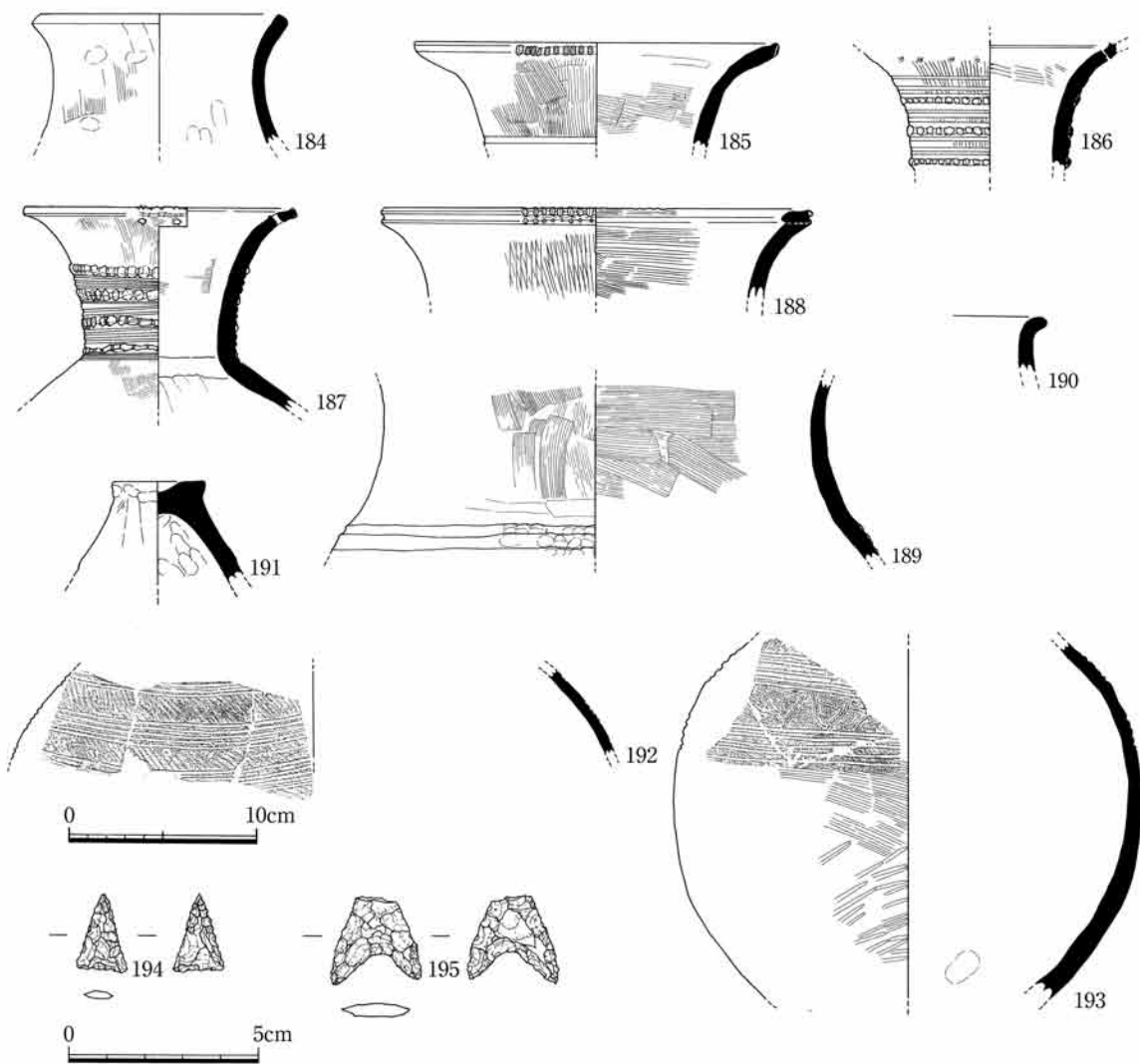
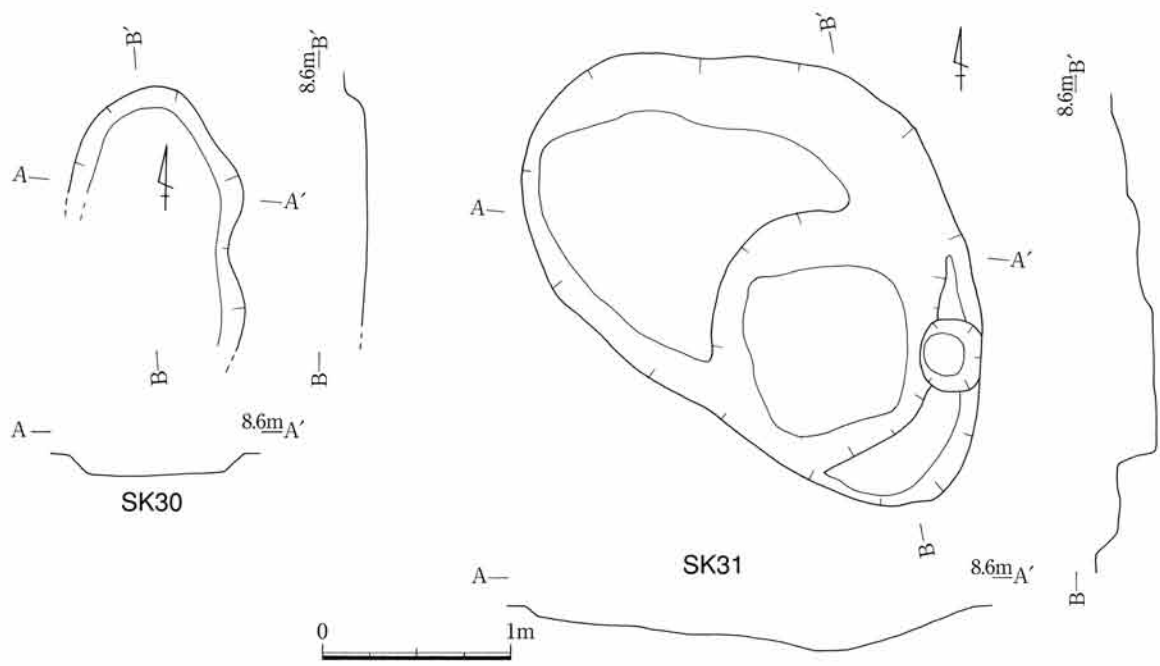
調査区西部南に位置する。東西0.70m、南北1.50m、深さ30cm、埋土は淡褐色粘土層である。

SK37 (第35図)

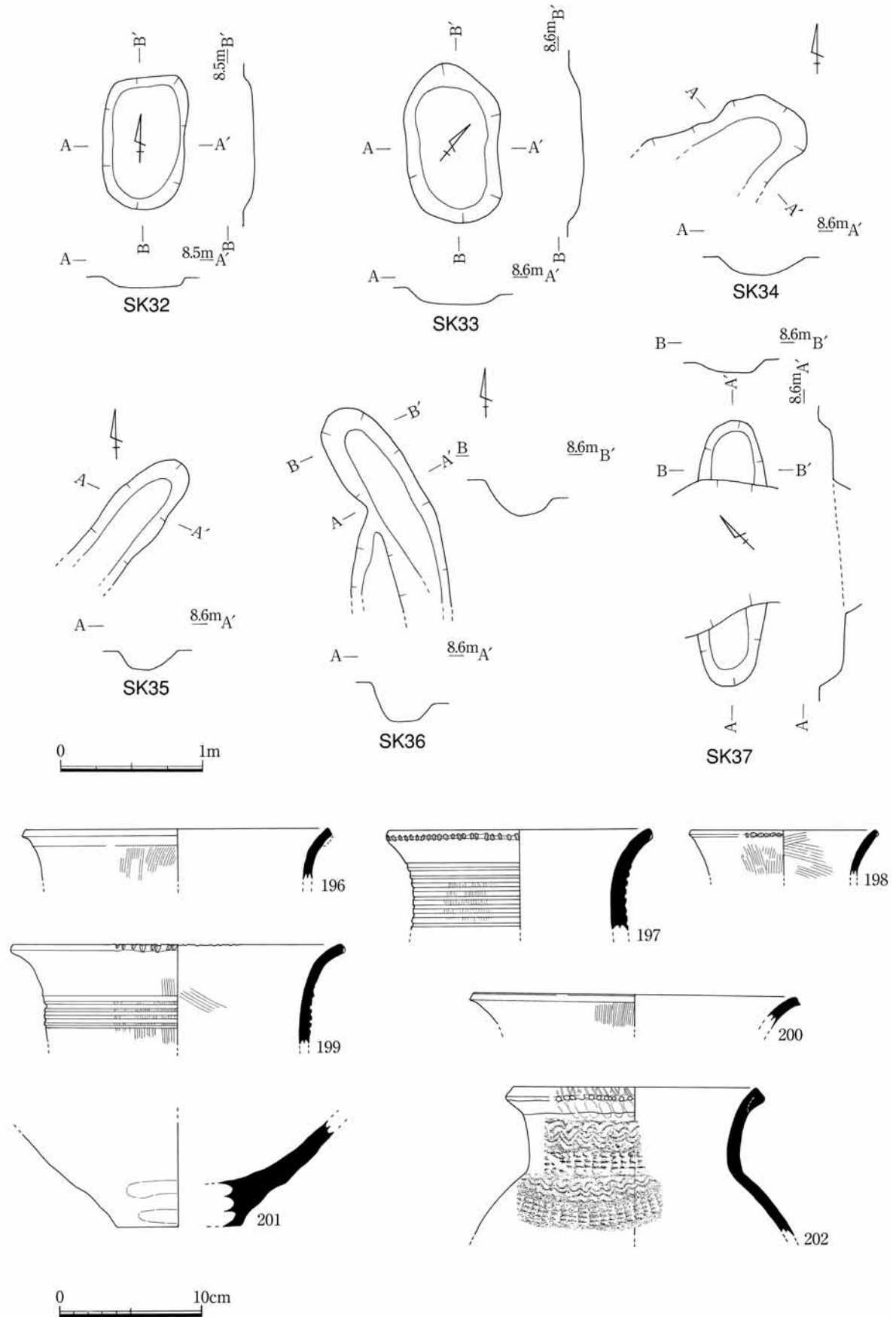
調査区中央南に位置する。東西0.48m、南北1.86m、深さ10cm、SD3に中央部分を切断されている。
埋土は淡褐色粘土層である。



第33図 SK28・29平面・エレベーション図及び出土土器実測図



第34図 SK30・31平面・エレベーション図及び出土土器・石器実測図



第35図 SK32~37平面・エレベーション図及び出土土器実測図

②性格不明遺構

SX3 (第37・42・43・44図)

調査区の中央部に位置する。東西4.40m、南北2.96m、深さ60cm、埋土は淡褐色粘土層である。

遺物は、壺5点(242・243・244・250・251)、甕5点(245・246・247・248・249)、木製品7点(293・294・299・300・302・312・320)が出土している。

③溝跡

SD3 (第36・43・44図)

調査区の南に位置する。東西5.52m、南北1.30m、深さ20cm、埋土は淡褐色粘土層である。

遺物は、壺3点(204・206・208)、甕10点(203・205・207・209・210・211・212・213・214・215)、石鏃1点(216)、木製品2点(305・313)、靱、ニホンザルの上腕骨、ニホンジカの頸骨・肩甲骨、イヌの腰椎が出土している。

④ピットその他

P89 (第44図)

調査区の中央部に位置する。東西0.19m、南北0.3m、深さ29cmである。

遺物は、木製品1点(316)が出土している。

P107 (第38図)

調査区の西部に位置する。東西0.36m、南北0.33m、深さ35cmである。

遺物は、甕1点(258)が出土している。

P134 (第38図)

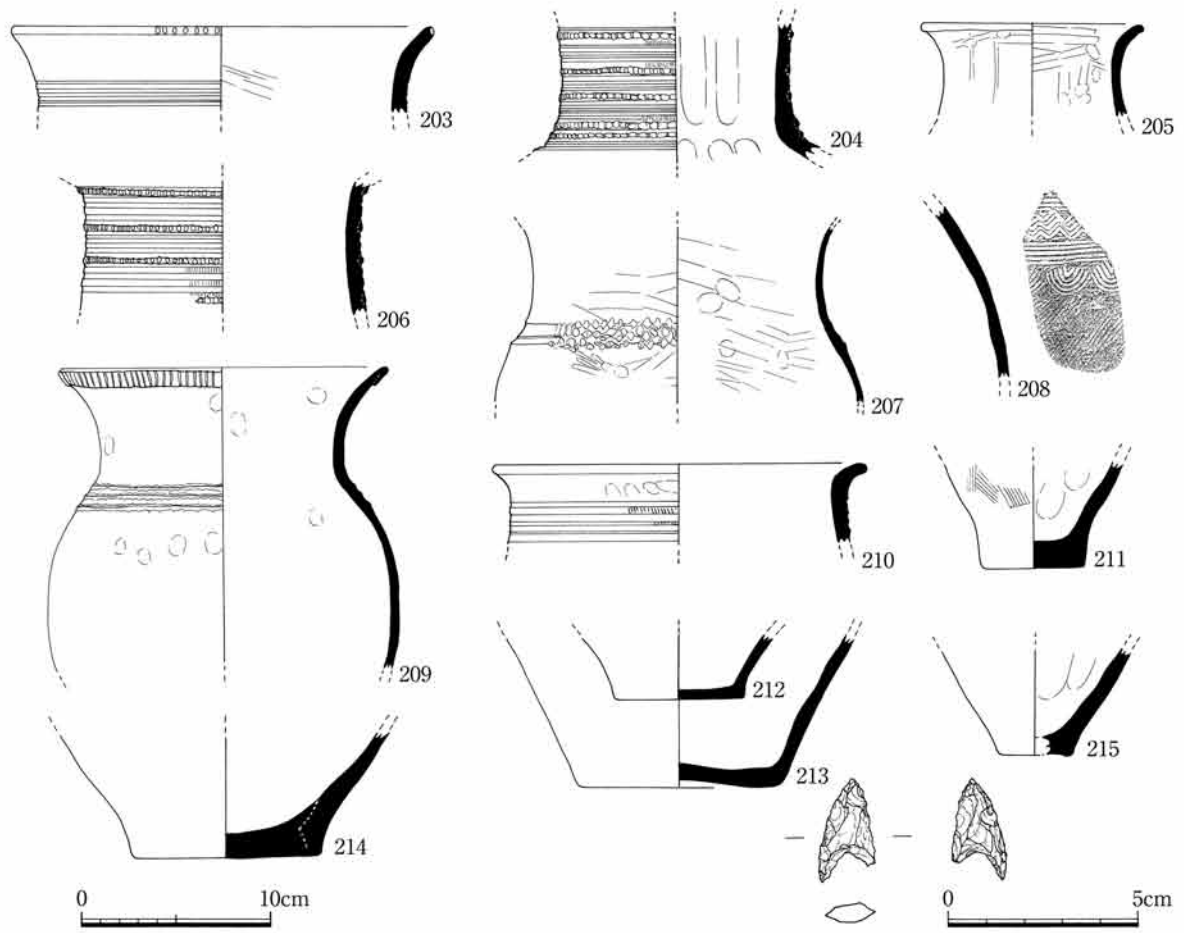
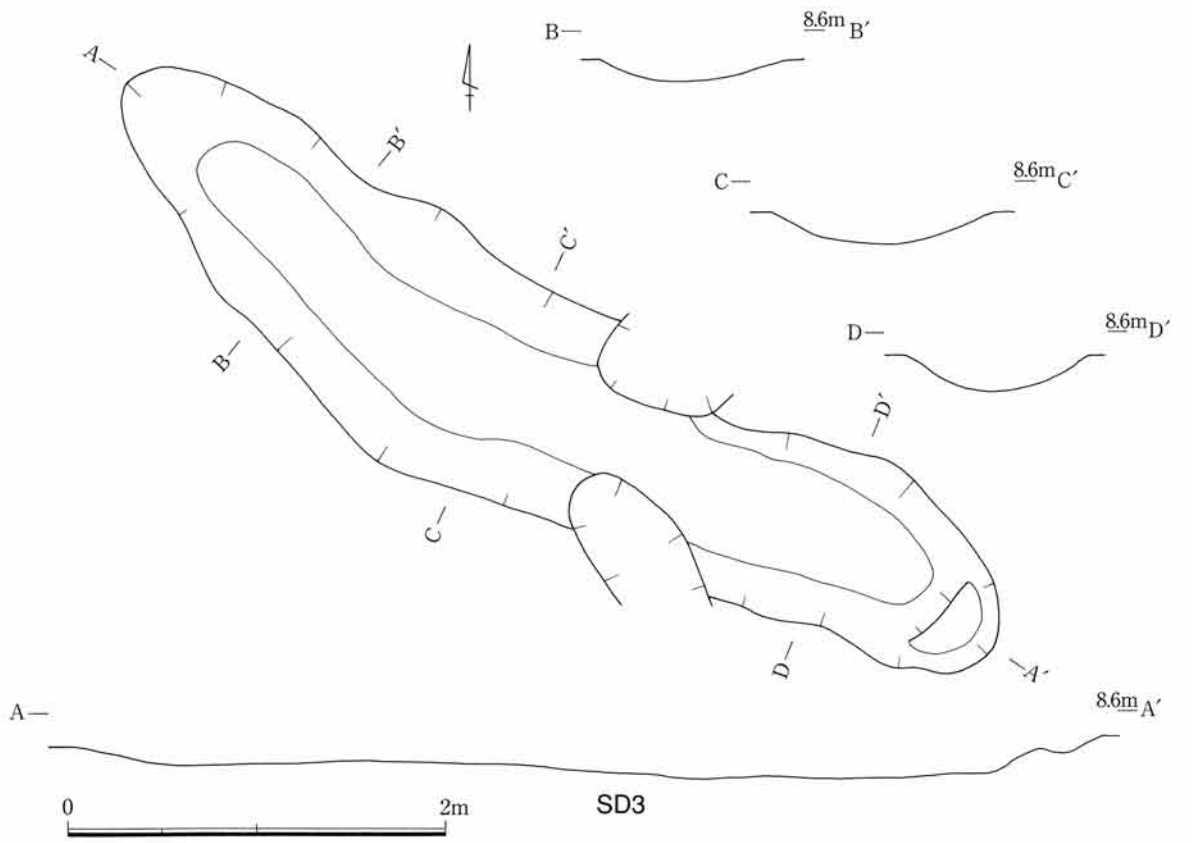
調査区の東部に位置する。東西0.29m、南北0.3m、深さ20cmである。

遺物は、蓋1点(257)が出土している。

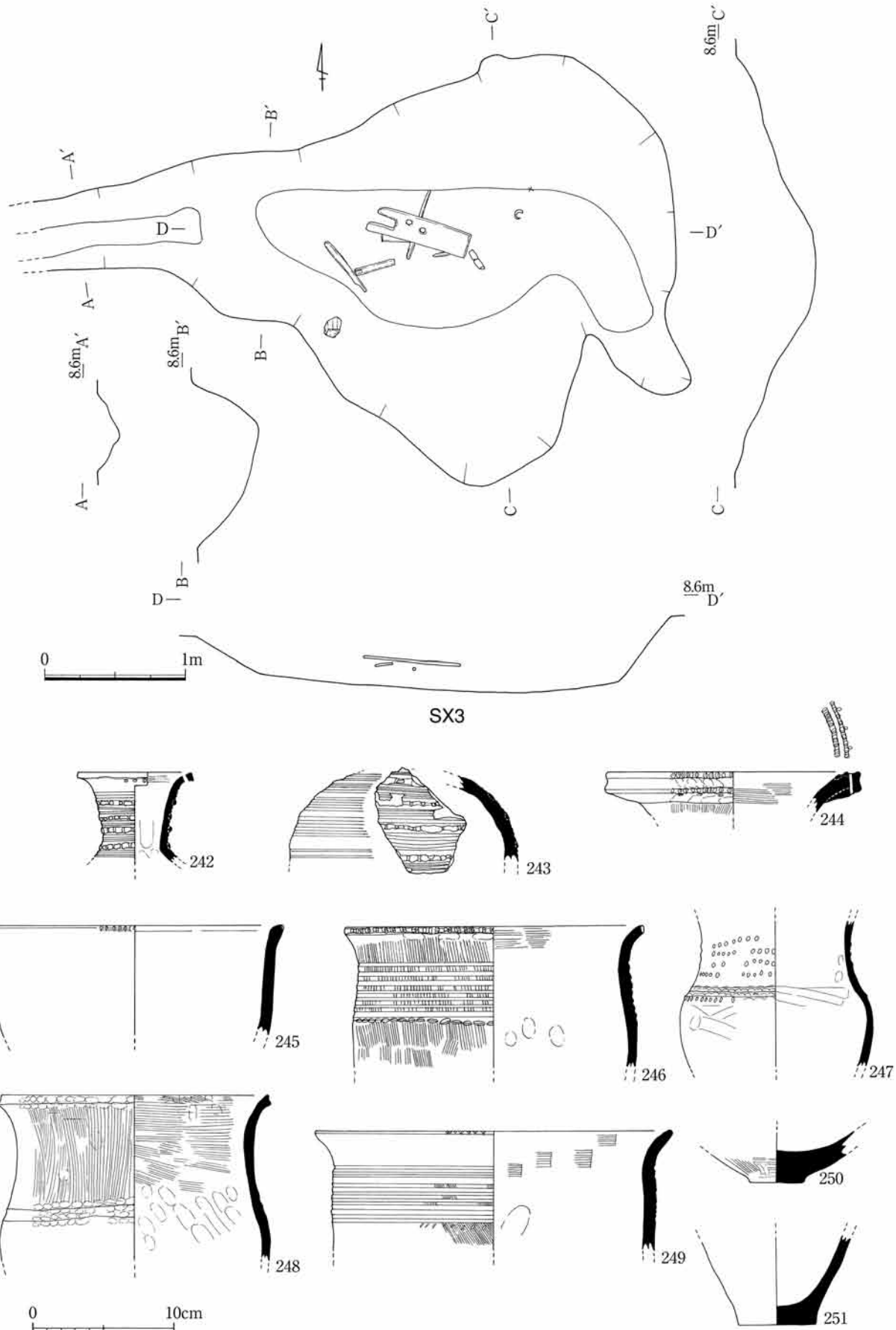
P135 (第38図)

調査区の東部に位置する。東西0.24m、南北0.24m、深さ13cmである。

遺物は、甕1点(259)が出土している。



第36図 SD3平面・エレベーション図及び出土土器・石器実測図



第37図 SX3平面・エレベーション図及び出土土器実測図

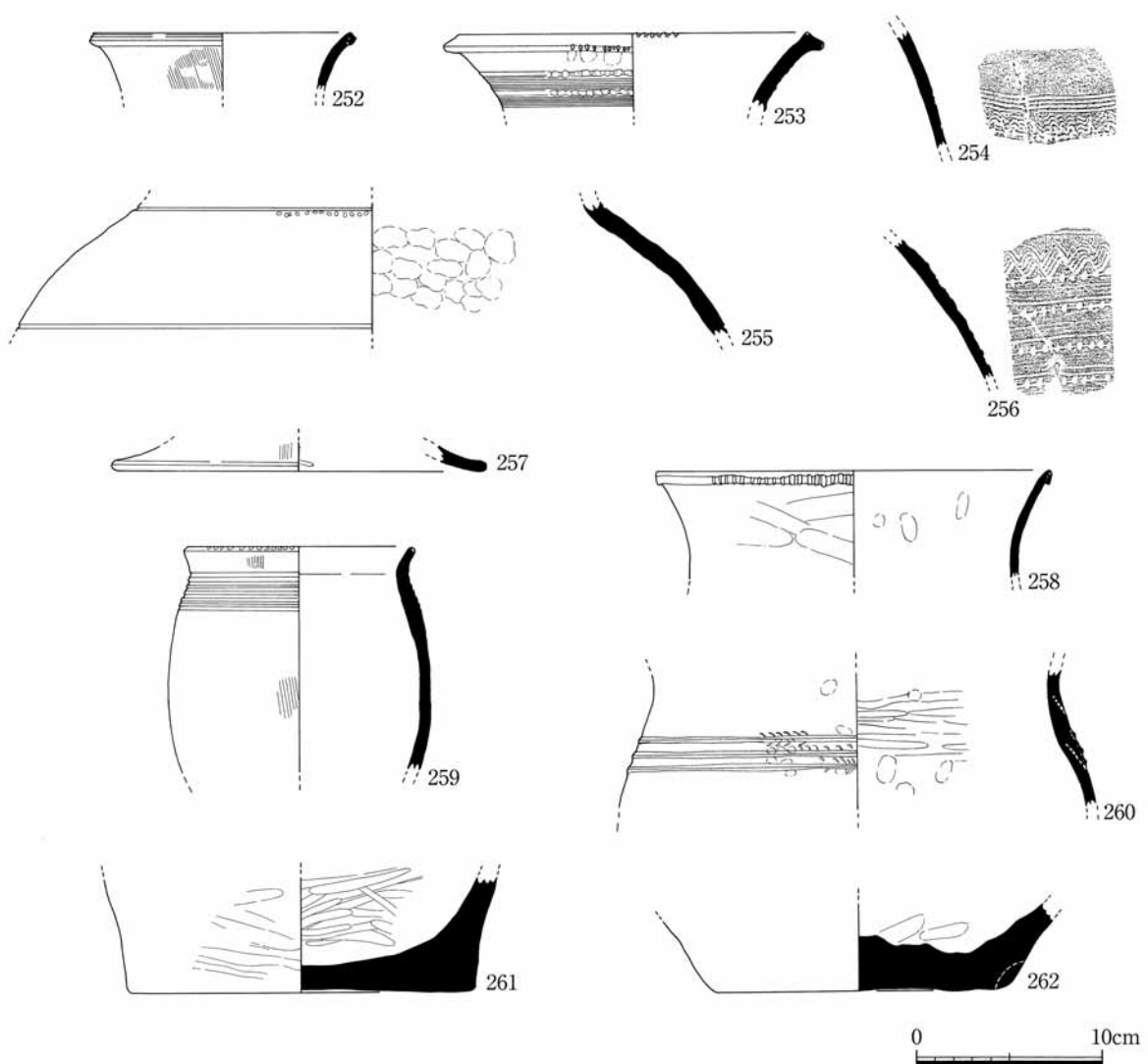
南区東斜面

調査区の東部中ほどから東に下る斜面である。

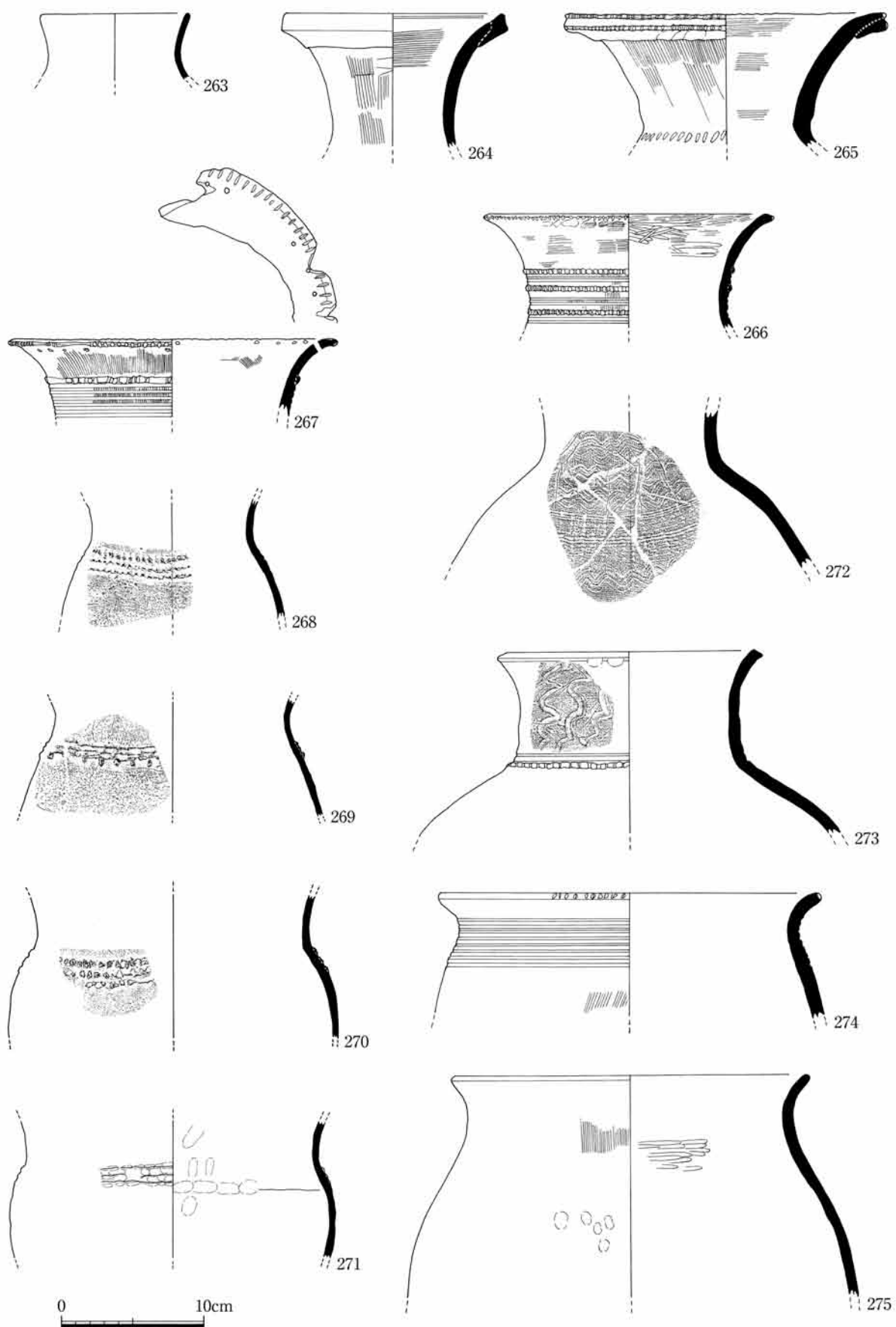
遺物は、木製品10点 (295・296・301・303・304・306・308・309・311・315) が出土している。

⑤包含層

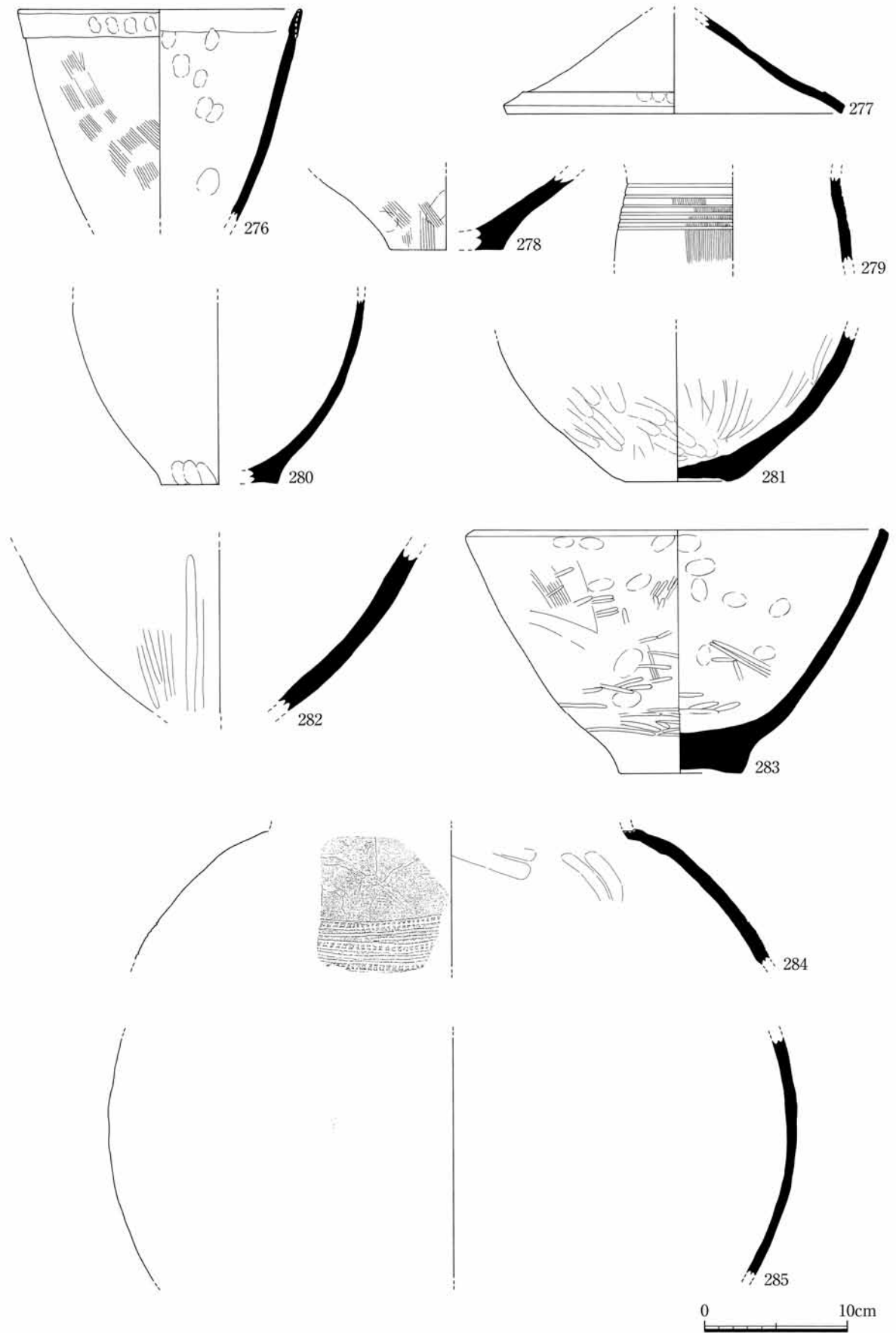
遺物は、壺22点 (252・253・254・255・256・261・262・264・265・266・267・272・273・275・278・280・281・282・284・285・286・289)、甕10点 (260・263・268・269・270・271・274・276・279・287)、鉢2点 (283・288)、甕1点 (277)、石鏃2点 (290・291)、石包丁1点 (292)、イノシシの歯、イヌの胸椎、ニホンジカの中足骨・踵骨・肋骨が出土している。



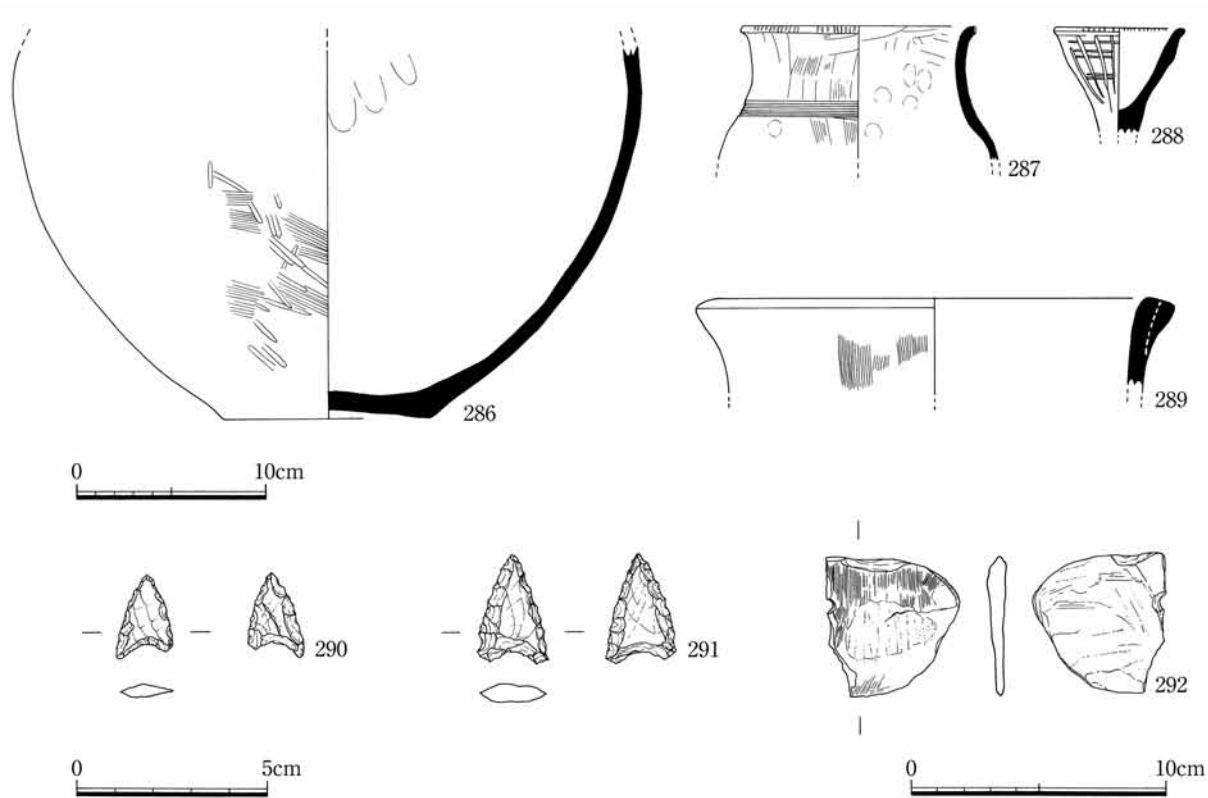
第38図 南区包含層出土土器実測図 (1)



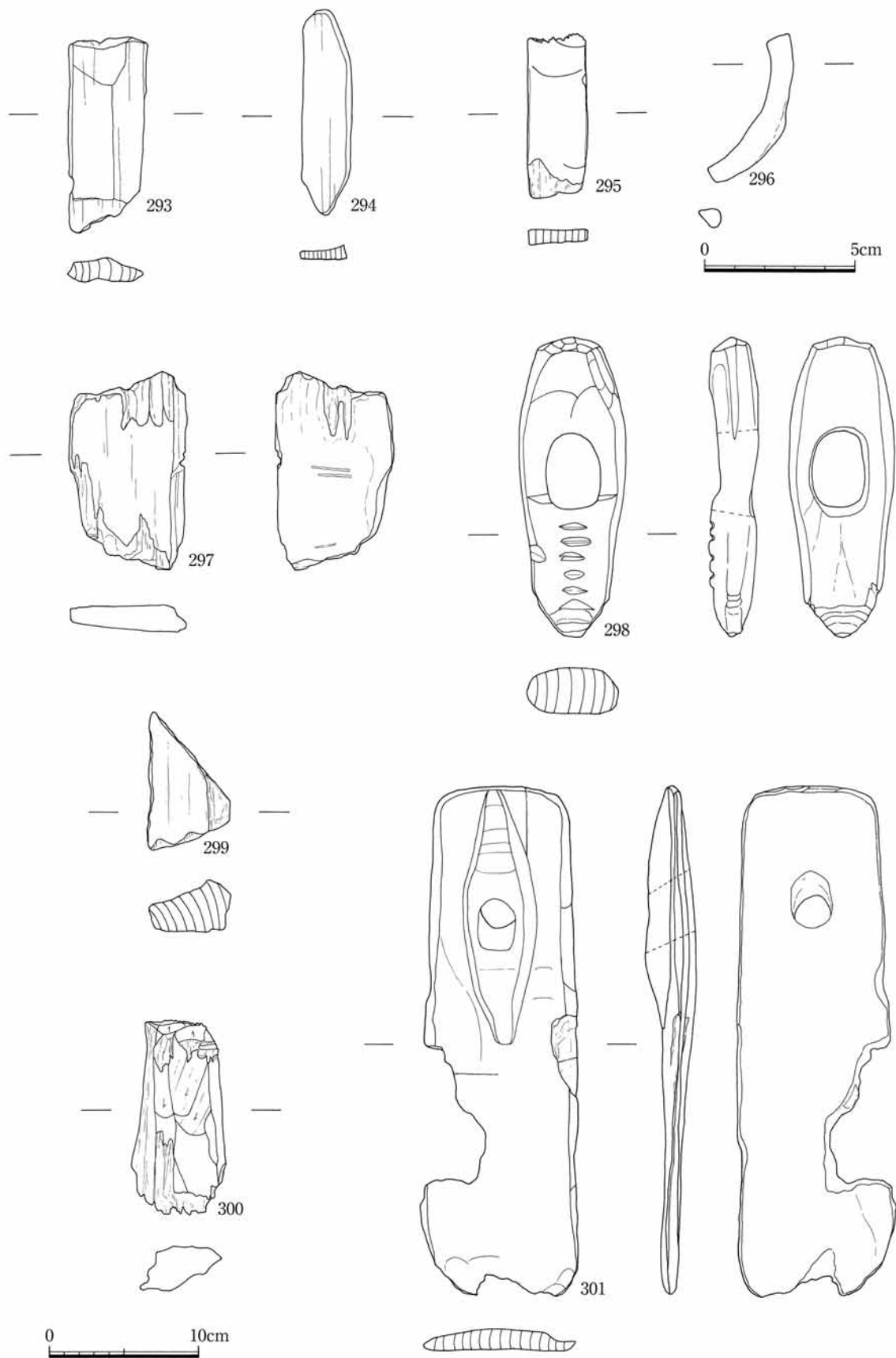
第39图 南区包含層出土土器実測图 (2)



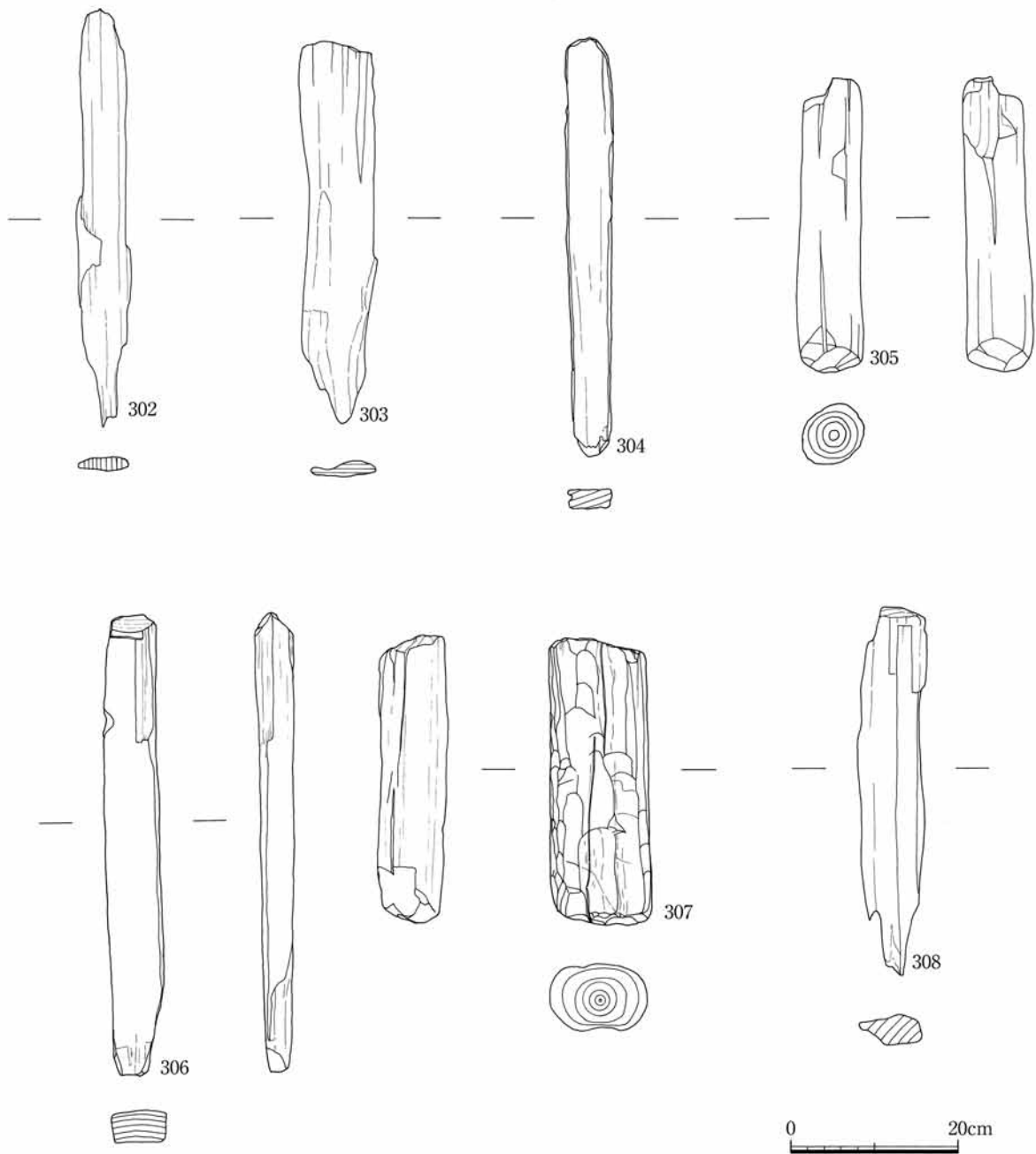
第40図 南区包含層出土土器実測図 (3)



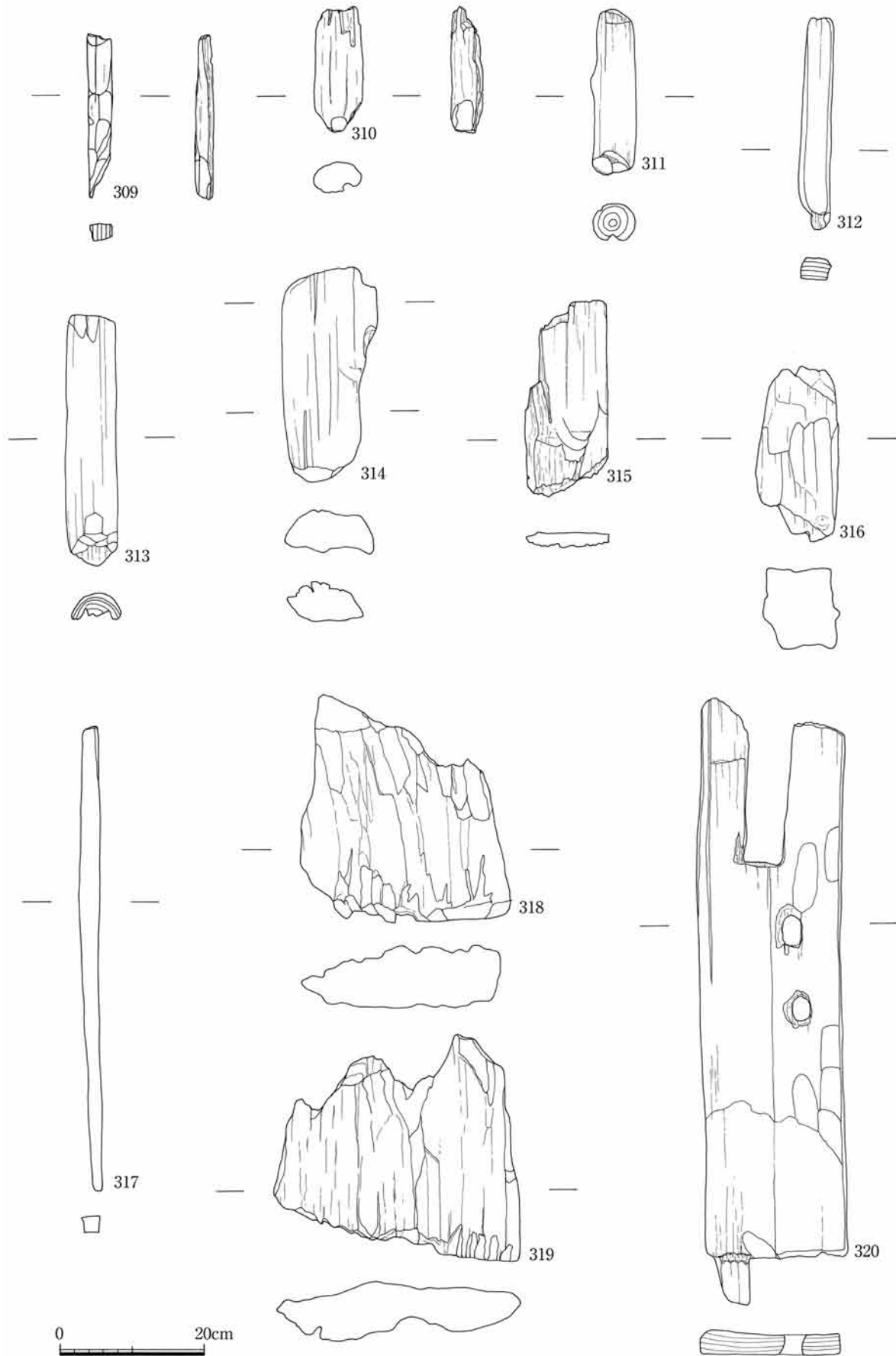
第41图 南区包含層出土土器・石器実測図



第42図 SK31・SX3・SD2・南区東斜面出土木製品実測図



第43図 SK13・SX3・SD3・南区東斜面出土木製品実測図



第44図 SK31・SK34・SX3・P23・35・89・141・南区東斜面出土木製品実測図

表1 弥生土器観察表(1)

図版NO.	図版番号	遺構番号	器種	法量(cm)				特 徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
第6図	1	SK1	壺	17.9	-	-	-	チャート、赤色粗粒砂を含む口縁部。橙色。外面：タテハケ。内面：ヨコハケ+ナデ。頸部外面：多条ヘラ沈+扁平な刻突帯。	
第6図	2	SK2	壺	19.8	-	-	-	口縁部。頸部外面：櫛描直線文+扁平な刻目。口唇面取り。下端刻み。橙色。突帯を埋め込む。二次的に被熱赤変。	
第6図	3	SK2	壺					櫛描直線文+扁平な刻目突帯を貼付。外面：タテハケチャートの粗粒を多く含む。	
第6図	4	SK2	甕	19.4	-	-	-	口唇面取り。下端刻み。口縁外面に二条隆帯貼付。チャート他の粗粒砂を多く含む。	
第6図	5	SK2	壺	14.5	-	-	-	淡桃色。チャートの粗粒を多く含む。	
第6図	6	SK1	鉢	13.0	-	-	-	チャートの赤色風化礫を多く含む。外面：タテハケ。内面：ヨコハケ。外面：煤付着。	
第6図	7	SK2	甕(蓋)	9.0	5.0	-	-	チャートの粗粒を多く含む。口縁下端を僅かにつまみ出す。	
第6図	8	SK2	壺	-	5.4	-	6.7	灰褐色。内底：指頭圧痕顕著。チャートの粗粒を多く含む。	
第6図	9	SK2	甕	-	10.5	30.0	-	チャート、頁岩の粗粒砂を多く含む。外面：タテハケ。内面：ヨコハケ。外面：煤付着。	
第7図	10	SK4	甕	18.3	24.5	-	6.0	灰色。口唇面取り+刻み。頸部外面：タテハケ。内面：右下ハケ。上胴部外面：右下ハケ。中位以下：タテハケ。頸胴部界に三条のヘラ沈。チャートの粗粒を多く含む。外面・内面：煤付着。	
第8図	11	SK6	壺	18.4	19.1	-	-	暗灰色。チャートの砂粒を含む。頸部外面：タテハケ。内面：右下りハケ。口縁外面：巾2cmの粘土帯貼付。口縁上下にハケ原体で刻み。胴部外面：右下りハケ。内面：ナデ。頸～上胴部外面：櫛描波状文と直交互に施文。最下端に扇形文を施している。	
第8図	12	SK6	壺	-	5.5	-	-	上胴部外面：櫛描直線+扁平突帯+櫛描直線+扁平突帯+双線による格子。外面：ナデ。内面：剥離。チャートの砂粒含む。	
第8図	13	SK6	壺	-	9.2	-	-	上胴部：ハケ原体でLの列点文。黄灰色。胴部外面：右下ハケ+タテヘラミガキ。内面：ナデ。チャートの砂粒多く含む。	
第8図	14	SK6	甕	24.5	16.2	-	-	頸胴部にハケ原体による列点文。灰褐色。チャートの粗粒を多く含む。巾2cmの貼付口縁+指頭押圧、下端刻み。口唇：ナデ面取り。頸部外面：タテハケ。内面：右下ハケ。胴部外面：下～上弱いヘラ削り+ナデ。胴部内面：ナデ、指頭圧痕顕著。焼成時に強い熱を受けており、形状がゆがんでいる。	
第8図	15	SK6	壺	22.0	4.9	32.0	12.5	チャートの粗粒を多く含む。口縁内面：扁平な刻目突帯3帯貼付。口唇：強いヨコナデで凹状。口縁外面：2cm巾の粘土帯貼付+指頭圧痕。頸部：3条の扁平刻目突帯、突帯間に櫛描直線文。上胴部：櫛描波状文。以下扇形文。扁平刻目突帯。断面：三角突帯(貫通刺突)。上から櫛描直線文→扁平刻目突帯→櫛描直線文→扁平刻目突帯→双線による格子→扁平刻目突帯→刺突風刻目突帯。断面三角突帯(貫通刺突)。部分的にヘラ沈。頸部外面：タテハケ。同内面：ヨコハケ。全体的に被熱赤変。	
第8図	16	SK6	壺	-	-	-	15.2	黄白色。外面：タテヘラミガキ。底部脇：ヨコケズリ。チャートの粗粒砂を含む。内底に大きな黒斑。	
第9図	17	SK6	壺	-	11.5	-	-	灰色。頸部外面：タテハケ。内面：ヨコハケ。チャートの粗粒を多く含む。	
第9図	18	SK6	直口壺	-	11.2	-	-	橙色。頸部下端：櫛描直線文。上胴部：櫛描波状文。口唇：水平面取り。外端刻み。頸部外面：タテハケ。内面：右下ハケ。胴外面：右下ナデ。内面：ナデ。指頭圧痕。チャートの粗粒を多く含む。二次的に被熱。	
第9図	19	SK6	壺	-	18.0	-	-	チャートの砂粒を含む。灰黄色。上胴部外面：上から櫛描波状文+同波状文。間をおいて櫛描直線文+同波状文+同直線文。上段と下段で櫛描原体が異なる。頸部外面：タテハケ。胴部外面：ヨコ・右下りハケ。内面：指ナデ、剥離。	
第9図	20	SK6	壺	-	23.6	23.7	10.5	灰色。チャートの粗粒砂を多く含む。上胴部外面：上から櫛描波状文+櫛描文+同波状文。外面：右下がりハケ。内面は、指頭によるナデを主体、指頭圧痕顕著。外面：全面煤付着。内面：底部付近煤付着。	
第9図	21	SK6	壺	-	14.0	37.0	-	黄白色。チャートの粗粒を多く含む。上胴部：櫛描波状文3帯-1単位6本。外面：ヨコハケ。内面ナデ。	
第9図	22	SK6	壺	-	9.7	-	9.0	チャートの粗粒を多く含む。灰褐色。内面：タテハケ+ナデ。外面：被熱赤変。剥離。	
第9図	23	SK6	甕	-	9.8	-	10.8	灰色。チャートの粗粒砂を多く含む。内面底部：激しく煤付着。外面：激しく被熱。	
第9図	24	SK6	壺	-	6.7	-	11.4	灰白色。チャートの粗粒砂を多く含む。二次的に被熱赤変。内面：器壁の剥離激しい。	
第9図	25	SK6	甕	-	7.9	-	8.4	チャートの砂粒を多く含む。灰黄色。内面：ナデ。二次的に被熱赤変。	
第9図	26	SK6	壺	-	7.9	-	10.6	赤褐色。チャートの粗粒を多く含む。外面：二次的に被熱赤変。剥離。内面：ナデ。	

弥生土器観察表(2)

図 NO.	挿図 番号	遺構 番号	器種	法量 (cm)				特 徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
第9図	27	SK6	壺	-	10.0	-	11.7	灰色～黄褐色。チャートの粗粒砂を多く含む。外面：二次的に被熱赤変。内面：剥離が激しい。	
第10図	28	SX1	壺	-	9.0	5.4	-	チャートの砂粒を含む。暗灰色。口縁内外：ヨコナデ。頸部外面：タテハケ。同内面：指頭圧痕顕著。激しく煤付着。断面も煤付着。	
第10図	29	SX1	甕	16.2	3.6	-	-	淡黄茶色。チャートの砂粒を含む。口縁：断面三角、つまんでヨコナデ。	
第10図	30	SX1	甕	13.6	2.4	-	-	薄い桃色。チャート、赤色風化礫の砂粒を含む。巾1cmの貼付口縁。口唇下端：刻み。	
第10図	31	SX1	壺	-	7.0	-	-	チャート小礫、粗粒砂を多く含む。淡黄色。頸部外面：タテヘラミガキ。内面：ナデ。頸胴界に櫛描簾状文。	
第10図	32	SX1	壺	-	3.9	-	11.0	チャート粗粒砂を多く含む。灰褐色。二次的に被熱赤変。	
第10図	33	SX1	甕	-	3.4	-	7.2	チャートの小礫を多く含む。灰褐色。外面：煤付着。	
第10図	34	SX1	甕	-	-	-	-	淡灰色。チャートの小礫、粗粒を含む。外面：ヘラ沈線を6条まで確認。	
第12図	38	SD1	壺	16.8	5.0	-	-	赤色風化礫、チャートの粗粒を含む。灰茶色。口唇：面取り。口縁内外面：ヨコナデ。頸部外面：タテハケ+ナデ。内面：ナデ。外面：煤付着。	
第12図	39	SD1	甕	-	-	-	-	暗灰色。チャートの砂礫を含む。口唇：尖り気味。口縁下：刻目突帯。	
第12図	40	SD1	壺	20.0	4.0	-	-	橙色。口唇：面取り。口縁内面：扁平突帯3条、径0.3cmの円孔列を上→下に穿つ。チャートの粗粒を含む。	
第12図	41	SD1	壺	18.6	4.5	-	-	灰白色。赤色風化礫、チャートの小礫を多く含む。	
第12図	42	SD1	壺	23.0	7.0	-	-	チャートの粗粒砂を含む。2.5cm巾の粘土帯貼付口縁。外面：指頭圧痕。口縁圧痕。口唇：強いナデにより凹状。頸部外面：タテハケ。同内面：ヨコハケ。	
第12図	43	SD1	壺	-	-	-	-	チャートの粗粒を多く含む。頸胴界に段あり。ハケ状原体で列点文。外面：ナデ。内面：ヨコハケ。	
第12図	44	SD1	甕	14.0	12.1	-	7.2	暗灰色。石英。チャートの粗粒を少量含む。口縁：0.5cm前後の貼付口縁。口唇：水平な面取り、外端に刻み。外面上位：ヨコハケ。胴中位：ヨコナデ。底部脇は、右→左の削りのまま残る。外面：煤付着。	
第12図	45	SD1	甕	19.6	7.5	-	-	淡茶色。精選された胎土。1cm巾の貼付口縁。口唇：面取り。胴外面：極細い目理になる。ハケ。胴内面：ナデ。上部にタタキを思わせる圧痕あり。口～胴外面にタール状の異色物付着。	
第12図	46	SD1	壺	-	6.5	-	4.0	赤色風化礫、チャートの小礫を含む。橙色。内面：黒色物塗布。内面：ヨコハケ。外面：器表の荒れが激しい。	
第12図	47	SD1	甕	21.0	4.0	-	-	チャートの小礫、粗粒を含む。灰黄色。	
第12図	48	SD1	甕	15.0	16.0	-	-	茶灰色。精選された胎土、雲母を含む。巾1cmの貼付口縁。口唇刻み。頸部外面：タテハケ。内面：ヨコハケ。頸胴界にハケ原体による列点文+2条の沈線。上胴部外面：右下りハケ。中位以下：タテヘラミガキ。内面：ナデ。外面：はげしく煤付着。	
第12図	49	SD1	甕	-	6.8	-	-	チャートの粗粒砂を含む。灰茶色。頸胴界に扁平な貼付突帯1条と2条の微隆起帯を貼付。前者は、刻目を施し、後者の下帯に浮文を貼付。頸部外面ナデ。胴部外面：擦痕。外面：煤付着。	
第12図	50	SD1	壺	-	-	-	-	チャートの粗粒を多く含む。淡桃色。接合部で剥離。口縁：ヨコハケ。	
第12図	51	SD1	壺	-	4.6	-	9.2	赤色風化礫とチャートの粗粒を多く含む。淡茶色。内面：黒斑。	
第12図	52	SD1	壺	-	6.2	-	9.4	チャート、赤色風化礫を多く含む。外面：タテハケ。内面：ナデ。	
第12図	53	SD1	壺	-	7.5	-	10.4	チャートの粗粒砂を多く含む。内外：器表の荒れが激しい。	
第12図	54	SD1	甕	-	6.0	-	6.0	チャート他の小礫粗粒を多く含む。外面：器表の荒れが激しい。内面：ナデ。外面：煤付着。外底のみ煤付着していない。	
第13図	55	北区 包含層	壺	16.9	7.0	-	-	橙色。頸部：櫛描直線文。口唇凹状、上下刻み。内・外面：器表の荒れが激しい。チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。	
第13図	56	北区	壺	15.0	4.5	-	-	橙色。チャートの粗粒を多く含む。口唇：面取り。口縁外面：1.5cm巾の粘土帯貼付、指頭圧痕。口縁内面：列点文。	
第13図	57	北区 包含層	壺	19.3	5.7	-	-	チャート、赤色風化礫の粗粒を多く含む。灰褐色。口唇：丸味。口縁外面：2cm巾の粘土帯貼付。指頭圧痕。頸部外面：櫛描直線文+扁平な刻目突帯貼付。二次的に被熱。	

弥生土器観察表(3)

図 NO.	挿図 番号	遺構 番号	器種	法量 (cm)				特 徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
第13図	58	北区 包含層	壺	15.0	7.1	-	-	灰桃色。外面：調整不明。内面：ナデ。チャートの粗粒砂を多く含む。	
第13図	59	北区 包含層	壺	22.0	3.5	-	-	灰色。チャートの粗粒を多く含む。口縁外面：巾1cmの粘土帯貼付。口唇：強いヨコナデ。上下刻み。内外：ヨコナデ。	
第13図	60	北区 包含層	壺	-	-	-	-	チャートの粗粒砂を多く含む。茶灰色。ヘラ沈+断面カマボコ状の刻目を貼付し、爪状原体で刺突。刻みには布圧痕がみられる。内・外ヨコナデ。	
第13図	61	北区 包含層	壺	-	-	-	-	桃白色。チャート、風化礫の粗粒を多く含む。櫛描直線文を配し、扁平な刻目突帯と4帯子で認む。突帯の胎土は異なる。上・下接合面で剥離。	
第13図	62	北区 包含層	壺	28.0	-	-	-	灰色。チャートの粗粒砂を多く含む。口縁外面：巾2cmの粘土帯を貼付。口唇：刻み（ハケ原体）。口縁内面：4条の細いヘラ沈線文を施し、ハケ原体で列点文を配す。頸部外面：タテハケ、同内面：右下りハケ。胴部上端に櫛描扇状文。	
第13図	63	北区 包含層	壺	22.4	9.0	-	-	橙色。チャートの粗粒を多く含む。口縁外面：巾2cmの貼付口縁+指頭圧痕。口唇：強いヨコナデ、貫通刺突。頸部外面：櫛描直線文2帯とヘラ沈、扁平な刻目突帯貼付。突帯は、あらかじめひかれたヘラ沈線に埋めるように施文。突帯は、胎土が異なる。口縁内面：同種の突帯あり。	
第13図	64	北区 包含層	壺	28.8	5.5	-	-	チャートの粗粒を含む。橙色。口唇：凹状上下刻。口縁内面：短沈線による複線山形文と櫛描扇形を配す。口縁外面：巾2cmの粘土帯貼付。頸部外面：タテハケ。内面：ヨコハケ。	
第13図	65	北区 包含層	鉢	25.0	4.6	-	-	チャートの粗粒、赤色風化礫を多く含む。口縁外面：巾1.5cmの粘土帯貼付。口唇：面取り。口縁内・外面：ヨコナデ。胴内・外面：ナデ。外面：煤付着。	
第13図	66	北区 包含層	壺	18.3	14.0	-	-	黄灰色。外面：ヘラミガキ。内面：ナデ。指頭圧痕顕著。口縁肥厚。チャート、赤色風化礫、その他の粗粒砂を含む。	
第13図	67	北区 包含層	甕	22.5	-	26.5	-	チャート、赤色風化礫の粗粒を多く含む。口唇：面取り刻み。頸胴部界に2条の微粒起帯。上下を指頭でつまむ。頸部外面：ナデ。同内面：ヨコハケ。胴部外面：右下がりハケ。同内面：指ナデ。	
第13図	68	北区 包含層	壺	-	-	-	-	チャート、風化礫を含む。淡黄茶色。外面：上から櫛描直線文+列点文+櫛描直線文。内・外面：ナデ。	
第13図	69	北区 包含層	甕	18.0	6.2	-	-	乳白色。チャートを多く含む。口唇：ヨコナデ面取り。頸部外面：タテハケ。同内面：右下りハケ。	
第14図	70	北区 包含層	甕	11.5	5.4	-	-	チャートの粗粒を多く含む。灰茶色。口唇：丸味。頸胴部界：櫛描直線文。頸部外面：タテハケ。同内面：ヨコハケ。	
第14図	71	北区 包含層	甕	16.3	10.6	16.4	-	暗茶色。チャートの粗粒を含む。口唇：丸味。頸胴部界：粘土を上下から集めたような微隆起帯を巡らし、下端に爪圧痕。頸部外面：タテハケ。胴部外面：右下がりハケ。内面：ナデ。外面：激しく煤付着。	
第14図	72	北区 包含層	甕	16.2	9.5	16.5	-	チャートの粗粒を多く含む。灰色。口唇：強いヨコナデにより凹状。頸胴部界：3条単位の櫛描直線文。頸部外面：タテハケ。胴内面：ヨコハケ。外面：全面激しく煤付着。	
第14図	73	北区 包含層	甕	14.9	15.6	13.4	-	チャートの小礫を含む。茶灰色。口唇：面取り。頸部外面：目の荒いタテハケ。同内面：ヨコハケ。頸胴部界に2条のふい凹線が走り、爪状原体による左痕列あり。胴部：下→上の擦痕+ナデ。頸部と調整が異なる。	
第14図	74	北区 包含層	甕	18.8	6.1	-	-	淡灰色。赤色風化礫を多く含む。口縁外面：巾1cmの粘土帯貼付け。内外面：ナデ。外面：激しく煤付着。	
第14図	75	北区 包含層	甕	-	-	-	-	チャートの粗粒砂を少量含む。外面：タテヘラミガキ。内面：ナデ。器面：ハジケ飛び剥離。	
第14図	76	北区 包含層	壺	-	-	20.0	-	チャートの粗粒を少量含む。外面：タテヘラミガキ。内面：ナデ。器面：ハジケ飛び剥離。	
第14図	77	北区 包含層	甕	21.6	6.4	-	-	黄褐色。チャートの粗粒を含む。口唇：刻み。二次的被熱。	
第14図	78	北区 包含層	甕	-	-	-	-	チャート、他の粗粒砂を多く含む。茶灰色。頸胴部界に1条の沈線。上胴部：上下から粘土を集めたような微隆起帯3条。外面：タテハケ。内面：指頭圧痕顕著。外面：煤付着。	
第14図	79	北区 包含層	甕	-	3.6	-	6.8	黄灰色。チャートの粗粒を多く含む。欠損断面に煤付着。底部：黒班。内外面：ナデ。	
第14図	80	北区 包含層	甕	-	4.5	-	2.8	チャートの粗粒を含む。黄褐色。底部外縁：指頭圧痕顕著。内外面：ナデ。	
第14図	81	北区 包含層	甕	-	-	-	-	灰色。チャートの粗粒砂を多く含む。内外面：ナデ。破損後煤付着。断面：煤付着。	
第14図	82	北区 包含層	甕	-	-	-	-	チャート、赤色風化礫を多く含む。灰桃色。底部：黒班。	

弥生土器観察表(4)

図 NO.	挿図 番号	遺構 番号	器種	法量(cm)				特 徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
第14図	83	北区 包含層	甕	-	4.9	-	6.0	茶灰色。チャートの粗粒砂を多く含む。外面：タテハケ。外面：煤付着。	
第14図	84	北区 包含層	甕	-	7.2	-	6.8	チャートの粗粒を多く含む。外面：ナデ。被熱煤付着。	
第14図	85	北区 包含層	壺	-	7.4	-	7.4	チャート、赤色風化礫を多く含む。黄褐色。二次的に被熱。	
第14図	86	北区 包含層	壺	-	6.6	-	9.6	黄灰白色。チャート、赤色風化礫の粗粒を含む。外面：タテハケ。	
第14図	87	北区 包含層	壺	-	-	-	-	チャートの粗粒を多く含む。黄灰色。底部：未完成のまま焼成している。外面：ハケ。	
第14図	88	北区 包含層	壺	-	7.1	-	9.0	チャートの粗粒を多く含む。灰桃色。内外面：ナデ。下胴部～底部に大きな黒班。	
第14図	89	北区 包含層	壺	-	-	-	-	チャートの粗粒砂を多く含む。灰桃色。二次的に被熱。	
第15図	90	北区 包含層	壺	19.4	5.1	-	-	桃白色。口縁内面：刺突列。頸部外面：櫛描直線文1帯。口唇：太い原体の刺突による刻目。赤色風化礫、チャートの粗粒を含む。	
第15図	91	北区 包含層	甕	17.1	4.4	-	-	チャートの粗粒を多く含む。頸部外面：タテハケ。同内面：ヨコハケ。口唇：ヨコナデ面取り。口縁外面：ヨコナデ、ヘラミガキ。	
第15図	92	北区 包含層	壺	17.8	4.2	-	-	橙色。口唇凹状、上下刻み。口縁内面：扁平な刻目。粘土帯3条貼付。貫通する円孔列。内・外面：器表の荒れがひどい。赤色風化礫、頁岩の粗粒を多く含む。	
第15図	93	北区 包含層	壺	15.6	6.2	-	-	チャートの粗粒を多く含む。淡茶色。口縁外面：巾1cmの粘土帯貼付。口唇：面取り、下端刻み。頸部外面：タテハケ。同内面：ナデ。外面：激しく煤付着。	
第15図	94	北区 包含層	壺	24.0	-	-	-	黄褐色。チャート、赤色風化礫の粗粒を多く含む。口縁外面：巾2cmの粘土帯貼付。口唇：強いヨコナデで凹状。頸部外面：タテハケ。	
第15図	95	北区 包含層	壺	20.8	7.3	-	-	灰黄色。頸部：ヘラ沈線。9本まで認む。口縁内外：ヨコナデ。頸部外面：タテハケ。チャートの粗粒を含む。	
第15図	96	北区 包含層	甕	-	-	-	-	乳白色。赤色風化礫の粗粒を含む。口唇：刻み。ヘラ沈線7本。	
第15図	97	北区 包含層	壺	16.0	11.2	-	-	黄褐色。口唇面取り。頸部外にヘラ沈線3条。赤色風化礫を多く含む。	
第15図	98	北区 包含層	甕	15.0	6.3	-	-	チャートの粗粒を多く含む。口縁下端：つまみ出し。外面：はげしく煤付着。器表：剥離。	
第15図	99	北区 包含層	甕	19.0	7.0	-	-	チャートを含まない。長石、石英の粗粒砂を多く含む。内・外面：ミガキ。外面：煤付着。口唇：丸味。	
第15図	100	北区 包含層	甕	26.3	11.0	-	-	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。口唇：ヨコナデで凹状。頸部外に細いヘラ沈線1条。頸部外面：タテハケ。胴部外面：ナデ。外面：煤付着。	
第15図	101	北区 包含層	甕	38.0	9.5	-	-	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。黄茶色。口縁：下端を指でつまみ出す。頸部外面：タテハケ。同内面：ヨコハケ。外面：煤付着。	
第15図	102	北区 包含層	甕	34.0	13.9	34.8	-	黄色。赤色、灰色風化礫、粗粒を多く含む。口縁外面：巾1cmの粘土帯貼付。口唇：丸みを帯びて刻み。上胴部：櫛描直線文+列点文+櫛描直線文。外面：煤付着。	
第16図	103	北区 包含層		-	-	-	-	チャート、赤色風化礫を含む。乳白色。内外面：ナデ。	
第16図	104	北区 包含層	鉢	-	5.0	-	7.2	灰色。チャートの粗粒、小礫を含む。内外面：ナデ。	
第16図	105	北区 包含層		-	5.5	-	5.0	桃灰色。チャート小礫、粗粒砂を多く含む。外面：被熱剥離。	
第16図	106	北区 包含層	壺	-	5.3	-	5.8	橙色。チャート、赤色風化礫の粗粒を含む。外面：タテハケ。内面：ナデ。	
第16図	107	北区 包含層	甕	-	5.5	-	8.0	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。外面：木理の荒いタテハケ。内面：ナデ。	
第16図	108	北区 包含層	壺	-	5.0	-	9.0	チャート、石英を含む。外面：タテハケ。激しく煤付着。	
第16図	109	北区 包含層 (礫層)	蓋	10.1	6.0	-	-	チャートの砂礫を含む。灰黄色。天井部付近：指頭圧痕顕著。内外面：ナデ。	
第16図	110	北区 包含層	壺	-	7.7	-	10.0	チャートの粗粒砂を多く含む。内外面：ナデ。	
第16図	111	北区 包含層	鉢	-	-	-	-	砂粒をほとんど含まない。黄茶色。内面：ナデ。外面：タテハケ。激しく煤付着。器壁は、剥離。外傾接合。	

弥生土器観察表(5)

図 NO.	挿図 番号	遺構 番号	器種	法量(cm)				特 徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
第16図	112	北区 包含層	壺	-	7.4	-	11.2	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。内面：ナデ。	
第16図	113	北区 包含層	壺	-	4.8	-	7.0	黄褐色。チャートの小礫。赤色風化礫を多く含む。内面：煤付着。	
第16図	114	北区 包含層	壺	17.8	32.6	-	9.0	灰茶色。上胴部上下2帯の櫛描直線文帯、その間に2帯の同波状文帯。胴部外面：タテハケ、口唇：ヨコナデ+下端刻。中位以下：ハケ+タテヘラミガキ。胴部内面：指ナデ。頸部内外面：ヨコナデ基調。外底：ケズリ。外面：煤付着。断面に巾2.5cmの粘土帯接合部を認む。赤色風化礫、チャートの細粒を少量含む。	
第21図	119	SK19	壺	17.8	6.0	-	-	口縁内面：ハケ状原体で列点文。頸部外面：櫛描直線文+列点文。口唇：強いヨコナデ。口唇上端：刻み。チャートの粗粒を多く含む。	
第21図	120	SK19	甕	15.4	5.9	-	-	黄褐色。チャートの粗粒砂を多く含む。口唇：面取り。ハケ状原体の圧痕による段。内面：ナデ。口縁外面：タテハケ+ヨコナデ。	
第21図	121	SK19	甕	14.8	-	-	-	風化礫を含む。口唇：ヨコナデ。下端：刻み。内面：ヨコナデ。外面：タテナデ。	
第21図	122	SK19	壺	-	-	-	-	チャート、赤色風化礫の粗粒を施す。頸部外面：扁平な粘土帯を貼付し刺突を施す。その下に櫛描直線文。上胴部：ハケ原体による刺突文+櫛描直線文+同波状文。	
第21図	123	SK19	甕	18.6	-	-	-	チャート、他の風化礫の粗粒砂を多く含む。口唇：面取り。口縁内外：ヨコハケ。	
第21図	124	SK19	甕	23.0	-	-	-	チャート、風化礫の粗粒を多く含む。口唇：面取り。外面：刻目突帯。	
第21図	125	SK19	壺	19.4	-	-	-	赤色風化礫の粗粒を多く含む。頸部外面：櫛描直線文+扁平刻目突帯。タテハケ。同内面：ヨコハケ。黒色物塗布。	
第21図	126	SK19	甕	23.0	-	-	-	チャート、他の粗粒砂を多く含む。口唇：面取り。下端：刻み。外面：隆帯を2条貼付し、指で押さえる。煤付着。	
第21図	127	SK19	壺	-	4.0	-	-	チャートの粗粒砂を多く含む。胴部中位：ヘラ沈線4条。上半位：強い熱を受けており赤変。欠損断面：赤変。外面：タテハケ、煤付着。	
第21図	128	SK19	壺	-	-	-	-	チャート・風化礫の粗粒を多く含む。灰桃色。口唇：丸味。口縁外面：1.5cmの粘土帯+指頭圧痕。外面：タテハケ。激しく被熱。	
第21図	129	SK19	甕	21.0	-	22.0	-	石英、長石の粗粒を多く含む。橙色。口縁内外：ヨコナデ。口唇：面取り。胴部外面：タテハケ。同内面：ヨコナデ。胴部中位に右上がりの列点（ハケ原体）。	
第22図	131	SD2	壺	8.1	-	-	-	チャート粗粒砂を多く含む。口唇：丸味。口縁外面：巾1.2cmの粘土帯貼付。頸部外面：タテハケ。	
第22図	132	SD2	壺	14.4	5.8	-	-	外面：浅黄橙色。内面：灰白色。上・下端刻目。頸部：櫛描直線文。上胴部：簾状文を刺突文風に施す。口唇凹状、赤色風化礫を多く含む。	
第22図	133	SD2	壺	-	-	-	-	淡茶色。チャート、赤色風化礫を多く含む。上胴部外面：双状原体による多条沈線帯+列点文。その下に弧文を施す。内外面：ナデ。	
第23図	137	南区 SX2	甕	31.7	-	-	-	チャート粗粒砂を含む。口縁：やや肥厚。内外面：ヨコヘラミガキ。	
第23図	138	SX2	壺	-	-	-	-	チャートの粗粒砂を多く含む。灰茶色。外面：扁平刻目突帯を沈線内に埋めて、突帯間に櫛描波状文を1帯づつ4帯配し、その下に櫛描簾状文の一部が見える。外面：ハケ。内面：ナデ。	
第23図	139	SX2	壺	-	-	-	-	チャートの粗粒砂を多く含む。茶黄色。外面：櫛描波状文+扁平粘土帯をヘラ沈線に埋める+櫛描波状文+扁平粘土帯+断面三角突帯+櫛原体による刺突風簾状文。外面：ハケ。内面：ナデ。黒色物を塗布。	
第23図	140	SX2	甕	10.7	-	-	-	チャート他の粗細粒砂を含む。口唇：丸味。口縁外面：巾1cmの粘土帯貼付。頸部外面：タテハケ。同内面：ヨコハケ。外面：煤付着。	
第23図	141	SX2	甕	16.8	-	-	-	チャート、赤色風化礫を多く含む。口唇：丸味。外面：激しく煤付着。	
第25図	142	SK15	壺	15.0	33.0	26.8	10.2	口縁内面：末端が垂下。上胴部：櫛描簾状文+同直線文+同簾状文+同波状文+同直線文+同波状文。口唇凹状、下端刻目。口縁外面：巾1.5cmの粘土帯貼付。口縁内面：扁平な刻目突帯。頸部外面：ヨコナデ。胴部外面：ナデ。胴部内面：指頭によるナデ。赤色風化礫の粗粒・チャートの粗粒砂を多く含む。	

弥生土器観察表(6)

図 NO.	挿図 番号	遺構 番号	器種	法量 (cm)				特 徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
第25図	143	SK15	壺	26.8	10.5	-	-	チャートの粗粒砂を多く含む。口縁内面：ハケ原帯による列点文。口唇：強いヨコナデで凹状を呈す。口唇：上下端刻み。口縁外面：巾2cmの粘土帯貼付。外面：タテハケ+ヨコナデ。内面：ヨコハケ。被熱赤変。	
第25図	144	SK15	壺	12.0	12.9	-	-	乳白色。口縁内面：ハケ原体による列点文+細いヘラ沈線。外面：巾1.5cmの粘土帯貼付。内→外に小孔刺突列。口唇：凹状。上下に刻み。頸部外面：全面に波状文。上胴部：櫛描直線文+同波状文+三角突帯+櫛描波状文+同直線文+三角突帯+櫛描扇形文。下段の三角突帯は、全周せず、胴部中位に大きな黒斑。頸部内面：ヨコハケ。胴部内面：指ナデ。チャートの粗粒砂を多く含む。	
第26図	145	SK15	甕	12.8	5.5	-	-	黄灰色。チャート、他の粗粒砂を含む。激しく被熱。口唇：面取り。下端：刻み。頸部外面：タテに4条の微隆起貼付。列点文。頸部内面：押し風列点文。	
第26図	146	SK15	甕	16.6	3.8	-	-	チャートの粗粒砂を含む。口唇：面取り。外面：タテハケ。内面：ヨコハケ。外面：煤付着。	
第26図	147	SK15	壺	15.7	5.4	-	-	桃橙色。口縁外面：巾1cmの粘土帯貼付+指頭圧痕。口唇：面取り。外面：タテハケ。内面：ヨコハケ+ヨコヘラミガキ。チャート、その他の粗粒砂を多く含む。	
第26図	148	SK15	甕	26.2	-	-	-	淡桃色。赤色風化礫を多く含む。口縁：わずかに上・下に拡張。口唇：面取り。上下端：刻み。外面：タテハケ。内面：ヨコハケ。	
第26図	149	SK15	甕	23.0	-	-	-	灰色。頁岩、他の粗粒砂を多く含む。口唇：面取り。下端：細い刻。頸部外面：微隆起3条貼付。内・外面：ナデ。	
第26図	150	SK15	壺	26.0	11.7	-	-	桃色。口縁外面：巾1cmの粘土帯貼付。口唇：全面刻み。内・外面：丁寧なヨコナデ。チャート、赤色風化礫を含む。	
第26図	151	SK15	甕	10.0	-	-	-	灰茶色。頁岩、他の粗粒砂を多く含む。口唇：面取り。下端：細い刻み。頸部外面：ヨコ・タテ方向の微隆起2帯。上胴部：微隆起帯を3帯貼付し、下段の微隆起に浮文。外面：ナデ。	
第26図	152	SK15	蓋	24.0	5.6	-	-	チャートの粗粒砂を含む。外面：タテハケ。内面：ヨコハケ。天井部内面：ナデ。	
第26図	153	SK15	甕	15.6	14.1	-	-	石英、他の粗粒を含む。暗茶色。上胴部外面：刺突文。口縁内外：強いヨコナデ。口縁端：わずかにつまみ上げ。上胴部外面：タテハケ。中位以下：タテヘラミガキ。同内面：タテヘラミガキ。	
第26図	154	SK15	壺	18.0	-	-	-	チャートの粗粒砂を多く含む。扁平刻目突帯+櫛描直線文+扁平刻目突帯+櫛描直線文+扁平刻目突帯+上下弦の重弧文。弧文間には、タテの櫛描直線文+扁平刻目突帯+刺突文風の櫛描扇状文。内面：ナデ。突帯の刻はハケ原体。内面：灰白色。外面：にぶい黄橙。	
第26図	155	SK15	鉢	15.2	6.2	-	5.6	チャートの粗粒砂を含む。茶色。外面：ハケ+ヘラミガキ。内面：ナデ。外面：激しく煤付着。	
第26図	156	SK15	甕	-	4.8	-	6.5	黄灰色。チャートの粗粒砂を含む。内外面：煤付着。	
第26図	157	SK15	甕	-	-	-	-	チャート、頁岩の砂粒を多く含む。暗灰色。外面：タテハケ。被熱。	
第26図	158	SK15	甕	-	-	-	-	チャートの粗粒を多く含む。黒色。外底以外全面：煤付着。	
第26図	159	SK15	甕	-	4.2	-	4.7	チャートの粗粒砂を含む。外面：タテハケ。内面：ナデ。	
第26図	160	SK15	甕	-	8.2	-	4.9	チャートの粗粒を多く含む。灰褐色。被熱赤変。一部海綿状をなす。	
第27図	161	SK25	壺	24.0	2.9	-	-	茶色。口縁内面：4条の扁平な刻目突帯貼付。口縁外面：巾1cmの粘土帯貼付。口唇：面取り。内→外に貫通孔。チャート、頁岩、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。	
第26図	162	SK25	壺	7.9	3.2	-	-	灰褐色。内外面：ナデ。チャートの粗粒を含む。被熱赤変。	
第26図	163	SK25	甕 (底)	-	-	-	7.0	チャート、風化礫の小礫を多く含む。灰褐色。内外面：強い熱を受けている。	
第29図	164	SK17	壺	-	-	-	4.6	チャート、赤色風化礫の粗粒を多く含む。外面：タテハケ。	
第29図	165	SK17	壺	-	-	-	-	橙色。赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。外面：細い双線原体で、沈線をめぐるし、沈線間に扁平な刻目突帯を貼付。内面：ナデ。	
第29図	166	SK17	甕	-	-	-	-	チャートの粗粒砂を多く含む。口唇：面取り。下端：刻み。外面に断面三角の隆帯貼付し、指頭でつまむ。下段：隆帯の下に細い列点文。外面：煤付着。	
第29図	167	SK12	壺	12.0	-	-	-	チャートの粗粒砂を多く含む。灰茶色。外面：タテハケ+ヘラミガキ。煤付着。	
第29図	168	SK17	壺	-	7.0	-	9.2	剥離痕を明瞭に認む。チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。内面：ナデ。外面：被熱赤変。	

弥生土器観察表(7)

図 NO.	挿図 番号	遺構 番号	器種	法量(cm)				特 徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
第29図	169	SK12	壺	22.8	11.0	-	-	黄茶色。口縁外面：巾1.5cmの粘土帯貼付。口唇：凹状。上下刻み。外面：タテハケ。内面：ヨコハケ。チャート、小礫の粗粒砂を多く含む。外面激しく煤付着。一部被熱赤変。	
第29図	170	SK12	壺	-	-	-	-	チャート、緑色岩の粗粒を含む。外面：櫛描波状文。	
第33図	171	SK28	壺	7.8	7.4	-	-	灰茶色。口唇面取り。口縁内・外面：ヨコナデ。頸部外面：ヘラ描沈線と扁平刻目突帯。チャート、他の砂粒を含む。	
第33図	172	SK29	壺	16.6	16.5	-	-	淡茶色。口唇面取り。上下に刻み。頸部外面：ヘラ沈線+扁平。刻目粘土帯貼付。口縁内・外面：ヨコナデ。外面：タテハケ。内面：ヨコハケ。口縁に1対の円孔。チャートの粗粒砂を多く含む。	
第33図	173	SK28	甕	17.0	-	-	-	チャートの粗粒砂、風化礫を含む。口唇：丸味。外面：タテハケ。内面：ヨコハケ。	
第33図	174	SK29	壺	24.0	10.6	-	-	橙色。頸部外面：櫛描直線文+扁平な刻目。口縁内面：扁平な刻目突帯貼付。口唇：凹状をなし、上下に刻目。頸部外面：突帯貼付。チャートの粗粒砂を多く含む。	
第33図	175	SK29	壺	-	-	-	-	チャート、赤色風化礫の粗粒を多く含む。淡茶色。9条のヘラ沈線と沈線間に扁平な刻目突帯を埋めるように4条貼付。	
第33図	176	SK29	甕	-	-	-	-	チャートの粗粒砂を多く含む。頸部外縁に2条の隆帯（上下から粘土を集める。）頸部外面：タテハケ。胴部：ナデ。外面：煤付着。	
第33図	177	SK29	甕	16.6	-	-	-	灰茶色。チャートの粗粒砂を含む。口唇：面をなす。上胴部外面：上下から粘土をつまみよせる。頸部外面：タテハケ。口縁内・外面：ヨコナデ。外面：煤付着。	
第33図	178	SK29	壺	-	-	-	-	チャートの粗粒砂を含む。灰茶色。外面：双線による山形文+4条のヘラ沈+双線山形文。上半位：ハケ。下半位：ヘラミガキ。	
第33図	179	SK28	甕	-	20.2	-	5.6	淡桃色。チャート他の粗粒を多く含む。胴部外面：中位ヨコハケ、下半右下りハケ。内面：指頭圧痕顕著。外面：激しく煤付着。	
第33図	180	SK28	甕	20.0	5.5	-	-	チャート、他の砂粒を含む。灰茶色。口縁内・外面：ヨコナデ。外面：タテハケ。内面：ヨコハケ。外面：煤付着。	
第33図	181	SK29	甕	23.8	-	-	-	橙色。チャートの粗粒砂を含む。口縁：下方につまみ出し拡張。外面：タテハケ。内面：ヨコナデ。内外面：煤付着。	
第33図	182	SK29	甕	-	4.8	-	5.7	チャートの粗粒砂を含む。外面：タテハケ。内面：ナデ。	
第33図	183	SK28	蓋	-	-	-	-	チャートの粗粒砂を多く含む。灰褐色。被熱赤変。煤付着。破損後断面煤付着、被熱。	
第34図	184	SK30	甕	12.6	7.0	-	-	チャートの粗粒砂を多く含む。口唇：面取り。頸部外面：タテハケ。上胴部外面：ナデ。	
第34図	185	SK31	甕	19.2	5.5	-	-	風化小礫を少量含む。灰色。外面：タテハケ。内面：ヨコハケ。口唇：ハケ原体刻。外面：煤付着。	
第34図	186	SK31	壺	-	-	-	-	チャート、長石の粗粒砂を含む。口縁内面：断面三角突帯を貼付、内→外へ2組の小孔を穿つ。外面：ヘラ沈線+扁平粘土帯貼付。タテハケ。内面：ヨコハケ。	
第34図	187	SK31	壺	14.4	10.8	-	-	灰茶色。口唇面取り、上下端に細い刻み。頸部：沈線の中に扁平な刻目突帯を4条埋め込みその間に3本づつヘラ沈線。外面：タテハケ。内面：ヨコハケ+ヨコナデ。1対の小孔を4ヶ所内→外に穿つ。チャートの小礫を多く含む。	
第34図	188	SK31	壺	22.5	4.7	-	-	灰黄色。チャートの砂粒を多く含む。口縁内面：巾1.5cmの粘土帯貼付。口唇：凹状。上下に刻み。口頸部内面：ヨコハケ。口縁外面：ヨコナデ。頸部外面：タテハケ。外面：煤付着。	
第34図	189	SK31	甕	-	-	-	-	チャートの小礫を多く含む。黄茶色。頸部外縁：2条まで微隆起を認む。外面：タテハケ。内面：ヨコハケ。	
第34図	190	SK31	甕	-	-	-	-	チャートの粗粒砂を含む。内面：ヨコハケ。口縁：ヨコナデ。	
第34図	191	SK31	甕	-	-	-	-	チャートの小礫を含む。灰茶色。外面：タテハケ+タテナデ。内面：ナデ。外面：煤付着、一部赤変。	
第34図	192	SK31	壺	-	-	-	-	チャートの粗粒砂を多く含む。灰茶色。5本単位のヘラ沈線を3帯。外面：木目の荒い原体による右下がりハケ調整。内面：ナデ。外面：煤付着。	
第34図	193	SK31	壺	-	18.5	-	-	チャートの粗粒を多く含む。灰茶色。上胴部外面：5本単位のヘラ沈帯、その間に双線による山形文。右下がりハケ。下胴部：ヨコヘラミガキ。内面：ナデ。	
第35図	196	SK33	甕	21.3	3.6	-	-	チャートの粗粒砂を多く含む。茶色。口唇：面取り。外面：タテハケ。外面：煤付着。	
第35図	197	SK35	壺	18.2	7.0	-	-	灰黄色。口唇部面取り、下半刻み。ヘラ沈線8条。口縁部内外面：ヨコナデ。頸部外面：タテハケ。チャート、他の粗粒を多く含む。	

弥生土器観察表(8)

図 NO.	挿図 番号	遺構 番号	器種	法量(cm)				特 徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
第36図	198	SK33	甕	13.0	3.2	-	-	赤色風化礫、チャートの粗粒砂を多く含む。灰茶色。口唇：面取り、下半刻み。外面：タテハケ。内面：ヨコハケ。外面：煤付着。	
第36図	199	SK35	甕	23.0	7.0	-	-	暗灰色。チャートの粗粒を多く含む。口唇：丸味、全面にしっかりとした刻み。胴部外面：5条のヘラ沈。口縁内外：ヨコナデ。胴部外面：タテハケ。外面：煤付着。	
第36図	200	SK35	甕	22.6	2.3	-	-	チャート他の粗粒砂を多く含む。淡茶色。口唇：面取り。端部：つまみ出し。外面：タテハケ。	
第36図	201	SK34	壺	-	7.4	-	9.0	チャート他の粗粒砂を多く含む。外面：煤付着。内外面：ナデ。	
第36図	202	SK33	壺	17.2	10.4	-	-	内面：にぶい黄橙色。外面：にぶい橙色。頸部下端と上胴部に櫛描簾状文。チャート・赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。	
第36図	203	SD3	甕	22.0	4.5	-	-	チャート他の粗粒砂を多く含む。口唇：丸味。全面：刻み。上胴部：4条までのヘラ沈線。	
第36図	204	SD3	壺	-	-	-	-	チャート他の粗粒を含む。頸部外面：4条の扁平刻目突帯をヘラ沈線に埋め込むように貼付。その間に櫛描直線文。外面：ハケ。内面：ナデ。桃色。	
第36図	205	SD3	甕	11.5	-	-	-	チャート他の粗粒を多く含む。口唇：丸味。口頸部内面：ヨコナデ。同外面：タテハケ。外面：煤付着。	
第36図	206	SD3	壺	-	-	-	-	橙色。チャートの粗粒を多く含む。扁平な刻目突帯を4条貼付。突帯間にヘラ沈線。	
第36図	207	SD3	甕	-	-	-	-	チャートの細粒砂を多く含む。頸胴部界：3条の刻目突帯。頸部内外面：丁寧なヨコナデ。胴部外面：荒いナデ。外面：全面煤付着。	
第36図	208	SD3	壺	-	-	-	-	チャートの細粒砂を多く含む。茶色。上から櫛描直線文+同波状文。同直線分+櫛描弧文。外面：ハケ。内面：ナデ。	
第36図	209	SD3	甕	17.0	-	-	-	チャート、他の粗粒を多く含む。口縁外面：巾1cmの粘土帯貼付+刻み。上胴部：3条の微隆起帯を貼付、指頭でつまむ。頸部外面：丁寧なタテナデ。胴部外面：荒いヨコナデ。胴部内外面：煤付着。	
第36図	210	SD3	甕	18.9	4.3	-	-	チャートの細粒砂を多く含む。口唇：丸味。上胴部外面：4条までの沈線を読む。口縁外面：指頭圧痕顕著。外面：タテハケ、煤付着。	
第36図	211	SD3	甕	-	5.5	-	5.3	灰茶色。チャートの粗粒砂を多く含む。外面：下→上のケズリ+タテハケ。内面：指ナデ。外面：黒色塗布。	
第36図	212	SD3	甕	-	3.5	-	6.7	チャートの粗粒砂を多く含む。灰色。内外面：ナデ。外面：煤付着。	
第36図	213	SD3	甕	-	7.8	-	10.9	チャート、結晶変岩の粗粒を多く含む。内外面：ナデ。外面：煤付着。内面に炭化物付着。	
第36図	214	SD3	甕	-	6.5	-	9.7	チャート、赤色風化礫を多く含む。桃色。外面：タテハケ。内面：ナデ。外面：黒色物塗布。	
第36図	215	SD3	甕	-	5.8	-	4.0	黄茶色。外面：タテヘラミガキ、一部煤付着。内面：ナデ。	
第30図	217	SK14	壺	10.0	3.6	-	-	口唇：丸味。チャート、頁岩の粗粒砂を含む。強い熱を受けている。	
第30図	218	SK14	壺	11.9	-	-	-	灰黄色。口縁：端を上方につまみあげてヨコナデ。内外面：ナデ。チャートの粗粒砂を多く含む。破損後被熱。	
第30図	219	SK14	壺	-	5.5	-	-	灰黄色。チャート、他の粗粒砂を多く含む。外面：櫛描直線文+断面三角突帯+櫛描直線文+双線による山形文。内面：指頭圧痕顕著。	
第30図	220	SK14	壺	24.8	13.3	-	-	にぶい黄橙色。口縁内面：山形文。頸部界：列点文。口縁外面：断面三角の粘土帯を貼付。口唇：強いヨコナデ。口唇上下：刻み。頸部外面：タテハケ。頸部内面：ヨコハケ。チャートの粗粒、赤色風化礫の小礫を多く含む。	
第30図	221	SK14	壺	24.0	-	-	-	淡黄色。チャート他の粗粒砂を多く含む。巾1.5cmの粘土帯を貼付+指頭圧痕。頸部外面：タテハケ、同内面：ヨコハケ。被熱赤変。	
第30図	222	SK14	壺	-	-	-	-	チャートの粗粒を多く含む。櫛描簾状文と同波状文を配す。	
第30図	223	SK14	壺	-	6.7	-	-	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。双状原体による波状文。外面：タテハケ。内面：ヨコハケ。	
第30図	224	SK14	壺	18.0	19.0	-	-	にぶい橙色。上胴部外面：櫛描波状文。口縁外面：巾2cmの粘土帯貼付。口唇：刻目。チャートの粗粒を多く含む。	
第30図	225	SK14	壺	-	19.6	25.0	-	チャート他の粗粒砂を多く含む。灰黄色。扁平な刻目突帯を3条ヘラ沈線に埋め込むように貼付。突帯間に上から櫛原体による刺突風簾状文+同直線文+同簾状文。外面：ハケ。内面：指ナデ。	
第31図	226	SK14	壺	-	5.8	-	-	灰黄色。チャート他の粗粒砂を多く含む。外面：櫛描波状文を4帯施す。タテハケ。内面：指圧痕有り。	

弥生土器観察表(9)

図 NO.	挿図 番号	遺構 番号	器種	法量(cm)				特 徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
第31図	227	SK14	壺	-	-	-	-	黄白色。チャートの風化礫を多く含む。断面三角突帯を2条貼付。その間に櫛描による山形、格子目文を施す。	
第31図	228	SK14	甕	10.8	-	-	-	チャートの粗粒を多く含む。口縁外面：横位の微隆起1条。頸部外面：縦位の微隆起帯。	
第31図	229	SK14	甕	26.0	-	-	-	巾2.5cmの粘土帯剥離。チャートの粗粒砂を多く含む。灰褐色。口唇：面取り。外面：タテハケ。内面：ヨコハケ。	
第31図	230	SK14	甕	17.5	-	-	-	チャートの細粒砂を含む。口唇下端：刻み。外面：微隆起帯1条。2次的に高熱を受けている。	
第31図	231	SK14	甕	-	-	-	-	チャートの粗粒砂を多く含む。内面：ナデ。外面：ハケ。煤付着。	
第31図	232	SK14	壺	-	-	-	-	口縁内面：櫛描による弧文。櫛描籐状文。頸部外面：櫛描籐状文をはさんで上下に上弦。口唇：凹状、上下刻み。全体に被熱赤変。外面：ハケ。	
第31図	233	SK14	壺	15.9	24.5	-	-	口縁外面：巾2cmの粘土帯貼付。口唇：面取り。上胴部：櫛描波状文。頸胴部界にわずかに段が生ず。口縁内外：ヨコナデ。頸部外面：タテハケ+ヨコナデ。胴部外面：ハケ。部分的にヘラミガキ。外面：煤付着。チャート、長石の粗粒を多く含む。	
第31図	234	SK14	壺	-	8.7	-	9.5	チャートの粗粒砂を多く含む。灰白色。外面：タテハケ。	
第31図	235	SK14	壺	-	8.6	-	10.9	チャートの粗粒砂を多く含む。灰茶色。被熱赤変。	
第32図	236	SK14	壺	23.2	-	-	-	黄白色。上胴部：上から櫛描籐状文+同波状文+同籐状文+波状文+同籐状文。断面三角突帯+櫛原体による山形文+断面三角突帯。口縁内面：ハケ原体で列点文+3条のヘラ沈線。口唇：凹状で上下刻み。口縁外面：巾2cmの粘土帯。頸部外面：タテハケ。頸部内面：ヨコハケ。チャート、頁岩の粗粒を多く含む。	
第32図	237	SK14	鉢	-	-	-	-	精選された胎土。灰茶色。内面：全面に赤色顔料付着。外面：炭化物付着、煤付着。外面：タテハケ。内面：タテハケ、ヨコハケ。	
第32図	238	SK14	鉢	9.8	-	-	-	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。外面：ハケ。内面：ナデ。激しく被熱。	
第32図	239	SK14	甕	-	2.4	-	6.0	灰色。チャート他の細粒を含む。	
第32図	240	SK14	壺	-	9.0	-	10.1	灰黄色。チャートの粗粒を多く含む。	
第37図	242	SX3	壺	8.0	6.5	-	-	黒褐色。口唇：面取り。内→外に3個1組の小孔を4箇所につ。外面：ヘラ沈線+扁平な刻目突帯。口縁内外：ヨコナデ。頸部外面：タテハケ。チャートの粗粒砂を含む。	
第37図	243	SX3	壺	-	-	-	-	黒色。外面：鋸歯状に赤彩文。	
第37図	244	SX3	壺	18.0	3.0	-	-	暗灰色。口縁内面：扁平刻目突帯。内→外へ貫通小孔あり。口唇：凹状、上下刻み。外面に巾2cmの粘土帯貼付。指頭圧痕。内外：ヨコハケ。外面：タテハケ。チャートの粗粒を多く含む。	
第37図	245	SX3	甕	21.0	7.8	-	-	チャート、他の粗粒砂を含む。淡茶色。口縁内面：ヨコナデ。口唇：刻み。外面：タテハケ+ヘラミガキ。内面：ナデ。外面：煤付着。	
第37図	246	SX3	甕	21.0	10.0	-	-	チャートの粗粒砂を含む。口唇：刻み。外面：8条のヘラ沈線+列点文。口縁内外面：ヨコナデ。胴部外面：タテハケ。内面：黒色塗布(うるし?)。	
第37図	247	SX3	甕	-	-	-	-	チャート、他の砂粒を含む。頸部外面：全面浮文。上胴部：3条の隆帯、その下に浮文列を配す。頸部外面：丁寧なヨコナデ。胴部外面：荒いナデ。外面：全面煤付着。	
第37図	248	SX3	甕	19.1	-	-	-	チャートの砂粒を含む。口縁：上下を指頭でつまみ出す。頸胴部界：上下から粘土をつまみ出して、2条の微隆起帯をつくる。口頸部外面：タテハケ。同内面：ヨコハケ。胴部外面：荒いナデ。同内面：ナデ。外面：全面激しく煤付着。	
第37図	249	SX3	甕	25.3	8.5	-	-	淡茶色。チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。口唇：丸味を帯び刻目を施す。上胴部：9条のヘラ沈と列点文。口縁外面：ヨコナデ。胴部外面：タテハケ。胴部内面：ヨコヘラミガキ。外面：煤付着。	
第37図	250	SX3	壺	-	3.7	3.9	-	チャートの粗粒を多く含む。灰黒色。外面：タテハケ。内面：ナデ。	
第37図	251	SX3	壺	6.3	-	-	5.4	黄灰色。赤色風化礫の粗粒を含む。内面：ナデ。	
第38図	252	南区 包含層	壺	13.8	3.2	-	-	チャートの粗粒砂を含む。暗茶色。外面：タテハケ。口縁外面：巾0.5cmの粘土帯貼付。	

弥生土器観察表(10)

図 NO.	挿図 番号	遺構 番号	器種	法量(cm)				特 徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
第38図	253	南区 包含層	壺	18.8	4.3	-	-	橙色。櫛描直線文。口縁：外方につまみ出し、ヨコナデ。口唇：両端に刻目。扁平な刻目突帯を貼付。赤色風化礫の小礫を多く含む。	
第38図	254	南区 包含層	壺	-	-	-	-	灰茶色。チャートの粗粒砂を含む。櫛描直線文+同波状文+刺突文+櫛描直線文。外面：右下りハケ。内面：ナデ。	
第38図	255	南区 包含層	壺	-	-	-	-	灰茶色。チャートの粗粒砂を多く含む。上胴部と中位にヘラ沈線1条。沈線下に刺突文。外面：ナデ。内面：指頭圧痕顕著。	
第38図	256	南区 包含層	壺	-	-	-	-	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。灰色。櫛描直線とヘラ描沈線を交互に施し、ヘラ沈線の上に列点文を重ねる。下端に櫛描波状文を施す。	
第38図	257	P134	蓋	20.0	1.4	-	-	チャートの粗粒、石英細粒砂を含む。口縁内面：ヘラミガキ。外面：タテハケ。口縁内面：激しく煤付着。	
第38図	258	P107	甕	21.1	-	-	-	チャート、他の細粒を含む。暗茶色。口縁外面：断面台形状の刻目突帯を貼付。頸部内外面：ヨコナデ。	
第38図	259	P135	甕	12.0	7.2	14.1	-	チャートの粗粒砂を多く含む。口唇：刻み。上胴部外面：5条のヘラ沈。外面：タテハケ。内面：ナデ。	
第38図	260	南区 包含層	甕	-	-	-	-	チャート、風化礫の粗粒砂を含む。頸胴界：3本の隆帯、隆帯の上下をつまむ。上外に爪圧痕あり。頸部内面：ヘラミガキ。	
第38図	261	南区 包含層	壺	-	6.2	-	18.0	チャートの粗粒を含む。黄灰色。内外面：丁寧なヘラミガキ。	
第38図	262	南区 包含層	壺	-	4.7	-	15.8	チャートの細粗粒を含む。灰褐色。二次的に被熱赤変。	
第39図	263	南区 包含層	甕	10.5	4.8	-	-	チャート、風化礫、他の粗粒砂を多く含む。茶色。口唇内外：面取り。	
第39図	264	南区 包含層	壺	15.3	9.3	-	-	黄褐色。口縁内面：巾2cmの粘土帯貼付。頸部外面：タテハケ、同部内面：ヨコハケ。	
第39図	265	南区 包含層	壺	22.0	9.3	-	-	桃色。上胴部：列点文。口縁外面：巾2cmの粘土帯貼付+指頭圧痕。口唇：上下刻み。外面：タテハケ。内面：ヨコハケ。赤色風化礫、チャートの粗粒を含む。	
第39図	266	南区 Sトレ	壺	20.5	-	-	-	内面：浅黄色。外面：にぶい黄橙色。突帯にヘラ沈。口唇：面取り。下端刻み。頸部外面：扁平な刻目突帯を3条貼付。口縁外面：ヨコナデ。内面：ヨコハケ+ヨコヘラミガキ。頸部外面：タテハケ。外面：黒色物塗布。	
第39図	267	南区 包含層	壺	23.2	5.4	-	-	内面：にぶい黄橙色。外面：灰黄褐色。口縁内面に径4mmの円孔を内→外へ突つ。頸部外面：ヘラ描沈線と扁平な刻目突帯。沈線帯に赤色。口唇：刻み。外面：タテハケ。内面：ヨコハケ+ナデ。チャートの粗粒砂を多く含む。	
第39図	268	南区 包含層	甕	-	-	-	-	チャートの粗粒砂を含む。茶色。頸胴部界：3条の刻目突帯を貼付。頸部外面：タテハケ。胴部外面：ヨコハケ。	
第39図	269	南区 包含層	甕	-	-	-	-	赤色風化礫、チャートの粗粒砂を多く含む。頸胴部界：隆帯3条と浮文を貼付。頸部外面：丁寧なヨコナデ。胴部：荒いナデ。外面：煤付着。	
第39図	270	南区 包含層	甕	-	10.0	-	-	上胴部に3条の刻目突帯。頸部内外面：ナデ。胴部外面：擦痕。同内面：ナデ。	
第39図	271	南区 包含層	甕	-	9.1	22.8	-	灰褐色。粗粒砂を含む。頸胴部界：3条の微隆起帯貼付。頸部外面：丁寧なヨコナデ。胴部外面：下→上の擦痕+ナデ。	
第39図	272	南区 包含層	壺	-	-	-	-	チャート、頁岩の砂粒を多く含む。黄茶色。頸部と上胴部：櫛描波状文。その下に櫛描簾状文帯+同波状文。頸部外面：タテハケ。胴部外面：ヨコハケ。内面：指ナデ。	
第39図	273	南区 包含層	壺	17.4	10.0	-	-	頸・胴部外面に波状文。口唇：面取り。頸胴部界：2条のヘラ沈と扁平な刻目突帯。チャート・赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。	
第39図	274	南区 包含層	甕	26.7	8.7	-	-	赤色風化礫を多く含む。淡桃色。口唇：刻み。外面：8条のヘラ沈。口縁内外面：ヨコナデ。胴部内外面：タテハケ。	
第39図	275	南区 包含層	壺	-	-	-	-	桃色。口縁内外面：ヨコナデ。胴部外面：ナデ。口頸部内面：ヨコヘラミガキ。チャートの粗粒砂を多く含む。	
第40図	276	南区 包含層	甕	20.0	14.8	-	-	黄茶色。赤色風化礫、チャート、長石の粗粒を含む。口縁外面：巾2cmの粘土帯貼付+指頭圧痕。外面：タテハケ。	
第40図	277	南区 包含層	甕	-	6.9	-	23.5	橙色。チャート、赤色風化礫を多く含む。口縁外面：巾2cmの粘土帯貼付+指頭圧痕。口唇：面取り。内外面：ヘラミガキ。	
第40図	278	南区 包含層	壺	-	5.0	-	8.0	チャートの小礫、粗粒を多く含む。暗灰褐色。黒斑有り。	
第40図	279	南区 包含層	甕	-	6.0	-	-	チャートの粗粒砂を含む。ヘラ沈線を6本まで確認。外面：タテハケ。内面：ナデ。外面：激しく煤付着。	
第40図	280	南区 包含層	壺	-	-	-	-	チャートの粗細粒砂を含む。外面：ヘラミガキ。内面：ナデ。	

弥生土器観察表(11)

図 NO.	挿図 番号	遺構 番号	器種	法量(cm)				特 徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
第40図	281	南区 包含層	壺	-	-	-	-	灰茶色。砂粒をほとんど含まず。	
第40図	282	南区 包含層	壺	-	-	-	-	長石、チャートの粗粒砂を多く含む。灰茶色。外面：ヘラミガキ。 内面：ナデ。	
第40図	283	南区 包含層	鉢	28.4	17.1	8.6	-	チャート、他の粗粒を含む。口唇：面取り。内外面：ヨコミガキ。 下地に擦痕あり。	
第40図	284	南区 包含層	壺	-	-	-	-	チャート、赤色風化礫の粗粒砂、小礫を含む。茶色。上胴部：8 ～9状のヘラ沈線。沈線間に刺突列点文を3帯。	
第40図	285	南区 包含層	壺	-	-	-	-	チャート、赤色風化礫の粗粒を含む。上胴部：6～7状のヘラ沈線。 外面右下がりハケ、内面：ナデ。	
第41図	286	南区 包含層	大壺	-	19.5	-	-	チャート他の粗粒砂を多く含む。内面：黒色。外面：茶色。外面： 右下がりハケ+ヘラミガキ。内面：ナデ。	
第41図	287	南区 包含層	甕	12.5	-	-	-	乳白色。赤色風化礫の細、粗粒を多く含む。口唇：面取り、刻目。 頸胴部界に櫛描直線文。外面：タテハケ。内面：ナデ。	
第41図	288	南区 包含層	鉢	6.7	5.5	-	-	黄白色。チャートの細粒砂を多く含む。口唇：面取り。内外面： 刻目。外面：横位沈線+縦沈線。	
第41図	289	南区 包含層	大壺	22.4	5.6	-	-	口唇：面取り。内外面：ヨコハケ+ヨコナデ。外面：タテハケ。 チャートの小礫を多く含む。	

表2 石器観察表

図 NO.	挿図 番号	遺構 番号	器種	法量(cm)			重量	石 材	特 徴	備考
				全長	全幅	全厚				
第10図	35	SX1	叩石	11.35	7.85	1.6	188 g	砂岩		
第10図	36	SX1	叩石	7.47	5.28	1.33	54.9 g	砂岩		
第10図	37	SX1	叩石	5.68	6.50	3.36	200 g	砂岩		
第16図	115	北区 包含層	石包丁	10.40	4.1	0.65	47.0 g	頁岩	直線刃片刃(わずかに内湾)、 両側から穿孔、穿孔位置が片 寄る。	
第16図	116	北区 包含層	石包丁	10.22	3.83	0.66	39.9 g	頁岩	背部欠損、直線刃片刃、両側 から穿孔、器面全面に研磨痕 あり。	
第16図	117	北区 包含層	石斧	5.19	2.90	0.89	20.3 g	白色泥岩質	扁平片刃石斧、何度も研ぎ直 している。	
第16図	118	北区 包含層	叩石	9.57	8.95	2.94	361 g	砂岩	両主面中央に使用痕。	
第21図	130	SK19	石包丁	9.70	3.80	0.60	36.6 g	頁岩		
第22図	134	SD2	石包丁	10.00	3.70	0.60	33.9 g	頁岩		
第22図	135	SD2	石包丁	10.50	4.20	0.70	50.9 g	頁岩		
第22図	136	SD2	石包丁	10.00	4.50	0.60	47.6 g	頁岩		
第34図	194	SK31	石鏃	2.05	1.30	0.22	0.52 g	サヌカイト		
第34図	195	SK31	石鏃	2.30	2.35	0.35	1.49 g	サヌカイト		
第36図	216	SD3	石鏃	2.70	1.30	0.50	1.35 g	サヌカイト		
第32図	241	SK14	石包丁	5.50	5.70	0.80	33.6 g	頁岩		
第41図	290	南区 包含層	石鏃	2.30	1.40	0.40	0.95 g	サヌカイト		
第41図	291	南区 東斜面	石鏃	2.90	1.80	0.50	2.33 g	サヌカイト		
第41図	292	南区 東斜面	石包丁	5.30	5.50	7.00	19.8 g	頁岩		

表3 木製品観察表

図 NO.	挿図 番号	遺構 番号	器種	法量 (cm)			特 徴	備考
				全長	全幅	全厚		
第42図	293	SX3	板材	12.9	5.0	1.5		
第42図	294	SX3	板材	13.6	3.2	0.9		
第42図	295	東斜面	板材	10.6	3.9	1.0		
第42図	296	SX3	板材	82.8	9.5	3.1		
第42図	297	SK31	鋤	13.1	7.9	1.8	鋤身の一部、内外焼けている。	
第42図	298	SD2	柄	19.9	7.0	3.0	楕円形の円孔、表3×3.5cm、裏5.9×4.1cm。前主面孔下に6つの刻目がある。	
第42図	299	SX3		9.2	5.4	2.9		
第42図	300	東斜面		13.0	5.4	2.9		
第42図	301		鋏	34.0	10.0	1.5	狭鋏、カシ、柄壺は紡錘形17cm、最大巾5cm、高さ1.6cm、3.4×1.5cmの隅丸方形の穴。	
第43図	302	SX3		49.4	5.7	1.6	矢板状	
第43図	303	東斜面		45.5	7.8	1.8	板状	
第43図	304	東斜面		47.5	5.2	2.2	矢板状	
第43図	305	SD3		35.0	7.1	7.2	丸太材	
第43図	306	東斜面	クイ	54.6	6.5	3.8		
第43図	307	SK13	柱材	34.0	12.5	7.5		
第43図	308	東斜面		43.6	7.6	3.6		
第44図	309	東斜面		22.5	3.2	2.3		
第44図	310	SK34		17.0	6.5	4.2	丸太材の半截材の一端を両側からハツリ尖らす。	
第44図	311	東斜面		23.0	5.2	5.0		
第44図	312	SX3		29.1	4.0	3.1	杉板	
第44図	313	SD3	柱材	34.5	0.7	3.5	丸太の半截材、両端に切断の痕あり。一方は尖る。	
第44図	314	P141		29.5	13.0	5.8	柱、半截材	
第44図	315	東斜面		22.0	11.3	2.2	杉、板材。	
第44図	316	P89		24.2	11.2	11.0		
第44図	317	SK31	腕輪	63.8	2.7	2.3	漆塗り	
第44図	318	P23		30.7	27.6	8.5		
第44図	319	P35		30.7	33.5	7.0		
第44図	320	SX3		73.5	10.0	2.8	ハツリ痕跡がところどころに見られる。5×4cm、6×4cm大の楕円形の孔が両面から穿たれている。	

第V章 考察

下分遠崎遺跡4次調査出土の弥生土器

はじめに

下分遠崎遺跡第4次調査は、過去3回の調査成果の上に、いくつかの新しい知見をもたらした。

1つ目は、遺跡の範囲に関する新知見であり、これに関しては、「VI章 まとめ」の項でも詳細に触れている。当遺跡がこれまで考えられていたよりも北側に広がりを持っていたこと、今回の調査区から北は急激に傾斜して旧河川に接していたことが明らかになった。調査区周辺は香宗川と山北川に挟まれた複雑な地形だったと考えられる。従来は南側に当遺跡の中心があると考えられてきた。確かに1・2次調査対象地である南側水田部分に遺物は最も集中しているが、今回の調査地点周辺の方が遺構密度は高くなっている。今後、北側部分にも居住域が広がっていることに留意しながら、遺跡の保存及び開発に際しての事前調査等、対応を進めていかなければならない。

2つ目は、これまでの調査も含めた炭化米のDNA分析により熱帯ジャポニカの存在が明らかになったこと、そして、1～3次調査同様に確認された木製品をはじめとする自然遺物に関する新資料が加わったことである。

そして最後に土器に関する新知見が挙げられる。出土した弥生土器の所属時期は、過去の調査と同じである。弥生土器に関しては1次調査以降、調査を担当した出原恵三氏によって詳細な分析・検討が加えられた。その結果、「土佐型甕」の概念が提唱され、前期末から中期前半にかけての地域性が顕在化する時期の実態が当遺跡と田村遺跡群との土器様相の比較を通じて明らかにされたのである⁽¹⁾。それでもなお、中期前半から中葉にかけての良好な一括資料は、県内を見渡しても、ほとんどない状況である。南四国中央部の弥生時代の拠点集落である田村遺跡群においても、その前後を含めた中期前半のⅡ様式並行期が検出遺構の極めて少ない空白の時期となっている⁽²⁾。これまで確認されることの少なかった中期前半の櫛描簾状文登場以後のⅡ様式新段階（中期Ⅰ-2）からⅢ様式古段階（中期Ⅱ-1）にかけての一括性の高い遺構出土資料が、今次調査では確認されている。

ここでは、1999年の調査直後の整理作業時点で出原恵三氏によってなされた分類作業のメモをもとに、今回確認された土器の様相をまとめて提示したい。また、下分遠崎遺跡の4回の調査を通じて、出原氏が「海綿状になった」と表現し、高温で被熱したのではないかと問題意識を持つ土器片が存在する。通常よりも高温で被熱したことが予想される器表面が海綿状になったり、変形したりする土器片は今次調査でも出土した。これらの土器片についての分析結果を報告し、併せて、1～3次調査時に報告された土器製作に関わる粘土・シャーモットを含む遺構に関する記述も再録しておきたい。

1. 土器の分類と所属時期

今回の調査では、弥生時代前期末（Ⅰ-5）・中期初頭（Ⅱ-1）・中期前葉（Ⅱ-2）・中期中葉（Ⅲ-1）の各時期の遺物が出土している。遺構出土資料を検討すると、連続する時期の特徴を持つ土器が重なる形で出土しており、特に前期末と中期初頭、中期前葉と中期中葉の資料が一緒に出土している例が多い。中期前葉～中葉の遺構については中期前半としてまとめ、その中で新しい様相が認められるかどうかの検討を行っていききたい。

1) 遺構の所属時期

北区では遺構検出面は1面であり、同一面から3時期の遺構が確認されている。南区では20～30cmの標高差で3面の遺構面が確認されており、上面・中面・下面の遺構が各面ごとに調査されている。これらの遺構面の違いがそのまま前期末→中期初頭→中期前半という時期差に直結するわけではない。下面検出の遺構が、新しい時期（中期前半）の一括性を持つ遺構であるケースもある。地形の起伏や、調査区外へ向かって傾斜している地形上の特徴などの理由により、例外的に同一面で異なる時期の遺構が検出されたのだと考えている。基本的には、前期末に属する遺構は下面で確認されるものに限られており、上面・中面の遺構は中期前半のものである。（下面検出遺構の中で、斜面落ち際付近で確認されたものなど、より新しい様相の土器を含んでいる例はある。）

南区の検出面ごとの遺構は以下の通りである。

上面で検出された遺構	SK8・10・18・19・20 SX2 SD2
中面で検出された遺構	SK15・22・23・25～27 SD4
下面で検出された遺構	SK12～14・17・28～37 SX3 SD3 P107・134・135

遺構の所属時期の判定には、図版に掲載していない文様の確認可能な土器片も使用した。時期特定には、以下の①～④の指標を用いた。なお、Ⅰ-5～Ⅲ-1の区分については、「5土佐地域〈出原恵三〉」『弥生土器の様式と編年 四国編』（木耳社2000年）に依拠している。

- ①前期末（Ⅰ-5） 畿内第Ⅰ様式新段階併行
ヘラ描沈線のみで構成されるもの。沈線が多条化する段階。
- ②中期初頭（Ⅱ-1） 畿内第Ⅱ様式古段階併行
ヘラ描沈線と櫛描沈線が混在、あるいは櫛描のみ（前期末と同器形）。
- ③中期前葉（Ⅱ-2） 畿内第Ⅱ様式新段階併行
初期の特徴を有する櫛描簾状文の存在。口唇部が強い凹状を呈する特徴を持つ個体が多い。
- ④中期中葉（Ⅲ-1） 畿内第Ⅲ様式古段階併行
新しい様相（浅くより繊細な）の櫛描沈線による加飾がある。口唇凹状のものは少ない。

以上の基準に照らし合わせて、遺構の所属時期を確認すると、前期末に属するものが、SK1・3 SX1（以上北区） SK12・21・28・30・31・32 SX3 SD3（以上南区）であり、中期初頭がSK2・4（北区）SK19・29（南区）、中期前半が、SK5・6（北区）SK14・15・25・33 SX2 SD2（南区）と

なる。

2) 形態分類の基準

今次調査で出土した前期末から中期中葉にかけての弥生土器の器種は壺・甕・鉢・蓋であり、高坏は出土していない。ここでは壺と甕についての分類を行う。

①分類

北区のSK2・4～6、包含層（Ⅷ層上・中、西斜面、砂層）、南区のSK12～16・19・21・29～35、SD2～3、SX2・3、包含層出土土器を対象として行う。

A. 壺

広口壺と直口壺・長頸壺に分類、広口壺については頸部形状の違いにより大きく3類に分ける。口縁部への粘土帯の貼付の有無をもとに、さらにA～Cに細分する。

I類：広口壺の中で、比較的頸部が短いもの

II類：広口壺の中で、I類とII類の中間の形態を持つ

III類：広口壺の中で、比較的頸部が長いもの

IV類：直口壺

V類：長頸壺

A：口縁部内外面に粘土帯を貼付しない

B：口縁部外面に粘土帯を貼付する

C：口縁部内面に粘土帯を貼付する

B. 甕

甕については、胎土・器壁の厚さを基準に、標準的な厚さのものをI類、器壁の薄いものをII類と2つに分類、I類については形態上の特徴をもとにA～Fの6つに細分する。

I類：茶褐色や橙色傾向に発色する一般的な胎土で、器壁の厚さも一般的なもの

II類：黒褐色や暗褐色、黒灰色などの発色を示し、器壁が他の土器に較べ薄いもの

I類の細分基準

A：遠賀川式土器の系譜をたどれるもの

B：南四国型甕

C：口縁が内湾して立ち上がるもの

D：直線的に立ち上がるもの

E：逆L字口縁を持つもの

F：口縁がくの字状に外反するもの

②考察

前期土器と中期土器を分けずに、両方の時期をあわせて形態による違いに着目し分類した。壺においては、主体となる器形である広口壺を中心に据え、広口壺の長頸化を基準とし、頸が「短い」

→「中間」→「長い」という単純化した分類により、長頸化と口縁部粘土帯の貼付に絞って、時期差による傾向を明らかにしようとするものである。広口壺は大半が中間形態としたⅡ類に集約される。図版に掲載した広口壺の中で、Ⅰ類は58・66・114・132・142・202・224・233・275・289であり、Ⅲ類は3・11・125・221・264、それ以外は全てⅡ類である。Ⅳ類（直口壺）は18・28、Ⅴ類（長頸壺）は131のみである。図示していない土器も含め分類可能な壺形土器の中で広口壺が96%を占め、Ⅳ類2点、Ⅴ類2点、合わせても全体の4%に過ぎない。今回の壺形土器はⅠ～Ⅲ類に分けた広口壺とⅣ類とした直口壺、Ⅴ類とした長頸壺で全てである。

口縁部内外面の粘土帯の貼付の有無を基準にすれば、内面に粘土帯を貼付するものは鋤先状口縁を持つ壺（188）1点のみであり、南四国の弥生中期の大きな特徴である口縁部外面粘土帯貼付（貼付口縁）は前期Ⅰ-5の段階から確実に存在している（全体に占める割合は38%）ことがわかる。櫛描文の登場する中期初頭には、貼付口縁は21%と前期末と大差ないが、櫛描簾状文出現以後のⅡ-2期以降（Ⅱ-2からⅢ-1にかけて）は全体の82%と壺の大半の個体に貼付口縁が認められるようになる。

甕については、1・2次調査のⅠ群・Ⅱ群が今時調査のⅠ類・Ⅱ類に対応する。Ⅱ類土器は「薄手式土器」として認識されてきた土器⁽³⁾で、南四国西半（仁淀川以西）からの搬入土器である。甕形土器に占めるⅡ類甕の割合は、遺構出土土器の中では15%であり、包含層出土遺物では南区で16%、北区では1%未満となっている。北区では遺構からもⅡ類甕は出土しておらず、地点による違いが読み取れる。分類可能な個体により割合を示したが、全体ではⅡ類の占める割合は数%程度だと考えられる。

他地域から搬入された甕形土器として、Ⅱ類以外にⅠF類（129・153）の存在が明らかになった。口縁がくの字状に強く屈曲し、上胴部に列点文をめぐらせる土器である。このF類は胎土及び器形の特徴から高松平野周辺で生産された土器であることがわかった。2点とも頸部で強く屈曲し、内面にはしっかりとした稜をなす。Ⅱ様式新段階～Ⅲ様式古段階に併行する資料である。

甕形土器の中心となる南四国型甕（B類）以外に、遠賀川式土器（A）・瀬戸内型甕（E）が存在するが、遠賀川式土器・瀬戸内型甕は前期末に限定され、中期初頭を除き中期以降には認められなくなる。A類（遠賀川式土器）は前期遺構出土土器の中に占める割合が31%であり、E類（瀬戸内型甕）は2%足らずと僅少である。1・2次調査でA類が43%、E類が11%出土していたのと比較すると少なく、3次調査のA類22%、E類10%と比較してもE類の少なさが特徴的である。

また、B類が占める割合は前期末の段階で63%、中期に限ると70%を超える。1・2次調査では包含層出土資料をもとに中期土器の分析をした結果、B類が99%を占め、「中期前半には土佐型甕に統一される」という考えが示されている⁽⁴⁾。今回もA・E類は中期に入るとなくなり、南四国型甕が中心となる。B類の割合が70%ほどになったのは、搬入品（F類）の存在と、149・151のような微隆起帯をもつ甕Ⅱ類が、Ⅱ様式新段階以降の資料と共伴したことによる。甕Ⅱ類は遺跡外から持ち込まれた搬入品だが「南四国型甕」であり、讃岐からの搬入土器（F類）をのぞけば、南四国型甕はほぼ100%になり、「中期前半に甕形土器が南四国形甕に統一される」状況は遺構出土資料からも確認できたといえる。C類とD類は例外的な存在であり、図版掲載遺物はなく、遺構からの出土例もない。

表4. 遺構の時期と出土遺物の様相

遺構名	時期	I	調査区・検出面	簾状文	壺								甕							鉢		蓋		
					IA	IB	IIA	IIB	IIC	IIIA	IIIB	IIIV	VB	IA	IB	IC	ID	IE	IF	II	A		B	
SK1	前期末	I-5	北区				1																	
SK3	前期末	I-5	北区																					
SK12	前期末	I-5	南区(下面)					2								1								
SK13	前期末	I-5	南区(下面)			1																		
SK30	前期末	I-5	南区(下面)												1	2								
SK31	前期末	I-5	南区(下面)				4	1	1							5						1	1	
SK32	前期末	I-5	南区(下面)													2								
SK34	前期末	I-5	南区(下面)				1	1							2	1								
SK35	前期末	I-5	南区(下面)				1								2	1								
SD3	前末~中初	I-5・II-1	△ 南区(下面)				2	1							2	13						2		※1
SX3	前末~中初	I-5・II-1	○ 南区(下面)			2	3	1	1	1					10	9			1					※2
SK2	中期初頭	II-1	北区				1									3								
SK4	中期初頭	II-1	北区				2	1							1	6								
SK5	中期初頭	II-1	北区			1			1															
SK29	中期初頭	II-1	南区(下面)				5									4								
SK25	中期初頭	II-1	南区(中面)																					
SK19	中期前半	II-2	○ 南区(上面)				1				1								1	2				
SK14	中期前半	II-2	○ 南区(下面)			1	1	4	25			1				1					1	2		※3
SK33	中期前半	II-2	○ 南区(下面)					1								3								
SD2	中期前半	II-2	○ 南区(上面)			1	1	7					1		1									
SK6	中期前半	II-2・III-1	○ 北区			1		2	28			1	1			1						1		
SX2	中期前半	II-2・III-1	○ 南区(上面)									1	1									2	1	
SK15	中期前半	II-2・III-1	○ 南区(中面)			1			22							3					1	4	1	※4

遺構出土土器	合計			6	7	32	84	2	1	2	2	2	18	56	0	0	1	2	9	7	1	3
--------	----	--	--	---	---	----	----	---	---	---	---	---	----	----	---	---	---	---	---	---	---	---

5% 5% 24% 63% 2% 1% 2% 2% 2% 29% 90% 0% 0% 2% 3% 15%

壺	A	B	C
43	96	2	
31%	72%	2%	

壺	A	B	C
前期 I-5	7	5	1
中期 II-1	11	3	0
中期 II-2・III-1	18	83	0

A	B	C
54%	38%	8%
79%	21%	0%
18%	82%	0%

※SD3とSX3については、大半が前期の遺物であるものの、簾状文が確認されるなど前期と中期の様相が混在しているため、遺構合計からのぞいてある。

- ※1 同じ個体にヘラと簾状文(櫛)
- ※2 ヘラ描沈線が大半・櫛少量で簾状文混在?
- ※3 SK14とSD2の資料接合
- ※4 古相の資料もあり、混在の可能性もある。

- A □縁内外面に粘土帯貼付なし
- B □縁外面に粘土帯貼付
- C □縁内面に粘土帯貼付

	壺								甕							鉢		蓋	
	IA	IB	IIA	IIB	IIC	IIIA	IIIB	IIIV	VB	IA	IB	IC	ID	IE	IF	II	A		B
前期 I-5 遺構合計	0	1	7	4	1	0	0	0	0	5	12	0	0	0	0	0	1	0	1
中期 II-1 遺構合計	1	0	8	2	0	0	0	0	0	1	13	0	0	0	0	0	0	0	1
中期 II-2・III-1 遺構合計	3	3	14	76	0	1	2	2	2	0	9	0	0	0	2	7	6	1	1

北区包含層	5	0	42	55	0	0	0	1	0	10	94	0	0	6	1	1	5	0	5
-------	---	---	----	----	---	---	---	---	---	----	----	---	---	---	---	---	---	---	---

南区包含層	6	5	67	117	2	0	1	0	0	6	89	1	1	1	0	18	7	0	0
-------	---	---	----	-----	---	---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	----	---	---	---

南区包含層 壺A	73	38%	甕 I 類	98	84%	116
壺B	122	64%	甕 II 類	18	16%	
壺C	2	1%				
計	197					

北区包含層 壺A	48	47%	甕 I 類	111	99%
壺B	55	53%	甕 II 類	1	1%
壺C	0	0%			
計	103				

遺構出土	全体				
	I 5	II 1	II 2		
壺A	43	30%	1	1	6
壺B	96	68%	11	11	89
壺C	2	1%	1	0	0
甕 I 類	77	89.5%	17	15	10
甕 II 類	9	10.5%	0	2	5

遺構出土				
	壺	甕	鉢	蓋
I-5	13	17	1	1
II-1	7	7	0	0
II-2	13	7	0	1
I-5 II-1	11	37	0	0

遺構ごと、あるいは北区・南区の包含層ごとの器種分類別点数を表4に示した。壺と甕については、口縁形状で分類可能な個体の点数のみを取り出しているため、実際の器種分類ごとの割合をそのまま反映しているものではないが、傾向をつかむことは可能である。

前期末（Ⅰ-5）・中期初頭（Ⅱ-1）・中期前葉（Ⅱ-2）・中期中葉（Ⅲ-1）の4時期を可能な限り把握しようと試みた。各期の特徴を持つ土器が重なる状況もあったため、前期末・中期初頭・中期前葉～中葉の3時期に遺構を分けて、器種・分類別の土器の傾向の分析を行った。

前期の遺構から出土した器種は壺・甕・鉢・蓋であり、分類可能な土器の中で壺：甕は5：7の比率である。壺の口縁部内外面への粘土帯貼付の有無による分類では、前期の遺構でA（貼付なし）：B（外面貼付）：C（内面貼付）=13：8：1となっている。SK12・31、SD3、SX3等、南区下面検出遺構でB類の存在が確認されており、貼付口縁の土器が前期末の段階で登場することが改めて確認された。B類は前期末36%であり、中期初頭（Ⅱ-1）でも28%と前期末と同程度の構成比であるが、中期前葉～中葉の段階に至って82%と急増している。前～中期を通じて広口壺（Ⅰ～Ⅲ類）が主体となるが、今回は頸部の長さを基準にした分類であり、時期が新しくなるに従って長頸化するという傾向を読み取ることができる。Ⅲ類とした頸部の長い広口壺が中期になって登場し、直口壺（Ⅳ類）や長頸壺（Ⅴ類）が中期前半の段階で登場、器形のバラエティーは増えるが、壺全体の90%以上は広口壺で占められる。ただし、中期前半に広口壺の長頸化が極端に進行することはなく、主体となるのはⅠ類（短頸広口壺）・Ⅲ類ではなく、中間的な形態を持つⅡ類である。

3) 中期前半の土器集中土坑

遺構の中で、SK6・14・15は注目される遺構である。いずれも10cm前後の土器片を敷き詰めた状態の土坑であり、多量の土器片とともに炭化物や焼かれた骨片が出土している。これらの土坑の規模は、長さ2～3m、幅0.6～1m、深さ10cm前後であり、土器はすべて中期前半のものである。この骨は鑑定の結果、ニホンジカ、イノシシ、ノウサギのものであることが明らかになった。意図的に骨片と土器片を敷き詰めた遺構である点、そして、出土土器の中に明らかに周囲の土器とは異なる高温で被熱し変形した土器片が確認される点も注目される点である。祭祀的な意味を持つ遺構なのか、遺構の性格が検討課題である。類例の増加を待ちたい。（高知県内では前期末～中期初頭の高知市柳田遺跡に土器が集中し獣骨片が出土した例がある。高温被熱変形土器は伴わない。また、被熱変形土器を伴わないものの、土器片が集中し獣骨が出土する遺構に今回の調査で検出したSK19がある。）

これら3基の土坑からは、遺物がまとまって出土しており、分類可能な壺形土器が20～30点前後出土している点も共通している。壺形土器の中に広口壺Ⅱ類が占める割合は90%以上であり、同時に貼付口縁を有する土器の占める割合は、SK15は100%、SK6・14ともに87%と極めて高い。

器種組成をみると、甕形土器が占める割合がSK6・14は3～6%、SK15は24%と少なく、これらの遺構は、他遺構に比べ壺形土器の占める割合が高い遺構だといえる。（遺構出土資料や包含層出土資料を地点ごと時期ごとに検討すると、今回の調査では甕形土器の占める割合は37～53%である。）

壺形土器の口縁部の刻目の有無に着目すると、3遺構の間には明らかな違いが認められる。口縁形状を「素口縁」「上下端に刻目」「下端のみ刻目」「全面刻目」に分けて遺構ごとの様相を比較する

と下表のようになる。素口縁が50%前後のSK6とSK15に対し、SK14は下端に刻目を持つものが50%、全面に刻目を持つものが18%と刻目を持つ個体の割合が高い。SK14（中期前葉・Ⅱ-2）→SK6・SK15（中期中葉・Ⅲ-1）の新旧関係に照らし合わせると、より新しい要素が素口縁であることがわかる。

Ⅱ様式併行期には口唇に刻目を持つタイプが多いが、刻目を持たなくなる方向へと変化、強い横ナデにより凹状を呈する口唇から、平坦な面を形成する口唇へと変化するようになる。粘土帯貼付のない広口壺ⅡA類から貼付口縁であるⅡB類へと変化する。ⅡA類が素口縁31%であるのに対しⅡB類では52%へ

口唇形状の違いによる分類表

	SK6	SK14	SK15		ⅡA類	ⅡB	ⅡC
素口縁	15 (47%)	5 (18%)	10 (53%)	素口縁	19 (31%)	61 (54%)	0
上下刻	7 (22%)	4 (14%)	3 (16%)	上下刻	26 (43%)	26 (23%)	0
下端刻	9 (28%)	14 (50%)	4 (21%)	下端刻	10 (16%)	12 (11%)	1 (50%)
全面刻	1 (3%)	5 (18%)	2 (11%)	全面刻	6 (10%)	13 (12%)	1 (50%)
計	32	28	19	計	61	112	2

と増加、逆に口唇上下に刻目を持つものは41%（ⅡA）から22%（ⅡB）へと減少している。

4) 下分遠崎遺跡4次調査出土弥生土器の特徴

高知平野では類例のほとんどない弥生中期前半の遺構一括資料が得られた。各種突帯文やヘラ描・櫛描の多様な文様の組み合わせについては、本報告の中でまとめることはできなかったが、前期末までの遠賀川式土器が大きなウエイトを占める状況から、器形・文様とも多様な土器が出現、地域性が顕在化する時期であることが、土器の上からもはっきりとわかる。

高知平野に櫛描簾状文が登場する時期の遺構が、これだけまとまって確認されたのは初めてのことである。

以下、今回の出土弥生土器の特徴をまとめてみる。

- ① 弥生前期末（Ⅰ-5）から中期中葉（Ⅲ-1）の土器が遺構から出土している。
- ② 「薄手式土器」といわれていた胎土・色調・厚さの異なる甕Ⅱ類が出土した。今までの調査同様、今回も全体では数%が甕Ⅱ類だが、地点により占める割合は異なっている。中期の遺構に伴うものもある。
- ③ 逆L字状口縁の甕2点と鋤先状口縁を持つ壺が1点出土している。全体に占める割合は2%以下であり、今までの調査地点と較べると少ない。逆L字状口縁の瀬戸内型甕は今までの調査では10%前後だった。
- ④ F類とした甕形土器は高松平野周辺の土器であり、中期前半の讃岐の土器が直接搬入されたことが高知平野で初めて確認された例として注目される。
- ⑤ 赤彩土器は3点確認されている。
- ⑥ ヘラ描沈線と初源的な櫛描簾状文が共存する土器片がある。（SD3）
- ⑦ 浅い皿状の土坑・獣骨片が出土・高温被熱変形土器が出土するという共通点がある遺構（SK6・

14・15) 出土土器の比較検討を行った。これらの遺構には壺形土器の占める割合が高い。9割以上が貼付口縁を有し、広口壺Ⅱ類に分類される頸部の長さを指標にした中間形態の壺が大半を占めている。SK14 はⅡ-2期、SK6・15はⅢ-1期に相当する。新旧の遺構の検討により、中期前半には壺形土器は「口唇上下あるいは下端、全面に刻み目を持つ」土器から「素口縁」の土器へと変化していくという傾向が確認できた。

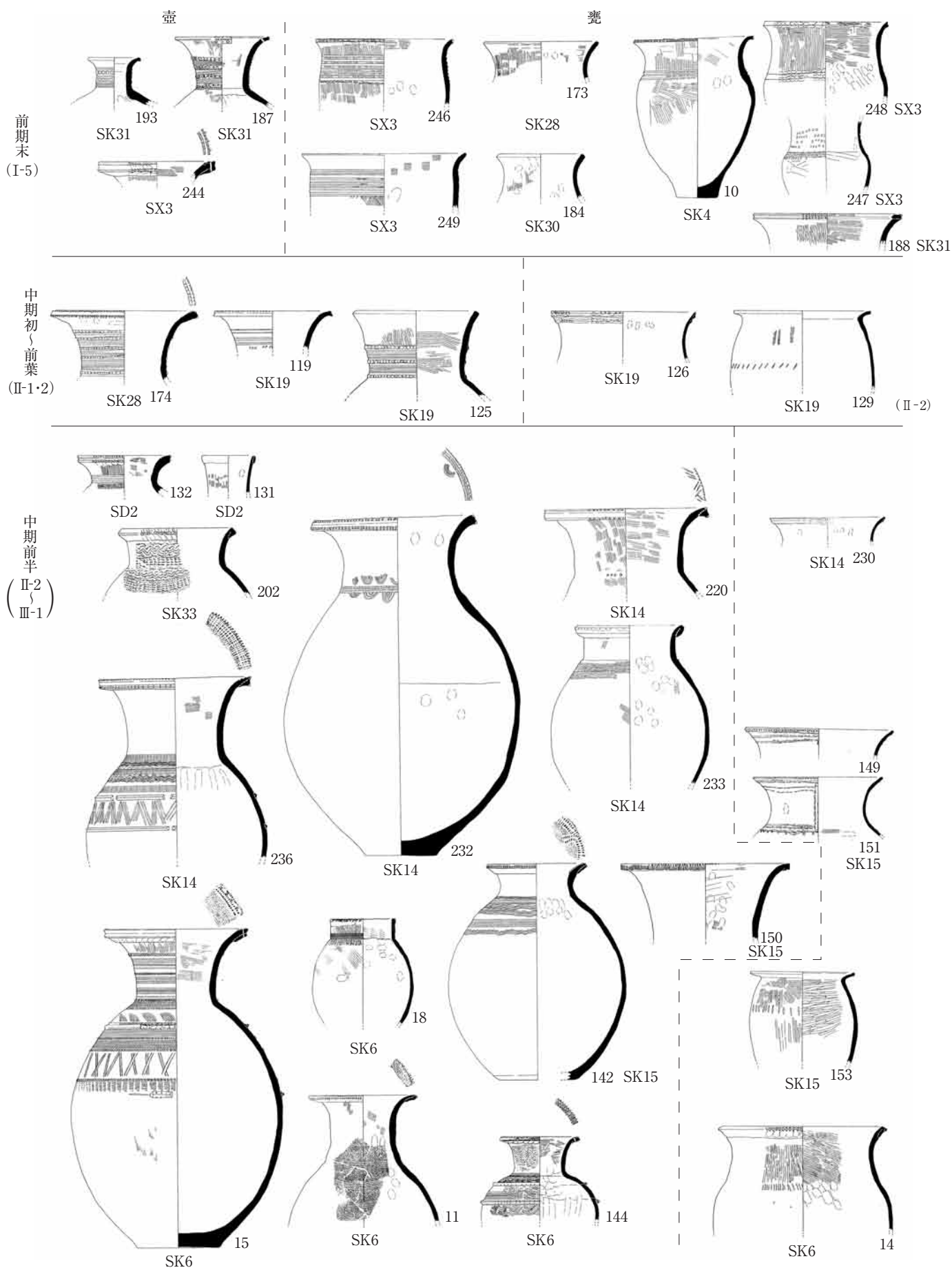
- ⑧ 南四国の中期土器を特徴付ける貼付口縁が、前期末の段階で一定量認められる。同様に、前期の遺構からは南四国型甕（甕B類）も36%確認されている。中期前半になると貼付口縁の土器の割合が急増、80%以上になる。

引用文献

- (1) 出原恵三「第Ⅵ章考察」『下分遠崎遺跡(1)』1989年 香我美町教育委員会
出原恵三「〈土佐型〉甕の提唱とその意義」『遺跡 第32号』1990年 遺跡発行会
- (2) 『田村遺跡群Ⅱ』第1分冊～8分冊 2004年 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- (3) 出原恵三「〈薄手式土器〉の展開とその意義」『南国史談』第7号 1989年
- (4) 出原恵三「第Ⅳ章考察」『下分遠崎遺跡』1994年 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

参考文献

- 出原恵三「5土佐地域〈出原恵三〉」『弥生土器の様式と編年 四国編』（木耳社2000年）
- 出原恵三「〈南四国型〉甕の成立と背景 - 二重構造論の視点から - 」『続文化財学論集』2003年
文化財学論集刊行会
- 出原恵三「弥生文化の成立と高知平野」『高知市史研究 第3号』2005年 高知市企画調整課市史編さん室
- 出原恵三「弥生時代前期末・中期末の集落」『古代文化』第56巻第4号 2004年 古代学協会
- 久家隆芳「第Ⅳ章まとめ」『ミトロ遺跡発掘調査報告書』2007年 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 坂本憲明・久家隆芳「Ⅵ弥生時代中後期の土器群」『田村遺跡群Ⅱ 第9分冊』2006年
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 出原恵三「Ⅴ弥生前期土器の編年」『田村遺跡群Ⅱ 第9分冊』2006年
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 松本安紀彦「第Ⅵ章まとめ」『仁井田遺跡』2006年 香美郡香北町教育委員会
- 「被熱変形弥生土器」『史跡 池上曾根99』2004年 (財)大阪府文化財センター
- パリノ・サーヴェイ (株)「池上曾根遺跡の被熱変形土器・土製品に関する自然科学分析」
『史跡 池上曾根99』2004年 (財)大阪府文化財センター



下分遠崎遺跡4次調査出土弥生土器（壺・甕） s=1/8

2. 高温で被熱し変形した土器片について

平成11年度調査の指導をした出原恵三氏が、土器の整理・分析を進める中で、高温被熱した一群の土器があることに気付いた。今までの3次にわたる下分遠崎遺跡の調査でも包含層中に同様の土器が存在することが報告されている。表面が海綿状になった土器や、他の土器と比べより硬質で堅緻な土器が土坑（深さ10cm程度の浅い土坑で、土器が集中しており、骨片も確認されている。SK6・14・15）からまとまって出土するという、今までとは異なる出土状況である。これらの土器の存在から、通常の土器焼成ではあり得ない高温での被熱の可能性を考え、分析の必要性について指摘された⁽¹⁾。

これらの土器片は、実際にどの程度の温度にさらされた（2次的に被熱した）のだろうか。他遺跡の分析例⁽²⁾を参考に、被熱温度の推定を試みる。

分析方法

分析方法はX線回折により、温度変化による含有粘土鉱物の変化を確認することで、焼成時の温度の推定を行うというものである。

分析サンプルとしてSK14及び15から出土した土器片を使用した。いずれも土器が集中して確認された土坑である。これらの土坑から出土した土器片の中で、SK14からは標準的な色調（黄燈色系）のもの（サンプル3）を、SK15からは灰褐色系の色調で、海綿状を呈するなどより高温での焼成が予想される土器片（サンプル1・2）を分析対象のサンプルとして使用する。

分析結果

X線回折の結果、サンプル1と2においては同じ鉱物組成であり、サンプル3とは組成に違いがみられる。（第1図）サンプル1・2では石英・ムライト・長石等の鉱物が確認された。これに対し、サンプル3には石英・ヘマタイト（赤鉄鉱）・長石等の鉱物は認められるもののムライトは認められない。ムライトが生成する温度として1,200℃以上の高温が推定されている⁽²⁾。サンプル1・2の方に高温の熱履歴で認められるムライトが確認されることから、サンプル1・2の方が3よりも高温の熱履歴を受けていることがわかる。

なお、1,200℃より低温での被熱の繰り返しによってムライトが生成することはなく、1度の被熱で1,200℃以上の高温に達する必要があるということである⁽³⁾。

- (1) 同時に類例として、大阪府美園遺跡から出土した高温で被熱し変形した土器について出原恵三氏（高知県埋蔵文化財センター）によりご教示をいただいた。
- (2) （株）パリノサーベイ「第Ⅶ章 付編 奥谷南遺跡の自然科学分析」（『奥谷南遺跡Ⅱ』2000.3 高知県埋蔵文化財センター）奥谷南遺跡の自然科学分析（「10世紀の遺構に関する自然科学分析調査」）の中で、「ロストル窯内部の被熱状態」考察に使われた「加熱温度の推定」の指針を参考にした。
- (3) ムライトが生成する高温で被熱している土器の例として、池上曾根遺跡1999年度調査では変形した高温被熱土器と金属工房が関連付けて捉えられている。パリノサーベイの辻康男氏によりご教示を受けた。

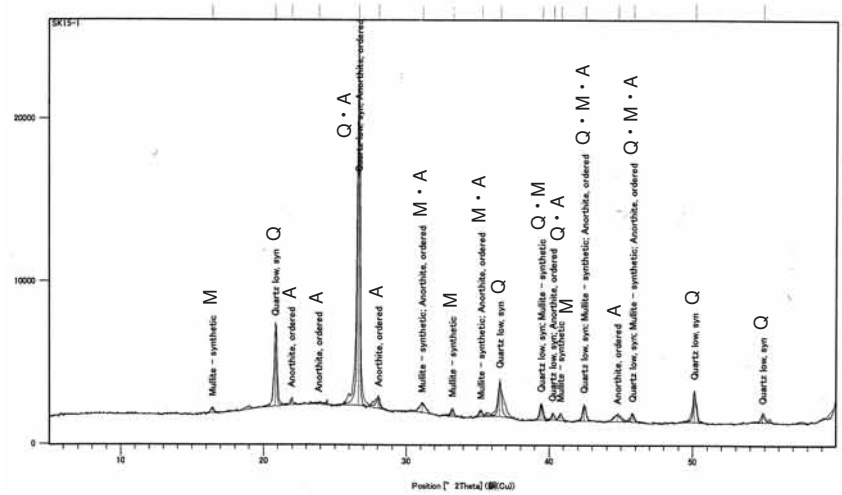
サンプル1 (SK15より出土。海綿状を呈する。)

サンプル2 (SK15より出土。色調及び器表の堅緻な様子から高温での焼成が予想されるもの。)

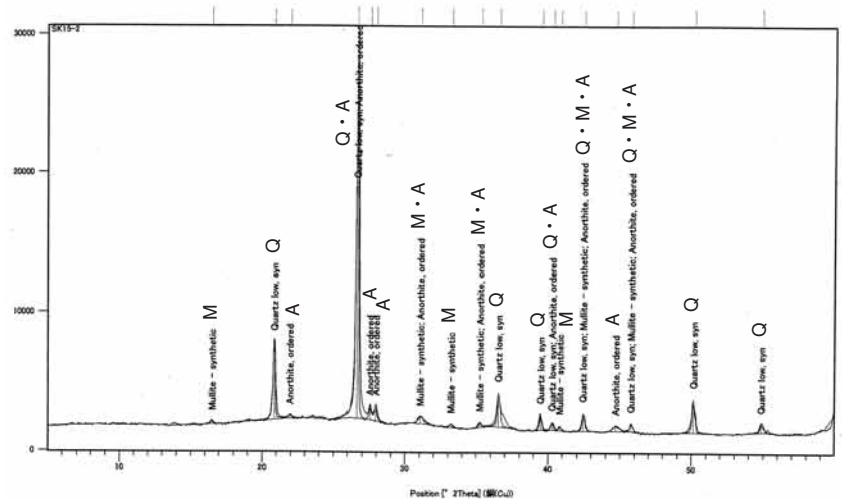
サンプル3 (SK14より出土。橙色傾向の発色で、一般的な焼成温度が予想される。)

※X線回折分析の結果

サンプル1
(SK15-1)

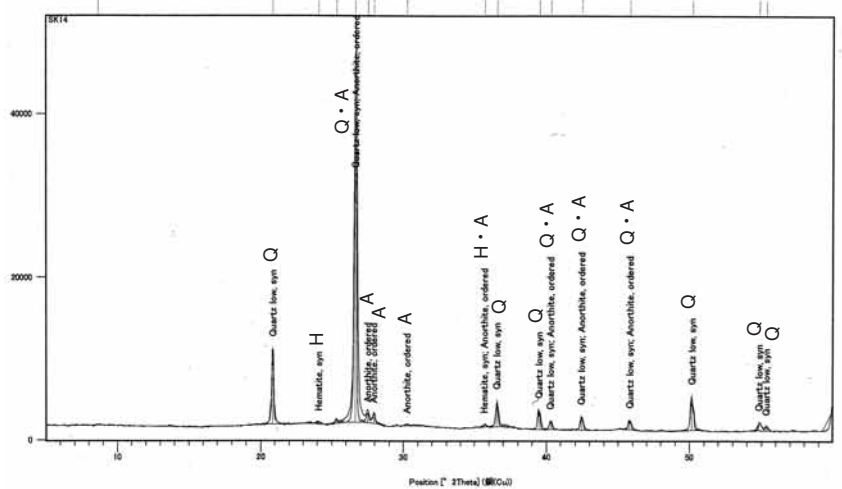


サンプル2
(SK15-2)



サンプル3
(SK14)

凡例
Q. 石英 Quartz
A. 長石 Anorthite
H. ヘマタイト (赤鉄鉱) Hematite
M. ムライト Mullite



第1図 SK14・15出土土器 (サンプル1~3) X線回折図

X線回折分析の結果、ムライトの生成、すなわち1,200℃以上の高温に達したことが明らかになった。同様の外見上の特徴（灰色・暗灰色・灰褐色傾向に発色、海綿状の器表面、比重が小さく他の土器片より軽い、等）を有する高温被熱土器は今回分析したSK15以外にもSK6、SK14でまとまって確認された。SK6は北区、SK14・15は南区で確認された遺構だが、いずれも弥生時代中期前半に属する遺構である。今回の調査では、弥生前期末の遺構からは同様の土器片は確認されておらず、中期前半の土器に限定されている。

土器片の色調は器表面と断面が似通っており、これらの土器が破片となった後に高温で被熱したことがわかる。SK6・14・15のそれぞれの遺構において、これらの「高温での被熱」が認められる土器と橙色・黄橙色系の一般的な熱履歴の土器とが一緒に出土しており、土器片がこれらの遺構内で高温にさらされたものではないということがわかる。通常の焼成時の被熱あるいは煮炊き等による被熱では、このような変形を伴う器面変化は生じない。土器片の高温被熱がどのような状況下において生じたものだったのか、今後検討していく必要がある。

参考) 土器片の焼成実験。焚き火の炎でムライトを生じる状況が起こり得るのか。

2009年夏、四万十市の四万十川河口の西側、布岬のある土佐清水市布地区で、小学生とその家族、地元の方々とともに土器づくりやキャンプなど楽しい夏の日を過ごした⁽⁵⁾。その際に、土器づくり失敗作の土器片を使って、キャンプファイヤーの炎（終了後も熾き



となって、一晩燃え続けた）に投入した土器片の変化の様子を観察するという試みを行った。2時間後に取り出した土器片（サンプル2）は、透き通るほど赤く発色したものの変形は認められなかった。これに対し、一晩熾き火の中に放置した土器片（サンプル3）は大きく変形していた。X線回折分析の結果、野焼きによる焼成だけの土器片（サンプル1）からは、石英・モスコバイトが検出され、サンプル2・3からは石英とセリサイトが検出されたものの、ムライトの生成は認められなかった。モスコバイトの検出は水酸基が残り焼成不十分だということを示す。

今回の実験では、焚き火の熾き火では変形してもムライトは生成しないという結果となった。1,200℃以上の高温には焚き火の熾き火だけでは達しない。

(4) 沢田正昭・秋山隆保・井藤暁子「第9節 八尾市美園遺跡出土の変形を受けた土器について」（第Ⅵ章 自然遺物とその他の分析）『美園』大阪文化財センター 1985 において、加熱焼成実験をはじめ、多角的な分析を加えている。その結果1,200℃以上の高温が必要だと判明、様々な試論が検討されている。また、弥生前期末から中期はじめにかけて同様の土器片出土例があると寝屋川市教育委員会の濱田延充氏よりご教示をいただいた。

(5) 布小学校の校庭を基地に、海や川で活動するとともに、土器づくりや塩づくりなど多彩な活動が計画された。布小学校は昨年度で廃校となり、現在は下ノ加江小学校に統合されている。高知県立美術館が主催した休・廃校活性化プロジェクトをきっかけに、前田光雄氏（高知県埋蔵文化財センター）、濱田竜也氏（はれんち四万十プロジェクト）等を中心に計画された企画がこの「アートキャンプinぬの」である。当日は50名を超える親子が参加した。

3. 土器焼成に関する重要な知見～粘土塊を包蔵する遺構～について

第1次調査（1986年試掘調査）、第2次調査（1988年本発掘調査）において、「粘土塊を包蔵する遺構」の報告がなされている。県内の他遺跡に同様の報告例はなく⁽¹⁾（2009年9月現在）、土器製作に関する重要な知見である。ここに、図面と併せて再録し、確認しておきたい。

1) 第1次調査

『下分遠崎遺跡試掘調査概報』香我美町教育委員会1987.3

【第四章遺構と遺物 1 Aトレンチ (4)土器製作用粘土 (Fig9・18)】 12ページ

「A-9区、Ⅶ層中で3ヶ所、A-12区、Ⅶ層中で1ヶ所、土器製作用と考えられる粘土の広がりを検出した。No1は不整形のプランで長さ70cm、幅25cm、No2は径30cm、No3は径40cmの広がり、厚さは、1～3cmである。No4は径50cmで、Fig18に示すとおり漏斗状の堆積をしている。これらの粘土は、周囲のものとは全く異なり、明茶色に発色し混和材の砂粒やシャーモットを含んでいる。この付近に土器製作・焼成場のあったことをうかがわしめるものである。また包含層出土土器の中には、海綿状になったものもあり、やはり焼成場が近くにあることを暗示している。」



下分遠崎遺跡1・2次調査 粘土塊包蔵遺構検出地点位置図

2) 第2次調査

『高知県香美郡下分遠崎遺跡(1)』香我美町教育委員会 1989.3

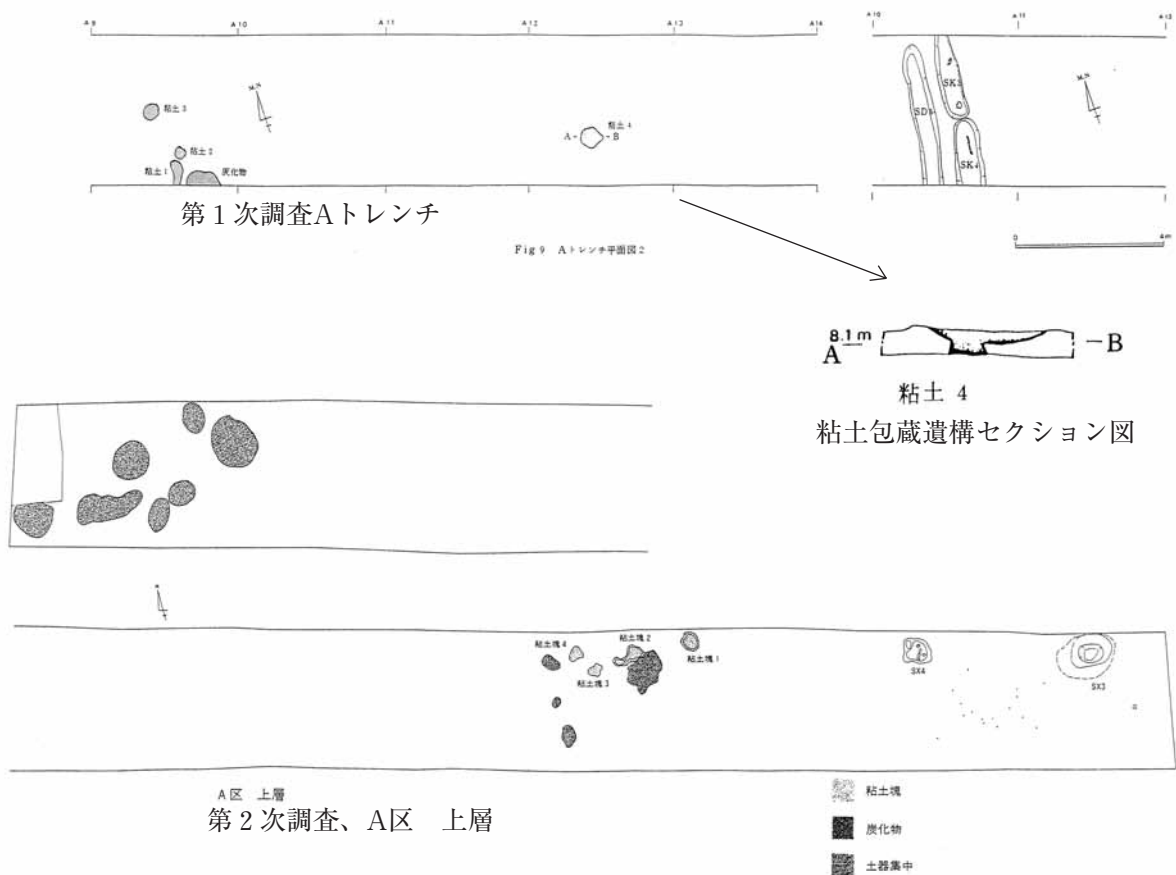
【第V章 遺構と遺物 1. Aトレンチ 上層】4ページ

「粘土塊を包蔵する遺構（第4図）」

粘土塊を包蔵する遺構は4ヶ所検出した。粘土1は楕円形のプランで長径55.0×短径46.0cmを測る。粘土2は不整形のプランで長径85.0×短径23.0cmを測る。粘土3は不整形のプランで長径42.0×短径20.0cmを測る。粘土4は不整形のプランで長径62.0×短径35.0cmを測る。厚さは1～5cmで、漏斗状の堆積をしている。これらの粘土は、周囲のものとは全く異なり、明茶色に発色し、混和材の砂粒やシャーモットを多く含んでおり、土器製作用の粘土と考えられる。

炭化物の集中散布地（第3図）」

炭化物の広がりは、いずれも粘土塊の検出された周辺で第3図に示すとおりに検出した。厚みは1～2cmである。」



(1) 県内に類例は見いだせないものの、愛媛県文京遺跡にも同様の周囲と異なる粘土を包蔵する遺構があるというご指摘を、愛媛大学准教授吉田広氏よりいただいた。文京遺跡例では砂粒やシャーモットは含まないということである。

第Ⅵ章 まとめ

下分遠崎遺跡は、南に香宗川、北に支流の山北川に挟まれ県道稗地中ノ村線の南北に広がる低地性の集落遺跡である。第3次調査の結果から、県道付近の標高が1次及び2次調査区より20～30cmほど低く、旧地形は北に向かって緩傾斜していることが分かり、集落の中心は1次調査Aトレンチから東に伸びる県道南部の周辺と想定されていた。しかし、今次の調査においても基本層序は同様であるが、遺構検出面の高さは3次調査の県道付近よりも50～60cm高く、南区から北区に向かって徐々に高くなっている。北区の旧地形は北西向きに深く傾斜し、調査区外に伸びており旧河道と考えられる。

今次の調査で数多くの遺構を検出し、土器・石器・木製品・獣骨類及び籾殻等の遺物が出土したことから、集落は県道より北にも広がっていることが判明した。過去の3回の調査同様竪穴式住居跡の検出には至らなかったが、遺構密度が高く北区で検出された旧河道以北にも集落が存在した可能性が高い。また、今次調査で出土した土器は、弥生前期末～中期前半にかけての土器であり、特に中期前半（Ⅱ様式併行期）については、良好な遺構一括資料を得ることが出来た。なかでもSK6・SK14・SK15には土器が集中していた。この土坑は10cm前後の土器を敷き詰めた状況であり、多量の土器片とともに炭化物や焼かれた骨片（ニホンジカ・イノシシ・ノウサギ）が出土している。本調査区の南区は、検出面の標高差は20～30cmと近接しているが、3時期の遺構面を確認することが出来た。下層では前期末の遺構が多く、上層になると中期の遺構のみ検出している。

周辺の弥生時代前期末の土器が出土した遺跡をあげてみると、本遺跡から約1,200m東で香宗川左岸にある十万遺跡のSK48・P4からは遠賀川式系の土器が出土、この十万遺跡より約700m東で香宗川の支流山南川右岸にある拝原遺跡のSK12から壺1点・甕7点・鉢1点が出土している。そのほか香我美町の西隣の野市町物部川左岸にある上岡遺跡、この上岡遺跡の北側国道55線を挟んだ北地遺跡があげられる。これらの遺跡はいずれも弥生時代中期前半で消えている。これは高知平野全体に認められる現象であり、後期に入ると再び平野部に集落が出現してくる。この香宗川流域でも、後期後半から末、古墳時代初頭にかけての集落が再び出現しており、十万遺跡、拝原遺跡、上流部の稗地遺跡で竪穴住居跡が確認されている。

下分遠崎遺跡の大きな特徴は、ドングリや炭化米、ヒョウタンやメロン等の各種の種子、獣骨等多くの自然遺物が出土したことである。平成11年に籾殻の付いた炭化米の品種群を推定することを目的にDNA鑑定を行っている。弥生前期末の遺構から出土した試験体1粒から熱帯ジャポニカのDNAが検出され、当時日本で最も古い例として注目を集めた。今回の報告書を刊行するにあたり、前回分析した1次調査SK3出土の炭化米の残りのサンプルで再度DNA鑑定を行った。DNAの抽出はNaOH法を用いて9点のイネ遺存体で解析した。結果は、8点がジャポニカで、そのうち温帯型と熱帯型とを識別できる1点は温帯型であった。もう1点は現生のイネの遺伝資源では認められないものであった。これらの分析結果から下分遠崎遺跡は、多様なイネが栽培されていたこととなる。また、イノシシ・ニホンジカ・ニホンザル・ツキノワグマ等の獣骨類やカツオの腹椎骨が出土してお

表5 下分遠崎遺跡全調査遺物一覧表（木製品、自然遺物）

1次調査

調査期間	昭和61年10月13日～12月16日		調査主体	香我美町
出土地点 遺構	植物類	木製品類	獣骨類等	備考
Aトレンチ	ドングリ・糊	鋤、鋏、椀、へら状木製品、棒状木製品、板状木製品、柱状木製品		弥生中期前葉
Bトレンチ		板状木製品、柱状木製品		弥生中期前葉
Cトレンチ		板状木製品、棒状木製品		弥生中期前葉
Dトレンチ	カシ類・ヤマモモ・シイノキ・イネ等の花粉			

2次調査

調査期間	昭和63年10月3日～10月31日		調査主体	香我美町
出土地点 遺構	植物類	木製品類	獣骨類等	備考
SK1		板状木製品		弥生中期初
SK4	ドングリ			
SD1	瓜の種子・堅果類			
SD3a	ドングリ・糊・メロンの種子			
SD3b	ドングリ・糊	木製包丁、浮子状木製品		弥生中期前葉
SD4	ドングリ	鋤・板状木製品、弓	顎骨・不明獣骨・カツオの骨	弥生中期前葉
SD5	植物繊維をドングリ状に巻きつけたもの	鋤、棒状木製品、柱状木製品、板状木製品、ヘアーピン		弥生中期初
SX1	ドングリの穀細片・糊、木の皮（スギ、ヒノキ）			
SK8		板状建築材		
SK15			鹿下顎骨・不明獣骨	
SK31	ヒョウタン・糊・炭化米			弥生前期末
P40		柱		
P278		柱状木器		

3次調査

調査期間	平成5年9月24日～10月31日		調査主体	高知県文化財団 埋蔵文化財センター
出土地点 遺構	植物類	木製品類	獣骨類等	備考
SD3		鋤先、板状木製品	ツキノワグマの下顎骨（雌の成獣）	弥生前期末～中期初頭

4次調査（今回調査）

調査期間	平成11年4月1日～6月9日		調査主体	香我美町
出土地点 遺構	植物類	木製品類	獣骨類等	備考
北区 SK6			イノシシ・ニホンジカ・イヌ・ノウサギ・ニホンザルの白熱した骨片	
南区 SK13		柱材		
南区 SK14			ニホンジカの角、イノシシ類の肩甲骨、ノウサギの踵骨	
南区 SK31	瓜の種子	鋤、腕輪	ニホンジカの臼歯	
南区 SD2		柄		
南区 SD3	糊	丸太材	ニホンザルの上腕骨、ニホンジカの頸骨・肩甲骨、イヌの腰椎	
南区 SX3		板材、矢板状		
南区 P35		不明		
南区 P89		板状		
南区 P141		柱、半截材		
南区 東斜面		板状、矢板状、杭		
南区 包含層		鋏	イノシシ類の下顎門歯・上顎門歯、イヌの胸椎、ニホンジカの中足骨・踵骨・助骨	

り、特に今次調査で多種の獣骨を確認することができた。石器の組成や立地条件から盛んに狩猟活動を行っていたことが考えられ、また、イヌを飼育し人間の食べ残した骨を与えていたことも明らかになっている。

もうひとつの特徴は、農耕具、工具、狩猟具、装身具、祭祀用具等の多くの木製品が出土していることである。特に1次調査及び2次調査では総点数100以上にのぼる木製品が出土している。用途の明瞭なものは少ないものの、鍬が2点、鋤が8点確認されており、香宗川と山北川に挟まれた湿地帯での稲作に用いられていたことがうかがわれる。また、今次調査でも鍬、鋤が出土しているが1次調査及び2次調査に比べると出土量は少なかった。しかしながら、高知県においては弥生前期末の木製品の出土例は西部の西ノ谷遺跡1例しかなく、当時の木器組成を知る貴重な資料である。

本遺跡で土器製作が行われていたことも特徴のひとつにあげられる。過去の調査で、土器製作に使われたと考えられる粘土を含む8箇所遺構と土器焼成用と考えられる2基の土坑が確認されている。この粘土は、周囲のものとは全く異なり、茶褐色に発色し、混和材の砂粒やシャモットを多く含んでいると報告されている。

昭和61年の下分遠崎遺跡1次調査以来22年間で香我美町や野市町で20箇所以上発掘調査に携わり、数多くの貴重な遺物を発掘してこられた香我美町在住の佐野宣重氏に話を伺ってみた。今までで一番土器が多かったところはどこでしたかと尋ねると、「下分遠崎遺跡が一番多かった。まんべんなく土器があり大変楽しかった。」と当時の思い出を語ってくれた。本遺跡の土器量の多さは、土器製作を盛んに行っていたことに起因するものだろうか。

今次調査でSK6・SK14・SK15から海綿状の土器や高熱をうけて変形した土器片が出土した。これらの土器片の焼成温度についての分析を行い、一度の被熱で温度が1,200℃まで達しているとの結果が得られた。このことから土器が窯状のもので焼かれていたと推測される。しかしながら、それにあたるものは発見されていないこと、また、窯で1,200℃に達するとなれば自然釉の付着が見られないこと等の疑問点が残る。

弥生時代の周辺社会について考えてみると、先にあげた獣骨類の出土で、ツキノワグマの下顎骨の出土については、周辺の低地で狩猟が行われていたとは考えにくい。また、海岸では獲ることができない回遊性の魚であるカツオ漁を行っていたとも考えにくい。本遺跡では搬入された薄手の土器いわゆる南四国型甕A類が出土、また、讃岐平野からの搬入土器も確認されている。多彩な自然遺物の出土は、山間部や海岸に近い集落等比較的遠距離にある集落とも盛んに交流していたことがうかがわれる。

平成20年、本遺跡の約2km南にある徳王子大崎遺跡で弥生前期前半の土器が出土した。これは香宗川流域の弥生時代の展開を考えるうえで極めて重要な発見である。下分遠崎遺跡を遡る時期の小規模な集落が、はじめて物部川を渡り香宗川左岸に出現したのである。集落は、その後前期末の段階で上流域に広がり十万遺跡、拝原など直線距離で約0.6km～2kmの近接した地点で営まれることとなる。香宗川流域の弥生集落の変遷をたどると、先にあげた徳王子大崎遺跡と下分遠崎遺跡間にも時期差があり、これを埋める遺跡は確認されていない。本遺跡の南にある徳王子地区の小高い丘周辺が重要な地点であると推測されるが、遺跡の発見には至っていない。今後の調査に期待したい。

下分遠崎遺跡は、弥生文化の創造的発展期として位置づけられているこの前期末に出現し、中期中葉まで営まれた比較的存続期間の短い遺跡である。今回の調査では、高知県内でも調査例の少ない弥生中期前半の遺構から多くの土器が出土し、第Ⅱ様式併行期の良好な一括資料を得ることが出来た。また、DNA鑑定により明らかになった熱帯ジャポニカの存在や、木製品、獣骨類、植物の種子など自然遺物からも、今までの調査同様の重要な情報が得られた。本遺跡から出土する前期末～中期前半にかけての土器には極めて地域性の濃厚な多彩な装飾が施されている。前期前半以降、拠点集落として展開してきた田村遺跡群は、前期末段階において集落が解体され再編成される。この時期に本遺跡をはじめ多くの集落が周辺部に成立する。下分遠崎遺跡は、この田村遺跡群と比較しても地域性が極めて濃厚であり、二つの遺跡の土器の様相は大きく異なっている。

本遺跡は、前期末～中期前半にかけての周辺の弥生社会の変化明らかにする重要な資料である。

参考文献

- 『下分遠崎遺跡試掘調査概報』香我美町教育委員会 1987年
- 『下分遠崎遺跡(1)』香我美町教育委員会 1989年
- 『下分遠崎遺跡』(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター 1994年
- 『十万遺跡発掘調査報告書』香我美町教育委員会 1988年
- 『拝原遺跡』香我美町教育委員会 1993年
- 『幅山遺跡』香我美町教育委員会 1999年
- 出原恵三「南四国型甕の成立と背景 - 二重構造論の視点から -」『続文化財学論集』2003年
- 出原恵三「第10章 第2節 第1項 下分遠崎遺跡」『香我美町史下巻』1993年

第Ⅶ章 自然科学分析

第1節 下分遠崎遺跡から出土したイネの調査報告

総合地球環境額研究所 田中 克典
佐藤 洋一郎

<緒言>

栽培イネはインディカとジャポニカに分けられる。さらに、ジャポニカは温帯型と熱帯型に分けられる。ジャポニカは長江河口付近に起源し、温帯型と熱帯型へ分化させながら世界各地へ伝播したと考えられている（佐藤, 1996; Fuller & Sato, 2008）。当時のイネがどのようなタイプであったかを解明することでイネの伝播経路だけでなく、人間集団、モノや文化の交流を把握する重要な知見が得られると考えられる。高知県香南市の下分遠崎遺跡第一次調査では弥生前期末の地層よりイネ遺存体（穎）が出土した。未発表ではあるが、佐藤（1996）が葉緑体DNAで分析したところ、イネ遺存体はジャポニカタイプで温帯型と熱帯型が混在していることが明らかとなった。このことから、弥生前期末には多様なイネが栽培されていた可能性がある。そこで、さらに検証を重ねるべく、同遺跡のA区トレンチA（弥生前期末: 2200年前）で採集したイネ遺存体についてDNA分析した。

<材料および方法>

供試材料はA区トレンチAより採集したイネ遺存体である。試料は完全に炭化しており、粃のある種子の中に、少数であるが粃のない種子が混在していた（図1）。できるだけ破壊の小さい粃のついた種子を分析試料として用いた（図2）。採集したイネ遺存体は計12点で（ST1-ST18）、写真撮影し、縦幅と横幅を計測した。

DNA抽出はNaOH法で行い、カラムで精製後にPCR増幅した。PCR増幅に用いたプライマーの領域は、イネのインディカとジャポニカを識別できる葉緑体ゲノムのPS-ID領域（Nakamura et al., 1997）およびORF100領域（Nakamura et al., impress）と温帯型と熱帯型を識別できるイネ第6染色体上の領域（柴内ら, 未発表）、モチ性とウルチ性とを識別できる領域（Wanchana et al., 2003）、赤米と非赤米とを識別できる領域（Furukawa et al., 2007）である。PCR増幅は、抽出したDNAが微量であることを考慮して、1度目のPCR産物を用いて再度PCR増幅した。PCR増幅した産物は、3.0%アガロースゲルで電気泳動して期待サイズの増幅を確認し、塩基配列を解析した。

<結果および考察>

分析に用いたイネ遺存体は粃がついていたが、護穎、副護穎、および小枝梗が残っていなかった。そこで、イネ遺存体18点（KO1-KO18, 図2）について芒と小穂梗を除いた粃の長さ（幅）を現生のイネ（コシヒカリ）と比べたところ、採集したモミの長さは平均で5.51mmとコシヒカリ（7.02mm: デ

ータ省略)より短かった(表1, 図3)。また、イネ遺存体は長さとの変動係数がそれぞれ5.78%および4.83%とコシヒカリの変動係数(長さ: 3.68%, 幅: 3.59%)と比べて大きく、多様であった。

試料18点についてPS-ID領域をPCR増幅したところ、9点(ST 1, 5, 6, 11, 12, 13, 16, 17, 18)で期待サイズのバンドが検出され、DNAが抽出できたことが確認できた(表2, 図4a)。アガロースゲルから期待サイズのバンドを切出して塩基配列を解析したところ、すべて増幅産物は葉緑体ゲノムのPS-ID領域で現生のジャポニカと同じ塩基配列であった(図4b)。また、ORF100領域についてPCR増幅したところ先の9点のうち1点(ST 6)で期待サイズのバンドが検出された(表2, 図5ab)。増幅産物について塩基配列を解析したところ現世のインディカと同じ塩基配列であった(図5c)。ジャポニカの温帯型と熱帯型を識別できるイネ第6染色体上のDNA配列についてPCR増幅したところ、先の9点のうち1点(ST 13)はPCRの増幅が確認できた(表2, 図6ab)。このPCR産物について塩基配列を解析したところ温帯ジャポニカと同じであった(表2, 図6c)。なお、赤米・非赤米およびモチ・ウルチを識別できる領域についてPCR増幅したが、PCR増幅が確認できなかった。

本解析により、試料8点はジャポニカで、特に1点(ST13)は温帯型であることが明らかとなった(図4b, 図6c)。また、1点(ST6)は葉緑体ゲノムのPS-ID領域とORF100領域の塩基配列がそれぞれジャポニカおよびインディカと同じであり、現生のイネ遺伝資源では認められない細胞質型を有していた(図5c)。未発表ではあるが、佐藤(1996)によると下分遠崎遺跡では熱帯型ジャポニカが認められている。また、モミの長さは現生イネのコシヒカリと比べて変異が大きかった(表2, 図3)。このことから、同遺跡では多様なイネが利用されていたと考えられる。引続き解析点数を増加してその多様性の全容を明らかにすることで、栽培イネが日本に導入された経路、その時の経緯のみならず、栽培イネを受容した人々の農法、食生活や社会性を紐解く情報が提供できると考えられる。

参考文献

佐藤洋一郎(1996) DNAが語る稲作文明, NHKブックス

Fuller D. Q. and Y-I Sato (2008) Japonica rice carried to, not from, Island Southeast Asia.

Nature Genet 40

Nakamura I, Kameya N, Kato K, Yamanaka SI, Jomori H, Sato YI (1998) A proposal for identifying the short ID sequence which addresses the plastid subtype of higher plants. Breed Sci 47: 385-388

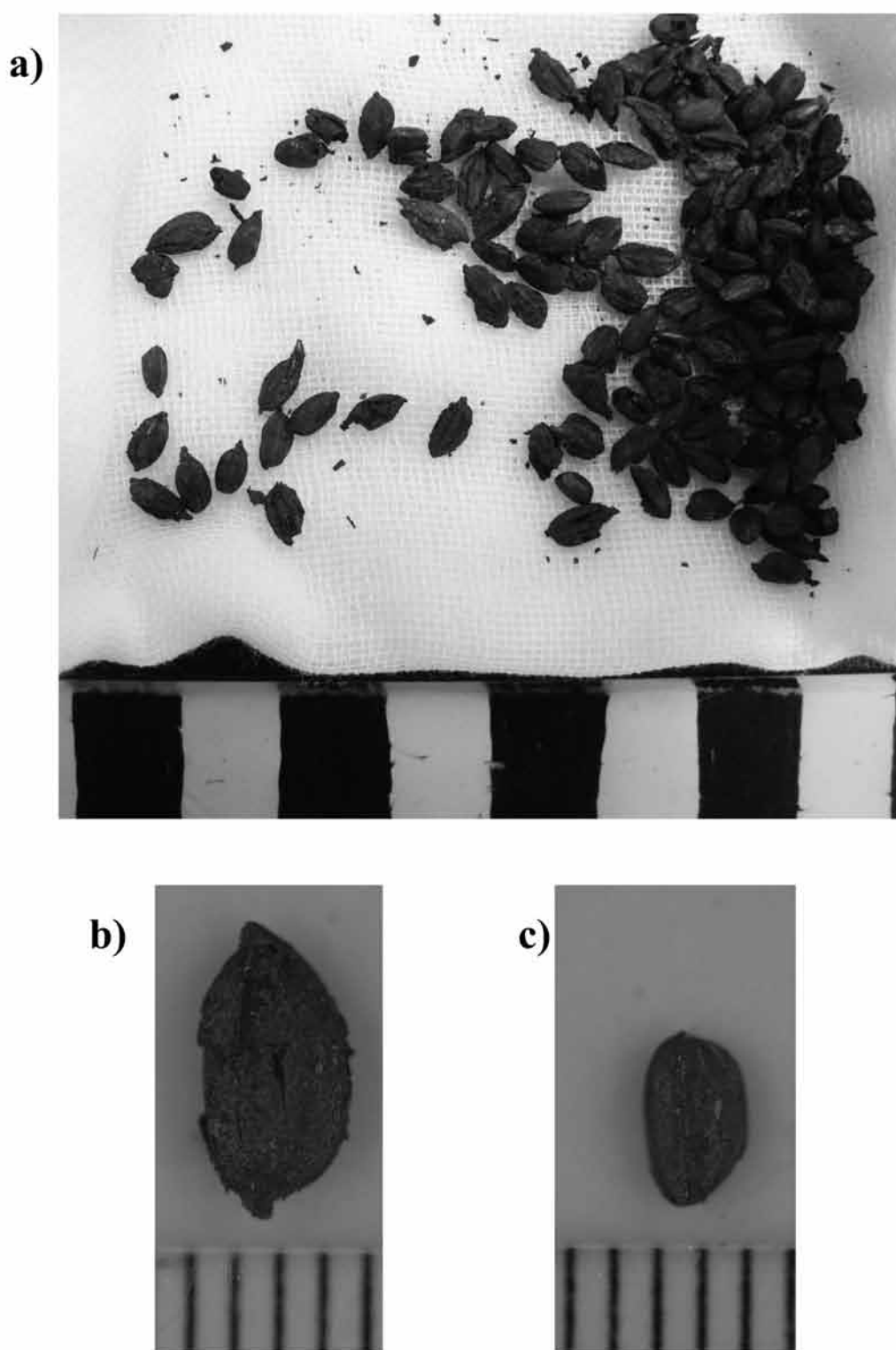


図1 本研究で供試した下分遠崎遺跡のイネ遺存体
a) イネ遺存体の試料, b) 糊が残ったイネ遺存体,
c) 糊がないイネ遺存体
1)スケールの間隔は1.0cm、b),c)のスケールの間隔は1mm

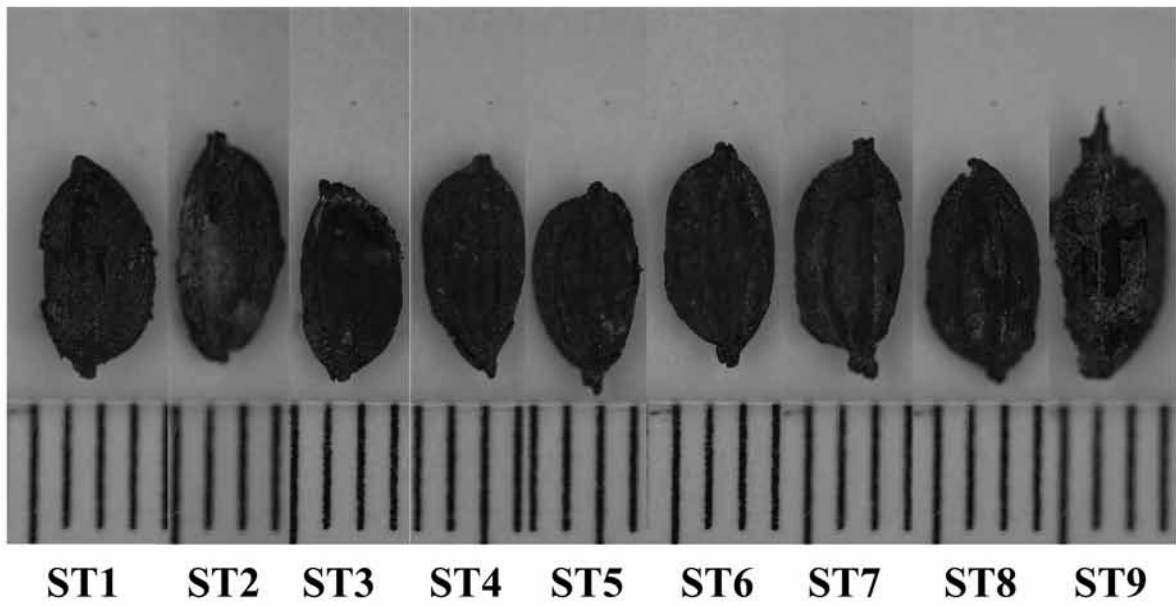


図2 DNA分析に供試した18点のイネ遺存体 (ST1-ST18)

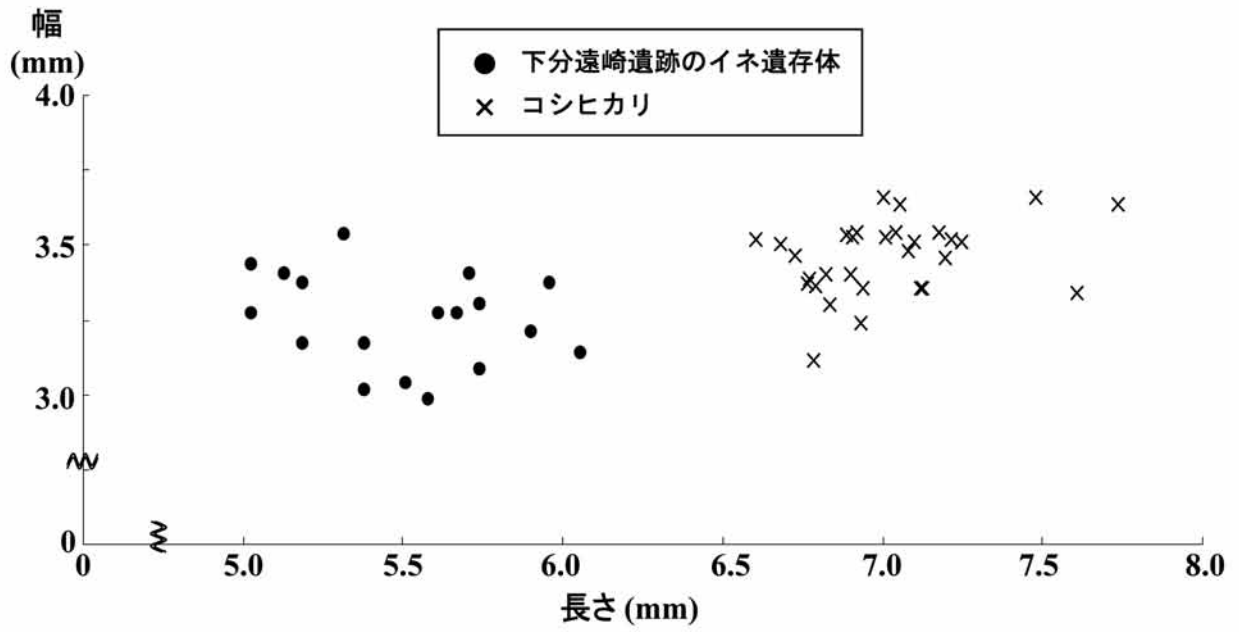
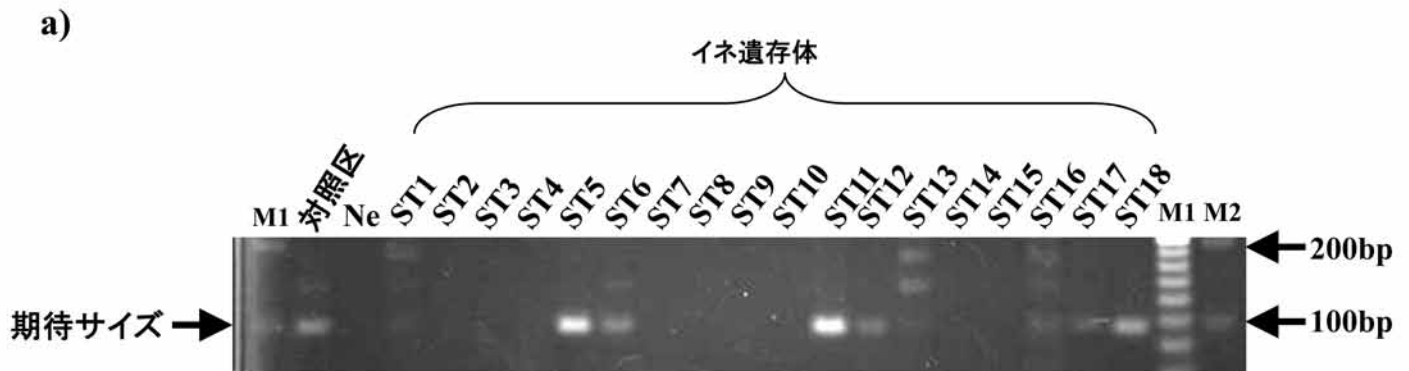


図3 下分遠崎遺跡より採集したイネ遺存体 (ST1-ST18)における長さとの幅の散布図



b)

インディカ	TCAATTTCTTCGGTTAGAAATATAA	CCCGCCCAAAAAAAAAA	GTAGTAT
ジャポニカ	TCAATTTCTTCGGTTAGAAATATAA	CCCGCC---AAAAAA	GTAGTAT
ジャポニカ	TCAATTTCTTCGGTTAGAAATATAA	CCCGCC---AAAAAA	GTAGTAT
ST 1	TCAATTTCTTCGGTTAGAAATATAA	CCCGCC---AAAAAA	GTAGTAT
ST 5	TCAATTTCTTCGGTTAGAAATATAA	CCCGCC---AAAAAA	GTAGTAT
ST 6	TCAATTTCTTCGGTTAGAAATATAA	CCCGCC---AAAAAA	GTAGTAT
ST 11	TCAATTTCTTCGGTTAGAAATATAA	CCCGCC---AAAAAA	GTAGTAT
ST 12	TCAATTTCTTCGGTTAGAAATATAA	CCCGCC---AAAAAA	GTAGTAT
ST 13	TCAATTTCTTCGGTTAGAAATATAA	CCCGCC---AAAAAA	GTAGTAT
ST 16	TCAATTTCTTCGGTTAGAAATATAA	CCCGCC---AAAAAA	GTAGTAT
ST 17	TCAATTTCTTCGGTTAGAAATATAA	CCCGCC---AAAAAA	GTAGTAT
ST 18	TCAATTTCTTCGGTTAGAAATATAA	CCCGCC---AAAAAA	GTAGTAT

図4 イネにおけるPS-ID領域 (*Rpl16-Rpl14*)のPCR増幅と塩基配列構造多型

a) イネ遺存体から抽出したDNAによるPCR増幅産物の電気泳動

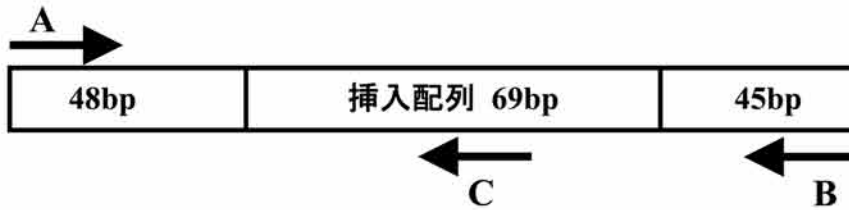
M=100bp DNA Ladder (Biolabs, USA), M2=20bp DNA Ladder (NEB, USA)

Neはネガティブコントロール

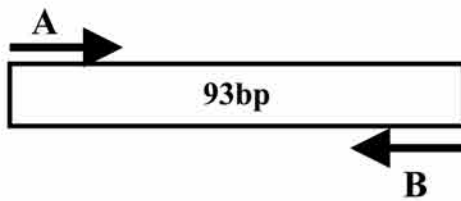
b) イネ遺存体におけるPS-ID領域の塩基配列

緑の枠はイネのインディカとジャポニカを識別するDNA配列

a) ジャポニカ



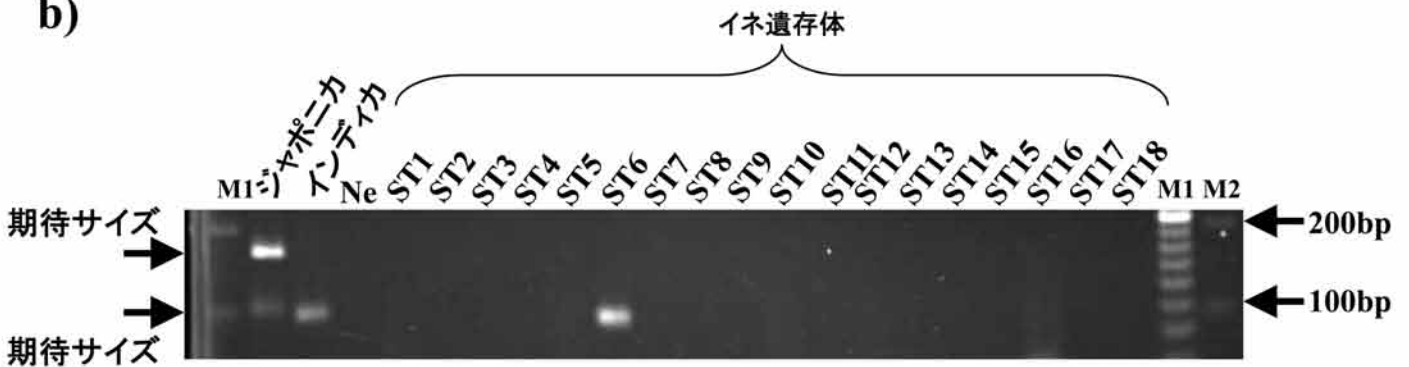
インディカ



付表 イネ葉緑体ゲノム配列の供試プライマーによって増幅されたDNA断片の期待サイズ

生態型	供試プライマー	PCR増幅サイズ (bp)
ジャポニカ	AとB	162
	AとC	100
インディカ	AとB	93
	AとC	増幅なし

b)



c)

ジャポニカ TATCTTTACTTTTTTTCAGAATCC~ (53bp) ~CTTTTTTTCATTTTTCCCTTA
 インディカ TATCTTTACTTTTTTTC A-----TTTTTCCCTTA
 ST6 TATCTTTACTTTTTTTC A-----TTTTTCCCTTA

図5 イネにおける葉緑体ゲノム領域 (*Orf100*)のPCR増幅と塩基配列構造多型
 a) 温帯型および熱帯型における第6染色体領域の構造とプライマー (矢印)の位置

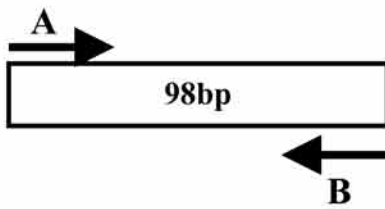
b) プライマーセットA, B, CでPCR増幅した産物の電気泳動

M=100bp DNA Ladder (Biolabs, USA), M2=20bp DNA Ladder (NEB, USA)

Neはネガティブコントロール

c) イネ遺存体における*orf100*領域の塩基配列

a) 温帯型



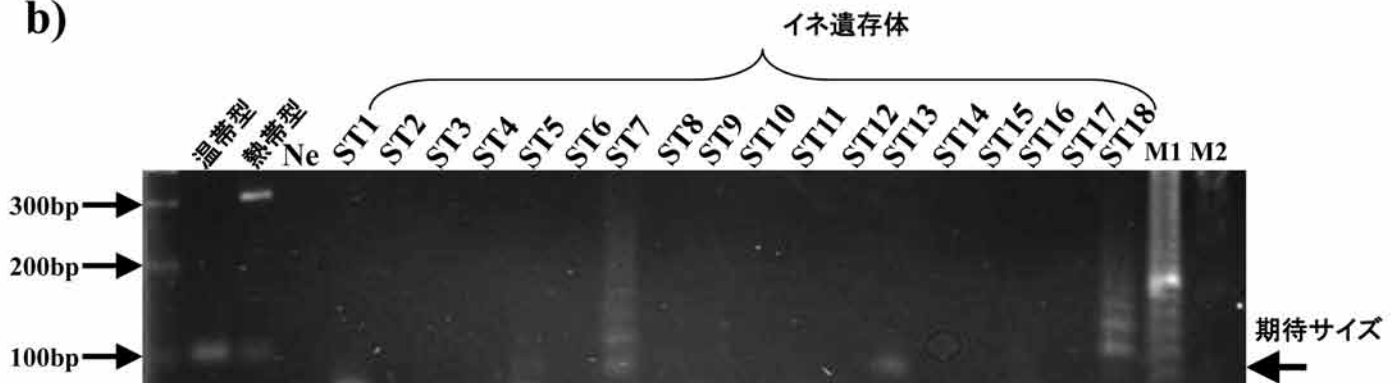
熱帯型



付表 イネ第6染色体配列の供試プライマーによって増幅されたDNA断片の期待サイズ

生態型	供試プライマー	PCR増幅サイズ (bp)
温帯型	AとB	98
	AとC	増幅無し
熱帯型	AとB	315
	AとC	98

b)



c)

温帯型 TACTCTGTATTGTACTC-----TATATAGCTTTGGCAATGAG
 熱帯型 TACTCTGTATTGTACTCGTAG~ (213bp) ~AGCCTATATAACTTTGGCAATGAA
 ST13 TACTCTGTATTGTACTC-----TATATAGCTTTGGCAATGAG

図6 イネの第6染色体領域の構造多型とPCR解析

a) 温帯型および熱帯型における第6染色体領域の構造とプライマー (矢印) の位置

b) イネ遺存体から抽出したDNAによるPCR増幅産物の電気泳動

M=100bp DNA Ladder (Biolabs, USA), M2=20bp DNA Ladder (NEB, USA)

Neはネガティブコントロール

c) イネ遺存体におけるイネ第6染色体領域の塩基配列

表1 下分遠崎遺跡のイネ遺存体におけるモミの長さと幅

個体番号	長さ (mm)	幅 (mm)
KO1	5.74	3.30
KO2	6.06	3.14
KO3	5.38	3.01
KO4	5.58	2.98
KO5	5.19	3.17
KO6	5.61	3.27
KO7	5.67	3.27
KO8	5.71	3.40
KO9	5.90	3.21
KO10	5.03	3.27
KO11	5.74	3.08
KO12	5.51	3.04
KO13	5.13	3.40
KO14	5.38	3.17
KO15	5.32	3.53
KO16	5.03	3.43
KO17	5.19	3.37
KO18	5.96	3.37
平均 (mm)	5.51	3.25
最大値 (mm)	6.06	3.53
最小値 (mm)	5.03	2.98
標準偏差	0.318	0.157
変動係数 (%)	5.78	4.83

表2 イネ遺存体におけるPS-ID、ORF100
及び第6染色体領域のPCR増幅

個体番号	PCR増幅の有無		
	PS-ID ¹⁾	ORF100 ¹⁾	Ch6 ¹⁾
K01	○	×	×
K02	×	×	×
K03	×	×	×
K04	×	×	×
K05	○	×	×
K06	○	○	×
K07	×	×	×
K08	×	×	×
K09	×	×	×
K010	×	×	×
K011	○	×	×
K012	○	×	×
K013	○	×	○
K014	×	×	×
K015	×	×	×
K016	○	×	×
K017	○	×	×
K018	○	×	×
計	9	1	1

¹⁾○: 増幅、×: 増幅無し

第2節 下分遠崎遺跡出土の動物遺存体の分析実績報告書

高知県香南市香我美町下分所在の弥生時代中期遺跡資料の調査

岡山理科大学理学部 生物化学科講師

富岡 直人

はじめに

高知県香南市香我美町下分遠崎遺跡は、高知平野東部を流れる香宗川の形成した沖積低地上の弥生時代遺跡である。1999年4月～6月に高知県香我美町教育委員会によって調査・発掘された標高約8.7mの地点からは、弥生時代前～中期に形成された土坑、溝、包含層が検出され、それに伴って動物遺存体が出土した。本報告は、この資料群について実施した鑑定・数値分析・齢査定分析・形成過程分析などの分析結果を記すものである。

1 出土状況

調査S区で確認した土坑、溝、包含層のうち、**弥生時代前期末**から**中期初頭**に形成された土坑SK14（弥生中期初頭）、SK6（弥生中期初頭）、SK31（弥生前期末）、溝SD3（弥生中期初頭）、および包含層Ⅲ層（弥生中期初頭）より資料件数13件19点の動物遺存体が発見された。

このうち土器を敷き詰めて祭祀が実施されたと考えられるSK6、SK14より出土した遺存体は摂氏500度以上の高温で焼かれ白色を呈している。それ以外の資料は低湿地性の埋存環境に影響され茶褐色に変化し、一部はビビアナイト（藍鉄銅（ $\text{Vivianite:Fe}_3\text{P}_2\text{O}_8 \cdot 8\text{H}_2\text{O}$ ））を析出し脆弱化している。

2 分析方法

上記動物遺存体資料を分類・同定し、固体数算定を行うとともに、常法によって計測し、実体顕微鏡、生物顕微鏡で観察し、解体痕跡の分析、死亡年齢の推定を実施して、当時の家畜飼育・処理文化を考察することを目的とした。

遺物番号1,2,5～13については水洗を実施し、分析資料に供した。しかし、遺物番号2,3は脆弱であったため、水洗選別は行わず、必要に応じて精製水と面相筆・軟毛歯ブラシでクリーニングを実施し、バインダー処理を実施して資料化した。

さらに、土壌中での資料の埋存環境を推定するために、資料を包含していた乾燥土壌を採集し、純水を利用して抽出液を製作し土壌pHの測定を実施した。

3 出土動物遺存体の特徴

第1表 下分遠崎遺跡出土動物遺存体種名表

List of the animal remains from Shimobuntozaki site, Kochi prefecture

哺乳綱	Mammalia
ウシ目 (偶蹄目)	Artiodactyla
イノシシ科	Suidae
イノシシ類	<i>Sus scrofa</i> subsp. indet
シカ科	Cervidae
ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i> Temminck
ネコ目 (食肉目)	Carnivora
イヌ科	Canidae
イヌ	<i>Canis familiaris</i> Temminck
ウサギ目 (兎目)	Lagomorpha
ウサギ科	Leporidae
ノウサギ	<i>Lepus brachyurus</i> Temminck et Schelgel
サル目 (霊長目)	
オナガザル科	Cercopithecidae
ニホンザル	<i>Macaca fuscata fuscata</i> (Blyth)

検出された動物遺存体は全て哺乳類であった。これらのうち種名が明らかになったものについて、標準和名と学名を第1表に掲げる。

送付された資料の番号は件数に従ってつけられており、1件中に複数固体が含まれた場合は補助番号①、②を付して整理した。出土資料の属性は、別紙1表2に示す。これらのうち残存状況が良好なものを写真撮影し、別紙2図版1に示した。

哺乳綱 Mammalia

資料点数13件19点全てが哺乳類の遺存体と推定された。そのうち12点が3目、4科、4種に同定・分類された。また、表2に中型哺乳類として記載した資料は目以下の同定が困難であった資料であり、2件を占め、点数では10点を超えるものの、火を受けて破砕している資料も多いため、点数の提示は困難である。以下に種名に沿って資料の概要を述べる。

ウシ目 (偶蹄目)	Artiodactyla
イノシシ科	Suidae
イノシシ類	<i>Sus scrofa</i> subsp. indet.

イノシシは本州以南の森林地帯に群れをなして生息している (岡田他 1960)。本種は亜種として本州、四国、九州に生息するニホンイノシシ *Sus scrofa leucomystax*、南西諸島に生息するリュウキュウイノシシ *S. scrofa riukiuanus* が設定されているが、日本各地でブタと交配し一部は野生化し

ている通称イノブタがかなり広くみられる。遺跡出土イノシシ類資料について、松本彦七郎、直良信夫は更新世から縄文時代にかけてみられる大型のイノシシをニッポンイノシシ *S. nipponicus* およびその系統のミコトイノシシ *S. mikotonis* などと分類したが（松本 1917、直良 1968）、これには反対意見も多く、現在のニホンイノシシと連続的なものであるとする考えも強い（林 1983）。出土資料は破片が多く、いずれも形質的にブタ *S. scrofa domesticus*と断言できる資料は検出できなかった。本報告では、ブタも含むカテゴリーとしてイノシシ類 *S. s. subsp. indet* として報告する。

ニホンイノシシは雑食性の生活様式を持ち、脚が短く、雪深い地域には適していないことから、豪雪地帯には生息が難しい（常田 1982）。

弥生時代前期末に属する土坑SK31とⅢ層から出土した歯牙を含む2点の資料と弥生時代中期初頭の土坑SK14から出土した左肩甲骨がイノシシ類と同定された。これらのイノシシの年齢構成を、歯牙の萌出と咬耗の状況から推定した。これには、小池、林（1984）と小池裕子先生の御教示を参考としている。この結果、この資料はいずれも若～成獣（1.5歳程度以上）であった。具体的には、資料No.3が萌出状況から2.5歳以上、咬耗状況から5歳程度（小池、林1984の分類ではM1はⅧ、M2がⅡ）と推定され、資料No.9が萌出状況から1.5歳以上であると推定された。いずれも比較的矮小な個体である。

シカ科 Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon* Temminck

日本全国の森林、草原地帯に生息。草食性。ニホンジカは一亜種 *C. n. Nippon* にまとめられることもあるが、6つの亜種に分類し、本州産のものをホンシュウジカ *C. n. centralis*、九州、四国産のものをキュウシュウシカ *C. nippon nippon* とする分類もある（大泰司 1983）。本報告ではニホンジカ *C. Nippon* として記述する。

ニホンジカは秋から冬にかけて、10数頭前後の群れをなして生活するが、それ以外の時期は、雌は若い雄やその年生まれの子と群れをなし、雄は別の集団をつくる（岡田他 1960、林 1968）。発情期は10月がピークで1ヵ月程度である。多産なイノシシと異なりニホンジカの産子数は通常1子である（安部他 1994）。日光などの多雪地帯では季節的な移動を行うものがあり（小林 1978）、宮城県金華山、奈良公園などのような閉塞的環境で生息する個体群と異なり、体格も大きな優勢個体群を形成している。

下分遠崎遺跡では、ニホンジカが最も出土量が多い哺乳類で、7点検出されている。弥生時代前期末に属する土坑SK31から出土した資料番号No.4のシカ左上顎骨は成獣の個体と推定される。弥生時代中期初頭に属する溝SD3から出土した資料番号No.6の左脛骨近位端は、骨端部が化骨化未了であり、幼～若獣であると考えられる。また同じ溝から出土した資料番号7の右肩甲骨は、骨端部が化骨化しており、若～成獣と考えられる。さらに、弥生時代中期初頭の包含層であるⅢ層からシカ右中足骨（No.11）、右踵骨（No.12）、左肋骨（No.13）、同時期の土坑SK14から角破片が出土している。骨端部を持つ場合は全て化骨化しており、さらに角も成長した個体であることがうかがわれることから、すべての個体が若～成獣程度の年齢であることが推定される。

これらの資料のおよその年齢と大きさの関係から、出土資料は体格が貧弱で矮小な個体群に由来するものと考えられる。この原因は、①上記のような個体群の環境に影響された生活行動の違いに基づく可能性。②ニホンジカが亜種レベルで分離できると考えた場合設定されるキュウシュウシカが弥生時代に成立し、出土した可能性。③雌雄の体格差が顕著であった可能性。などが考えられる。出土資料は破片資料で、大きさや体格、形質的特徴を知り、これらの可能性を検討するには、量的な裏付けが乏しい。

遺跡の規模や石器類の組成を考えると、下分遠崎の集団が直接狩猟をおこない、付近の環境からこのような矮小なタイプのニホンジカを捕獲していたものと考えられる。

今後、周辺遺跡での分析が進展し、遺跡ごとのシカの体格の状況が判明すれば、シカ捕獲領域やその地域的特色が解明されることと期待される。

また、既に紹介したNo4のシカ脛骨近位端には大腿骨と頸骨を分離・解体する際に残された切痕が明確に残されており、この部分の腱あるいは筋肉の切除が激しく行われたことをうかがわせる。

ネコ目 (食肉目) *Carivora*

イヌ科 *Canidae*

イヌ *Canis familiaris* Temminck

日本全国の弥生時代遺跡から出土が知られ、狩猟犬、あるいは食用として飼育されていたと考えられる。

また、弥生時代中期初頭の溝SD3とⅢ層からはイヌの腰椎 (No8) と胸椎 (No10) が出土しており、いずれも骨端部が化石化しており、若～成獣の個体と考えられる。

サル目 (霊長目)

オナガザル科 *Cercopithecidae*

ニホンザル *Macaca fuscata fuscata* (Blyth)

日本固有種であり、本州、四国、九州および屋久島、金華山などの近海の島嶼に生息する (今泉他 1983、岡田他 1960)。雑食で、植物、昆虫を多く摂餌する。通常体長は約60cmである (今泉他 1983)。

弥生時代中期初頭の溝SD3より右上腕骨 (No5) が1点検出され、その全長より比較的矮小なニホンザルの成獣個体であったことが推定された。さらにこの資料の近位関節や前位部分に切痕が残されており、ヒトあるいはその他の動物の食料、または皮革材料としてニホンザルが解体されていたことが明らかとなった。

ウサギ目 (兎目) *Lagomorpha*

アサギ科 *Leporidae*

ノウサギ *Lepus brachyurus* Teminck et Schelgel

本州、四国、九州に広く生息。平野、三麓の草地に生息する (岡田他 1965) 草食性の哺乳類で

ある。人家、田畑の近くにあっても生息することから、身近で容易に捕獲される動物質食料として利用された可能性が推定される。

弥生時代中期初頭に属する土坑SK14から火を受けて白色に変化した右種骨（No.1-③）が出土している。解体痕跡は見られなかったが、食用とされた可能性が考えられる。

4 土壌pHの特徴

弥生時代前期末に属する土坑SK31の資料に付着した土壌を採集し、純水を利用して抽出液を製作し土壌pHの測定を実施した。

表3 下分遠崎遺跡土壌pH pH degree of soil in the Shimobuntozaki site

分析 番号	遺構名	資料番号 (動物遺存体)	土壌 pH	土色 (測定液抽出後)
1	SK31	No.3	5.40	10YR3/2

この結果、下分遠崎遺跡を代表する土坑SK31は酸性の埋存状況にあったことが明らかである。このような酸性土壌は、骨格資料の保存に適しておらず、本来骨格が腐朽しやすかったものの、骨格が短期間の内に酸素の供給が少ない層の中にパックされ保存されたことで風化を逃れ、残存したものと考えられる。

5 下分遠崎遺跡における狩猟活動

下分遠崎遺跡の周辺は丘陵と沖積平野、さらに河川と河口、海岸の環境が半径5km内外の範囲で広がり、環境の遷移帯に位置している。このような地域には、出土したイノシシ、ニホンジカなどの中型の陸棲哺乳類やニホンザル、ノウサギなどの小型の陸棲動物が多数生息していたと考えられる。イノシシ、シカとも比較的矮小な個体群が捕獲されていた。特に、ニホンザルとシカには明確なカットマーク（切痕）が残っており、食用あるいは皮革用などの用途に供していたと考えられる。

これらは他の集団から交易などの方法で入手された可能性が考えられるが、下分遠崎遺跡の石器組成や立地などを考慮すると、この集団自身が盛んに狩猟活動を行っていたと考えるべきであろう。

ただし、イノシシ類と分類した資料の中には飼育されていたブタが含まれる可能性がある。残念ながらブタが出土する弥生遺跡で数多く発見されている下顎懸架や穿孔の痕跡がみられず、ブタが含まれている具体的証拠や状況証拠に欠けている。また、ブタが含まれていても全てがブタであったとは限らず、天然に生息するイノシシも捕獲されていた可能性が考えられる。

一方で、海岸線からわずか3kmしか離れていない立地にも関わらず、下分遠崎遺跡からは海岸部で捕獲されたと考えられる動物遺存体が検出されていないことが大きな特徴といえよう。

以上のように、下分遠崎遺跡の弥生集団は陸棲動物の狩猟を軸とした狩猟活動を営み、海岸部での漁撈は低調であった。また、イヌを飼育し人間の食べ残した骨を与えていたことも明らかになっ

た。

さらに、弥生時代中期初頭の土器を敷き詰めた祭祀遺構と考えられる土坑SK14とSK6からはニホンジカ、イノシシ類、ノウサギなどの多様な哺乳類が多数焼骨になって出土している。この土坑からは火を受けていない動物遺存体は1点も出土しておらず、食料残滓というよりは、意図的に火によって焚かれたものと考えられ、ある種の動物祭祀も行われた可能性が考えられる。

謝辞

香我美町教育委員会岡本修氏、高知県埋蔵文化財センター出原恵三氏には資料の提供とともに様々な御教示御援助を頂いた。また、分析にあたっては岡山理科大学大学院生沖田絵麻さん、同大学学生藤田美美さん、渡邊美保さんの多大なる御協力を得た。さらに、国立歴史民族博物館西本豊弘先生、岡山理科大学総合情報学部波田善夫氏、基礎理学科名取真人氏に比較標本の提供と御助言、御教示を頂いた。また、東北大学文学部須藤隆先生には、終始様々な御指導、御教示を頂いた。記して感謝の意を表します。

参考文献

- 阿部永他 1994 『日本の哺乳類』（東海大学出版局）
- 阿部宗明 1987 『原色魚類大図鑑』（北隆館）
- 阿部 恵、遊佐五郎ほか 1986 『田柄貝塚』Ⅲ 宮城県文化財調査報告書111（宮城県）
- 今泉吉典、岡田弥一郎 1983 『学研生物図鑑 動物』（学研）
- 内田 亨 1979 『新編日本動物図鑑』（北陸館）
- 内田 亨他 1972 『谷津・内田 動物分類名辞典』（中山書店）
- 大泰司紀之 1980 「遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節査定法」
『考古学と自然科学』 13,pp.51-74
- 大泰司紀之 1983 「シカ」 『縄文文化の研究2生業』 pp.122-135
- 大泰司紀之 1984 「ニホンジカの比較骨学および地理的時代的変異」
『古文化財の自然科学的研究』 pp.555-558
- 岡田 要（校閲） 今泉吉典（著） 1960 『原色日本哺乳類図鑑』（保育社）
- 岡田 要、内田清之助、内田 亨 1965 『新日本動物図鑑』下（北隆館）
- 金子浩昌、牛沢百合子 1980 「池上遺跡出土の動物遺存体」
『池上・四ツ池遺跡』第6分冊・自然遺物編,pp.9-32
- 金子浩昌 1984 『貝塚の獣骨の知識 人と動物とのかかわり』考古学シリーズ⑩（東京美術）
- 蒲原稔治 1966 『標準原色図鑑全集 第4巻 魚』（保育社）
- 小池裕子、大泰司紀之 1984 「遺跡出土ニホンジカの年齢構成からみた狩猟圧の時代変化」
『古文化財の自然科学的研究』 pp.508-517
- 小池裕子、林 良博 1984 「遺跡出土ニホンイノシシの年齢査定について」
『古文化財の自然科学的研究』 pp.519-524

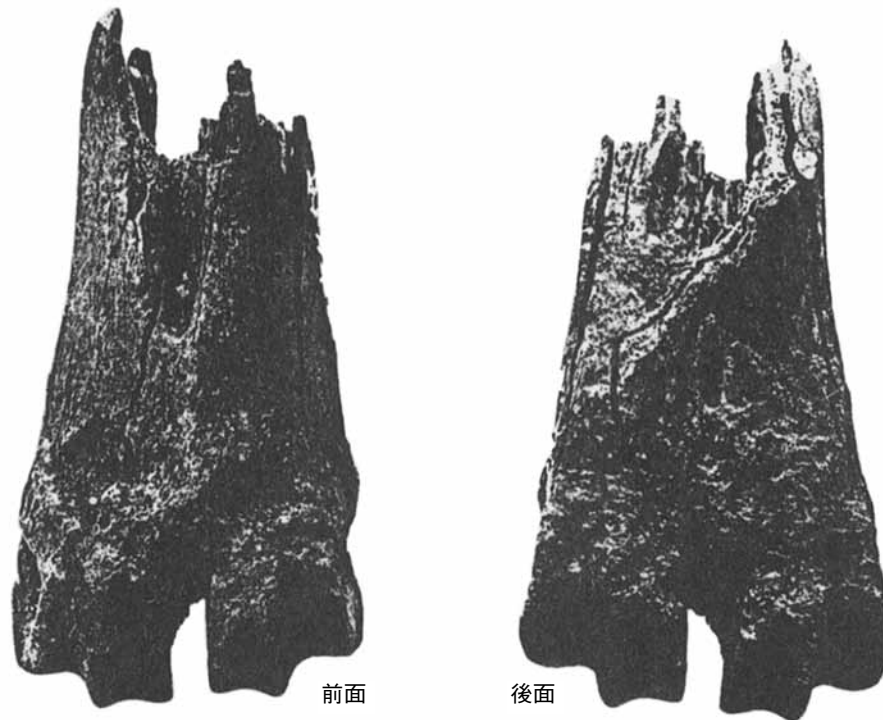
- 後藤仁敏、大泰司紀之編 1986 『歯の比較解剖学』(医師薬出版株式会社)
- 進藤直作 1968 『瀬戸内海の鯨の研究』(神戸市医師協同組合)
- 高野伸二 1982 『フィールドガイド日本の野鳥』(日本野鳥の会)
- 常田邦彦 1982 「イノシシの分布」『アニマ』118,p.46
- 千葉徳爾 1964 「日本列島における猪・鹿の生息状況とその変動」『地理学評論』37,pp.575-592
- 西本豊弘 1989 「下郡桑苗遺跡出土の動物遺存体」『下郡桑苗遺跡』pp.114-132 (大分県教育委員会)
- 西本豊弘 1991 「縄文時代のシカ・イノシシ狩猟」『古代』91,pp.114-132
- 西本豊弘 1993 「弥生時代のブタの形質について」『国立歴史民俗博物館研究報告』50,pp.49-70
- 西本豊弘 1994 「縄文時代のシカ・イノシシの大きさの変異」『動物考古学』第2号pp.39-52
- 林 謙作 1986 「亀ヶ岡と遠賀川」『岩波講座日本考古学 5 文化と地域性』pp.93-124
- 林 良博 1983 「イノシシ」『縄文文化の研究 2 生業』pp.136-147
- 林 壽郎 1968 『標準図鑑全集 動物Ⅰ』(保育社)
- 林 壽郎 1968 『標準図鑑全集 動物Ⅱ』(保育社)
- 春成秀爾 1993 「豚の下顎懸架 - 弥生時代における壁邪の習俗」
『国立歴史民俗博物館研究報告』50,pp.71-140
- 藤田三郎編 1986 『昭和59年度唐古・鍵遺跡発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要4
- 丸山直樹 1981 「ニホンジカの季節的移動と集合様式に関する研究」
『東京農工大学農学部学術報告』23,pp.1-85
- Angela von den Driesch 1976 " A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites" Peabody Museum Bulletin 1,Museum of Archaeology,Harvard University

別紙1 属性表

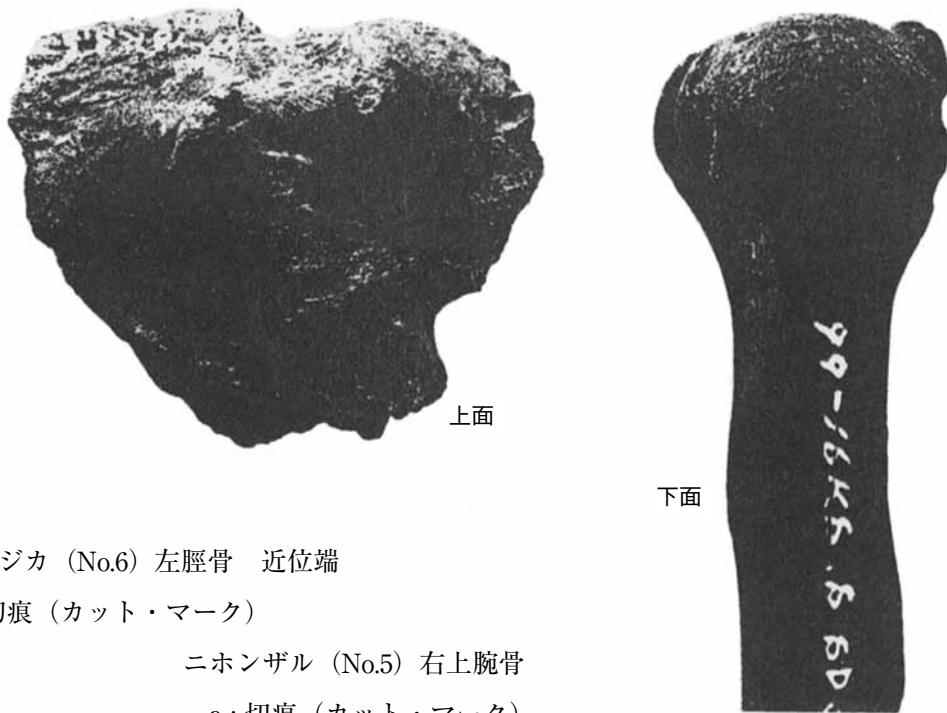
資料番号 (No.)	層位	遺構名	大分類 (綱)	小分類 (種名、タイプ)	LR	部位	部分	成長度 (化石化)	色調	加工痕	残存長 (mm)	備考
1-①	Ⅷ	SK14	哺乳綱	ニホンジカ	?	角	骨幹部	1歳以上	白色	不明	-	
1-②	Ⅷ	SK14	哺乳綱	イノシシ類	L	肩甲骨	近位端	(未了)	白色	不明	-	
1-③	Ⅷ	SK14	哺乳綱	ノウサギ	R	踵骨	完形	(了)	白色	不明	全長 25.50	
1-④	Ⅷ	SK14	哺乳綱	中型	?	不明	骨幹部		白色	不明	-	
2	Ⅷ	SK 6	哺乳綱	中型	?	顎骨 (上下不明)	骨幹部		白色	不明	-	
3	Ⅷ	SK31	哺乳綱	イノシシ類	R	下顎骨 (M1・2)	骨幹部	(萌出・咬耗) 5歳程度	茶褐色	不明	白歯列長 35.20	
4	Ⅷ	SK31	哺乳綱	ニホンジカ	L	白歯列 (P2~M2)	骨幹部	(萌出) 2.5歳以上	茶褐色	不明	白歯列長 68.45	
5	Ⅷ	SD3	哺乳綱	ニホンザル	R	上腕骨	完形	(了)	茶褐色	切痕	全長 140.80	
6	Ⅷ	SD3	哺乳綱	ニホンジカ	L	顎骨	近位端	(未了)	茶褐色	切痕	残存幅 42.55	
7	Ⅷ	SD3	哺乳綱	ニホンジカ	R	肩甲骨	遠位端	(了)	茶褐色	切痕	関節横径 22.90	
8	Ⅷ	SD3	哺乳綱	イヌ	M	腰椎	ほぼ 完形	(了)	茶褐色	不明	前位関節 径16.75	
9-①	Ⅷ	包含層	哺乳綱	イノシシ類	L	下顎門歯1	完形	(萌出) 1.5歳以上	茶褐色	不明	全長 50.90	9-②と同一個体
9-②	Ⅷ	包含層	哺乳綱	イノシシ類	R	上顎門歯1	完形	(萌出) 1.5歳以上	茶褐色	不明	残存全長 47.25	9-①と同一個体
10	Ⅷ	包含層	哺乳綱	イヌ	M	胸椎	ほぼ 完形	(了)	茶褐色	不明	前位関節 径17.10	
11	Ⅷ	包含層 中面	哺乳綱	ニホンジカ	R	中足骨	遠位端	(了)	茶褐色	イヌ、 切痕、 スパイ ラル	幅28.00	
12	Ⅷ	包含層 下面	哺乳綱	ニホンジカ	R	踵骨	完形	(了)	茶褐色	不明	全長 77.54	
13	Ⅷ	包含層 下面	哺乳綱	ニホンジカ	L	助骨	近位端	(了)	茶褐色	不明	-	



出土動物遺存体



ニホンジカ (No.11) 右中足骨 遠位端 a:切痕 (カット・マーク) b:螺旋剥離 c:イヌ嚙痕



ニホンジカ (No.6) 左脛骨 近位端

a:切痕 (カット・マーク)

ニホンザル (No.5) 右上腕骨

a:切痕 (カット・マーク)

出土動物遺存体の破損痕跡 Damages on animal remains

第3節 下分遠崎遺跡出土材の樹種

(1) 資料

資料は、弥生時代前期末～中期中葉の木製品10点と、縄文時代の腕輪1点である。

(2) 方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロール（放水クロール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

(3) 結果

樹種同定結果を表1に示す。木製品は、針葉樹2種類（スギ・ヒノキ）と広葉樹5種類（コナラ属アカガシ亜属・スダジイ・クスノキ・サクラ属・アセビ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

表1 下分遠崎遺跡の樹種同定結果

番号	遺物	年代	樹種
No.14	板材	弥生前期末～弥生中期中葉	スギ
No.17	板材	弥生前期末～弥生中期中葉	ヒノキ
No.18	板材	弥生前期末～弥生中期中葉	スギ
No.3	鋤	弥生前期末～弥生中期中葉	クスノキ
No.20	柄	弥生前期末～弥生中期中葉	コナラ属アカガシ亜属
No.4	鋏	弥生前期末～弥生中期中葉	コナラ属アカガシ亜属
No.26	柱材	弥生前期末～弥生中期中葉	アセビ
No.21	柱材	弥生前期末～弥生中期中葉	ヒノキ
No.5	クイ	弥生前期末～弥生中期中葉	スダジイ
No.28	板材	弥生前期末～弥生中期中葉	スギ
No.29	腕輪（漆塗り）	弥生前期末～弥生中期中葉	サクラ属

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞が晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同姓、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同姓、単列、1～20細胞高。

・クスノキ (*Cinnamomum camphora* (L.) Presl) クスノキ科クスノキ属

散孔材で管壁は薄く、横断面では楕円形、単独または2~3個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ型、1~3細胞幅、1~20細胞高。柔組織は周囲状~翼状。柔細胞はしばしば大型の油細胞となる。

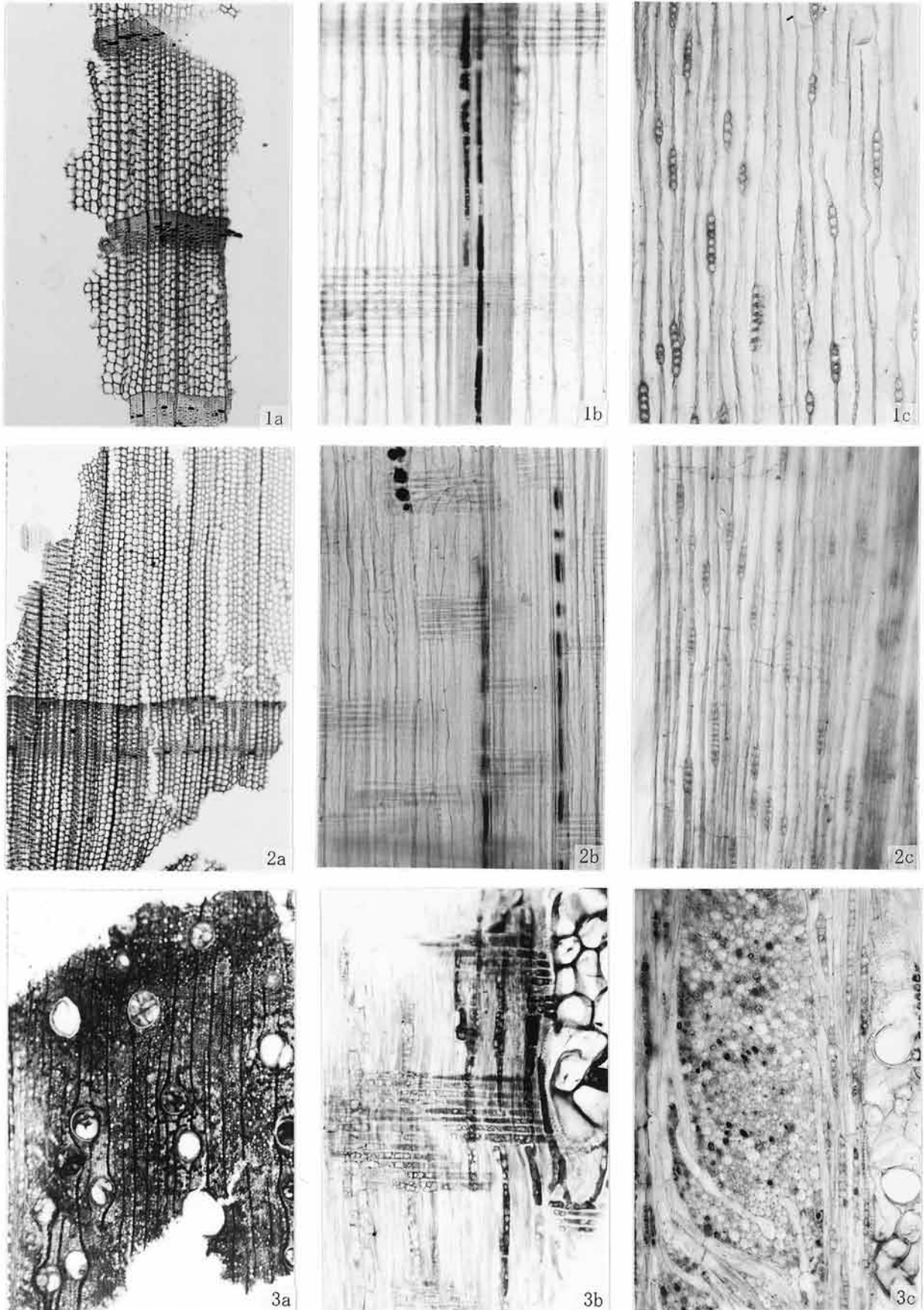
・サクラ属 (*Prunus*) バラ科

資料は保存が悪い。散孔材で、単独または2~8個が複合して散材する。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がかすかに認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1~3細胞幅、1~30細胞高。

・アセビ (*Pieris japonica* (Thunb.) D.Don) ツツジ科アセビ属

散孔材で、年輪始めに横方向に道管が揃うが、その後は散在、主に接線方向に複合しながら散在し、年輪界に向かって径を漸減する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列~階段状に配列する。放射組織は異性Ⅲ~Ⅱ型、1~3列、1~15細胞高。

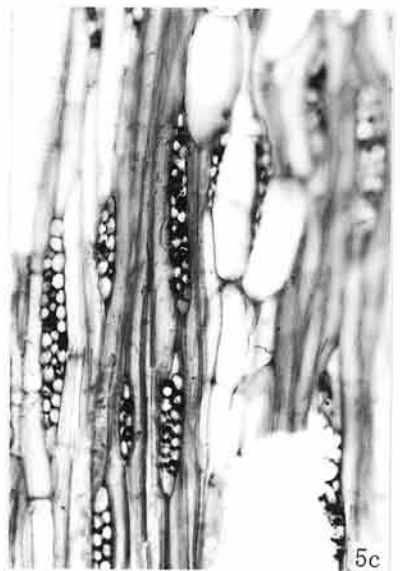
下分遠崎遺跡の木材(1)



1. スギ (No.18板材)
2. ヒノキ (No.17板材)
3. コナラ属アカガシ亜属 (No.20柄)
 - a: 木口 b: 柃目 c: 板目

200 μm : a
 200 μm : b, c

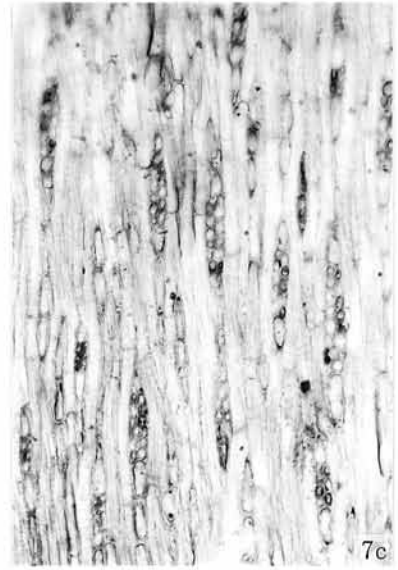
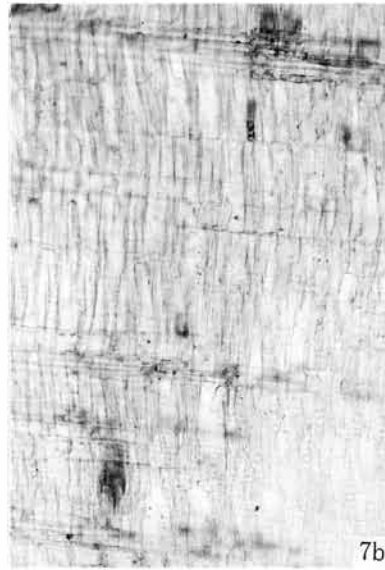
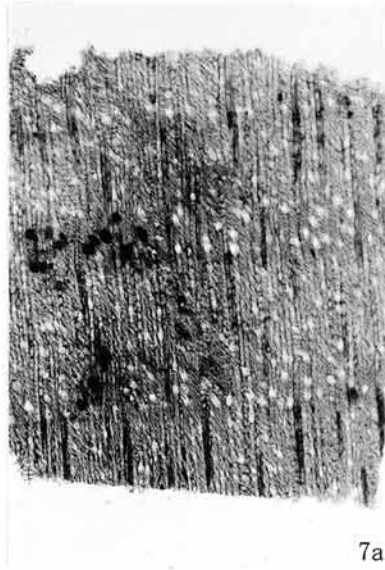
下分遠崎遺跡の木材(2)



- 4. スダジイ (No.5クイ)
 - 5. クスノキ (No.3鋤)
 - 6. サクラ属 (No.29腕輪)
- a: 木口 b: 柁目 c: 板目

200 μm : a
200 μm : b, c

下分遠崎遺跡の木材(3)



7. アセビ (No.26柱材)
a: 木口 b: 柁目 c: 板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c

写真図版



北区全景（北西から）



北区遺物包含層検出状況

図版2



北区遺構完掘状況（北東から）



北区東壁セクション



北区遺構検出状況



北区完掘状況（南東から）

图版4



北区SK1 完掘状况



北区SK2 遺物出土状况



北区SK3 完掘状况



北区SK2 完掘状况



北区SK6 土器集中状况



南区全景



南区遺構検出状況（東から）